

日間瑣錄

大正十四年七月下浣起筆

六

特別
14
1919
374



日間項録第六

大正十四年七月廿二日起筆

○初来多無く、案記の記集を觀後し、心印を
候す

自伏水到浪集舟中記 昂三

棕隱

茶室龜烟、吹碧漪、船家正是、午茶時、未
じ満蓬間座、於暮和錢解纜、原
酒旆茶檣又一渡、春雲鳥碧、未帰山、乘流
偏恐誤拈觸、轉艇、退行橋脚間

此の記を、七匠より巧み、目録の目録を
記し、老練の心家、あり、心不能也
半竹、春漲、滑、無聲、心、換、青、山、通、送、也



如路。長人易供。官問其出金成
起句也。佳書也。亦及いけるの如き

野道

春稀難暮。海江錢村。史橫管只飽。賦隔柳一
考呼不起。春潮撼替。夕陽船
元古亦定。景何人。七切の口。景。一。如。新。の。詩。
合。結。子

波天也。亦。聖。回

龍園蓮炬。為。采。時。得。意。胡。為。無。所。摘。流。為
憐。君。說。凡。月。一。生。奇。筆。出。天。涯

結句如吾

湖村夕鳥

湖心月出夜方奇。急出柴の整心。艦枝。一。山。所。秋
蓋。以。送。我。都。う。と。齊。紀。進。舟。時

轉統切實如を受ふ

○余地方。海の毎に人往て書を讀み。余出拙るんを
其境。こ。切の語を拾出して考するを例とする。與
到り。切實の語。續出することあり。顯る。臨を感す
ることあり。臨を感す。社。極。力。平。校。お。せ。る。の。語。を
錄。及。す。と。好。ま。る。也。酒。樓。と。越。す。語。校。書。に
了。語。ハ。飯。も。二。凡。と。難。か。く。知。却。難。き。ハ。旋。余。の
婢。の。為。め。語。を。選。ぶ。に。在。り。余。ハ。咄。嗟。新。の。境
こ。る。語。を。好。ま。る。中。に。柳。陰。深。家。柳。汀。烟。塢。
長江樓。等。あり。酒。樓。と。野。道。等。語。中。に。果。る

付一醉杯中竟舊春多情懷酒伴情因年少
 酒因境多此時此境此情酒貌昔將花共鬢
 鬢毛今與中爭新等有也為のよ出し字
 情中「嬈妍劍紅度綠死為即推梓却羞
 郎醉暈臉生不死美人自古如名將不許人
 間見白頭」等有、婢のはと書し字情中「靈
 種産無種彩雲出無根凡人裝成十分好不如真
 色一分好ゆ求無價寶難得有心郎最後
 の語妓の為のよまとまとま似さ、素人の女に情行
 を好し其のよの不可也也適のこ選語の難きし
 を定ふ新のの染左右を柳を板内縁陰柳まとし
 夏時最心執あり柳に関する語最心新の切

定と定ふ、柳蔭画梅、柳蔭染海、一屋
 柳の枝まの人、柳蔭風露、とと新
 情の酒梅、ととの語とるまべし、柳影龍梅
 七月廿二日録

○仿間を造り十牛圓頌の英詩を附し大正三年八月
 二出版さへはよめが、トントこの抄のよめ、出たことを知ら
 ざんば、書も評も知る人の手に入らぬので、書い、書
 松海の草、と評し和田恒福三心ある十牛と云く、と
 漢語七國歌七具のり、その上頌、英詩がぬめ、とある
 木收拾の彫刻七藝釘七念の入り、とあり日本紙の種
 本にある、編輯者として、松村八石の名が署してある
 の、代價の缺いてある所から推する、配り本とあるら

Forgetting the Bull
 But now the Bull disappears
 A solemn stillness reigns
 The night advances fast
 And lo! the moon shines
 bright.

Forgetting both the Bull
 and self.
 The Bull exists no more,
 The moon exists no more,
 The self exists no more,
 'Tis only nothingness that
 is.

虎角七珠味のある冊子がある、今忘牛と但忘の
 二箇に題する英訳をたに抄出

○睡眠の文は、他原保持の第一要件なる迄、葉を
 睡眠靈效あり、余の習候早く寝候早く起き
 り、六時迄の終入、其の外あり、其候を速するに
 就く、その時の万を要す、深更外も臥する時
 七折々、睡眠を得ず、其の外も寝ぬ早く睡眠の
 如術より、余午睡を好まず、午睡せんば、夜睡眠
 を得ざる也、睡眠薬を信りること無し、常つて大湯
 炭に、虎尾酒を煮、睡眠薬を用ひ、夜眠
 り、薬氣を説き、不快を云ふ、いんち睡眠薬を
 厭ふ、睡眠薬、酒の無実なるを云ふ、大
 隈炭の薬氣、幹なり、時十四五日間、本高開
 し、終始し、信人皆余のや余、うゝを抄出

へきを勤しむるも縁物と哀切りな秘訣は代こあ
らぬ早く帰宿して一瓶の酒を傾け熟睡を得比
この外ならぬ家長の日式の熟睡を得たることあ
り翌日氣分をたす可なり、その熟睡を得たること
く若水に耽けりし時をたす、若水(を)とす
造が睡臥を缺くる困しむ理りさう、余は(造)の
海の別荘に泊する教のこ及ふことあり、又(造)の
道邊に前夜睡臥を得しや否やを問ふ、否と答
ふるもの多し、余は(造)の目と眼も合ふこと
道邊に眠況や何と云ふ、我況の二字あり百の
道邊と云ふ、道邊の海に在ける四別荘は極
樹あり枝葉書梅を掩ふ、余は(造)は二載して

若木と長七夜睡の君何んぞと云ふ、又(造)の
者、睡臥するまゝ宿舎と滑るべし、我(造)の文(造)
よりさうしと云ふも、想ふに睡臥は三四の物あ
るが如し、初期の睡氣を催す身二期の半醒(半)
睡より、三期の泥睡の域に入る、四期の漸やく醒の
尚ほ睡氣を存す、此時(造)の起きること不可
なり、尚ほ枕を就て睡氣の由今も云ふを待つべし人
或は五更の睡を鶏助に起すや故りしとせり、曉天或
は二睡することあり、快滑ふ可なり、以上四期の経過中
尤も大切なるは泥睡期なり、人々倦り或は身体の状
より一日一二の物を狂りして泥睡(造)に入るものあり
或は終に得ずして日曉に起るものあり、一極(造)なり

泥睡期の睡眠ハ其時間短クモ亦能ク睡一
夜と云ふことありモ其効果あり、或ハ三時間睡眠を
以つて是れなりと云ふ人あり、此等ハ恐クモ泥睡を直
ニ棄テ得る人あり、余旅行毎ニ睡眠時間之を
少キキと感ず、其割合ニ對シテ不快を感ず、
一枯枯心内ニ居る人ハ或ハ泥睡を得る
其が故るべきと思ふ、此頃の旅行十二時前
に寝ることあり、新居ニ於テハ二夕夜ノ二時に
リシことあり、若シ家ノ内ニ居ル人ハ其
翌日の病人にんニ旅中ニ苦痛を感ずるハ寧
ろ一奇と云ふし、二時を過ぎキモ寝ぬるも尤モ五
時に起床するを例と爲シ唯此例外ありしこと一面

あり、二時半頃臥して前後不覚ニ寝ぬ受の未だハ
九時半過ぎしことあり、如斯ハ余の睡眠のレコー
ドを破るもの、或ハ十数日の睡眠不足を一筆此
の泥睡云々補正して以つとせんか、吾日旅中睡眠時
間短少所日ニ四時乃至五時ハ多クモ四十時間ニ
ハ到達候ハ得べきハ其の概なり、而モ泥睡數時乃至
十之八を候ハ得るとせんハ、泥睡ハ神也とんことを
禮讃せざる可也
其七月廿四日録
○此若賴山陽を往するもの利る處に在り、而モ其
余の誤りも指摘するものあり、亦余の見解を述
するものあり、唯此に於テ其誤りハ其誤りたるべ
からず、余の寧ろ非難を蒙ルヘシ他山の石と云ふこと

を欲す、余が知らざる材料と寄せ来ると快く、他の
修補の資に供せんとす、而してこれらも其の家々日々、
多々の評者、山陽に深く通じ、余の著に教へらる、
共鳴する、又、往々余の口を真似し、余の著を謂ひ
ざるもあり、真に其の如きことあり、所謂言者不
知者黙するの古言のこゝも、黙するものに必し評者
あり、吾ん其人と議論を闘はしむ能はざるを遺憾
とす、とて、頃者東洋文化雑誌に余の著を採り、
その後藤南堂あり、曰く山陽の事と叙し、評者、其
山の山陽大観あり、盛り浮山をも、随筆、山陽及
ハすと、又云く多くの山陽研究家、山陽の又、
二編して山陽の歴史に及らば、随筆、山陽従来

他人の筆を著ける所、多く筆を著し、此著に
挿り教を多くするもの少からず、又云く、耶馬溪の
風景美に就て議論少く、往々山陽を以
つて温美の筆を弄するものあり、随筆、山陽
の著者、此に就て公平の論あり、人を以て首肯せ
し、いと、爾堂、余が眼目とする不を、後破す、多
くの評者、之に云及するものあり、爾堂、著者の
忠僕といふ可也

七月廿四日記

○先來、故に親しいの杖を得ず、都下にて、大旱
也、唯に旅の恥の搭き、棄てし、いふ、御里に入らば、おの
から故に懐するの機あり、御里の一徳と謂ふべき歟
但に、故に懐する、調子、今、故に親する、親の

不のよの指は二代若く三代也、此二三代寧ろ悦ぶべし、
 老波を拉し来り酒席に坐りて殺風景を呈せし、
 庭へし、一又奈邊者危に解るるに、悔んて一
 妓余を拉し、此指をむす、此家亡友五峯の押
 妓の言を、余近年新居に浴ぶ毎に、此家就て
 飲むを例とす、武友を思へんとす、此の保に
 親戚栗林の末亡人を訪ひ、亦五峯の末亡人を訪
 ふ、此指の主婦を乞ふ、此指をば、余數人に曰
 く、此の何んを末亡人を見、この多き、屈指すんば、
 三人の多きもあつと、主婦の誰ん、るを問ふ、余
 飯と栗林の末亡人を奉け、他也云ひす、主婦、他
 の一人を問ふ、曰く、御事と、一笑す、此夜二三の

軒妓列の、一妓他人の髪、一指を切断し、る、このあり、
 一妓面部に傷痕を存す、このあり、其おを問ふ、
 一若衆と、此の九梳の飯を喫する、古高は若者を
 留め、考め、一笑を呈す、笑の怒を、觸ん、茶枝
 を投げ付け、ん、男傷すと、他人の髪、一指を
 乞ふ、この喃、情緒を視、目、其、終、余、
 此の、此の、此の、此の、此の、此の、
 若め、判決を下り、と云ひ、後、一、
 今夕何の、人を傷者三人を、
 の、左手の一指を傷け、綱帯を施し、あり、
 圓ら、さ、き、心、里、の、花、柳、に、
 かん、と、い、ふ、若、者、も、如、此、
 時、の、移、り、を、記、す

す、收多く終り余黙然とす。此の酒亦多めの味
味無きまある也。一棹多の程す。此の酒あり
潮波の舊縁あるを、初に酒、一收碎宿を備
けし後、酒に付ふらあり。此收春秋節、中七酒
云し、喜也。云く、貴客、自ら飲、酒を奉りし
收、酒を興へす。喜甚れ、湯を飲、即ち酒を合
し、床に就、酒を飲、酒の歴史あり。思、
少く酒に耽り、酒の歴史あり。思、
この酒、酒の歴史あり。思、
寧ろ、酒とす。思、
新島の地行、
酒粉の酒と酒氣を
此の酒、酒の歴史あり。思、
此の酒、酒の歴史あり。思、
此の酒、酒の歴史あり。思、

の附録とす

○閑に乘りて大所柱月の書き直し、源平物語を讀み文
完初進の條を後述し、
の酒ありと一笑し、且つ其條を物す
こゝに、高野の神護寺と云へる、和氣の松名が
創、こゝに四角の寺あり、其の寺、
荒るの中、埋せられたる、文、
思ひ、生、生、生、生、生、
神所法住寺院に、
瑞おの折、
完終りを待ち、
か、

かくの及後也我貧者無縁の方などといふも
雄山の祇園寺を修善(建)て佛法を住持
王法を新法とし衆生を利益せよといふ大教あり
況んや大慈大悲の表十善萬象の至りと
とか報す神奉加護し入らんさる口惜しき
するこそいひや大教の意故中聽せある可し
とを初進帳とさつと披け油子外人の大方
教りて神奉しといふくは後みよけり
寄附金募集に此の意氣無る可らぬ
のありて教に江戸時代の年中行事の一……
江戸の氣風は合つたれ陽氣の行事、鎌屋
といふ烟土の萬治開業と標榜してあるのを

又七カク古といふものあることが知らぬ鎌屋の
同業が玉屋といふかあのだか今も漬んで仕舞つ
た自分の此の何れ教をえればよくは、明治八年
東京に出て来た頃であつた、~~既~~三十年七前のこ
とである、其際唯此群衆の雜習を見れば
ど、~~何~~つを感するも、實ハ川開の興ハ何
三分入七分出ても、~~未~~雜習多し材が大
日景氣を透くのである、一昨廿五日の川ひらき
友人に招え、~~井~~柳橋の邊清の舟に
おし、~~舟~~杯を奉けり、大教をえ、此夜の
人生、三十萬人と注せり、電車ハ六時限り
運轉を中止し、~~舟~~上人を以て文塞し

此方西より人を満載し船が各方面から橋の左右に
 集まるとが昔一の扱へ尾根船で酒や妓を載せし
 よの目一いつ七見のさうれ、勿論弦歌船中も湯
 ぐく如き酔興は無く、水上警憲察船の監視の下
 此岸南に見物する扱る観があるに或人と此の扱
 し酒が中事実禁をえ比趣があつたの、浦外
 昔人衆の多い割合にあつたが昔一ハ昔
 毎ニカキヤタマヤと喝采し比よめたが此はハ唱
 采を忘れたかの扱に人ハ黙視し比こハ必竟酒
 力を缺いた若めあつた、或ハ喝采の言葉を母持
 った合いこいさの若めあつた、古昔遊又萬歳と
 叫ぶ譯もあつた、健康一と連呼するも

都案内

一回	三回以上
二回	四回以上
三回	五回以上
四回	六回以上
五回	七回以上
六回	八回以上
七回	九回以上
八回	十回以上
九回	十一回以上
十回	十二回以上

夜間券内 銀座一八九〇番
 金、銀、銅、券、代、用、も、差、支、は、り
 御都合では集金員御上
 御都合では集金員御上

SECOND HANDS
 古着類 洋服類 貴金屬類
 質物代金 著買 入買格破

高松婦人急募

社會的に最も有意義なる政府奨
 勵文化事業擴張の爲に模範的婦
 人を急募す一月學習(中手賃
 一〇日一圓)後義務に従事せし
 む願者速に
 京橋區八官町三
 生金部

女裁縫師 至急入用
 大非別荘行世居位迄の方委細面談
 京橋山下廿
 桃の家

女給少年
 而談保薦者同伴来店あれ
 京橋區南船場町皆川ビル内
 高級食堂 十ノト

ボーク
 三人急募
 素人でも可日本橋新町二ノ
 菜人にて

女給至急入用
 十八歳以上廿三歳以下但通勤の事
 市電新宿角停下車三歳以下但通勤の事
 新橋ホテル食堂
通勤女給 五名入用
 経験ある者神田紺屋町六西洋料理
 今川小學校前横 スプロー
女給さん 至急募集
 京橋區具足町電話銀座五二九九番

コック見習及女給

至急入用 四名 京橋區本町十八花柳界
 電話四番 三六七四
 多嘉良亭

下コック 至急入用
 本人來談但午後一時より
 銀座區本町 レスト 松月

女給さん入用
 小石川區春日町交又點前
 電話小石川三三三
女給さん 數名入用
 二十歳以上 主婦人にて可
 生八郎樂坂上 カンヤツダ

女給さん 至急募集
 京橋區具足町電話銀座五二九九番
カンエーハナヤ
女給五六名入用

の火
 くる
 尾心
 一
 答
 人
 此
 此
 此
 此
 此

し流るゝ見物も観が有るなり或は此の流る
 酒が由事な、禁受は趣があるなり酒
 其人多く割合に有るなり若し一
 舟にカキタタキと喝采一は此の流る
 米を流るゝ故に此の流る一は此の流る
 力を流るゝ故に此の流る一は此の流る
 此の流るゝ故に此の流る一は此の流る
 此の流るゝ故に此の流る一は此の流る



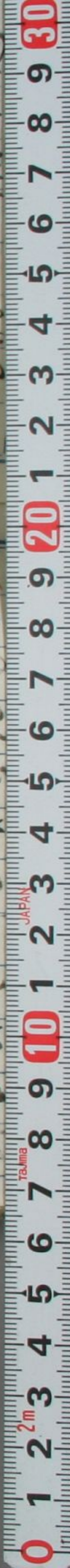
隅田川夕涼み
 喜多川歌麿筆

◇……繪の夕涼み情も恋ら
 れぬものである。殊に隅田川
 隅田川の夕涼みには大きな屋形船
 の家上と船の中と、天地を二
 つに分けて、あの麗な男女の
 人物を面白
 く観たの
 が有るであ
 るが、隅田
 川の上流を
 舟に、河
 岸の涼みを
 見せた此の
 作は、一層
 情の深い
 ものである
 ◇……此の
 川の中央に
 火が、手先
 を描いて上
 て一つはせ
 屋形船の二
 燈を吊つて
 隅田川の美
 を注いだも
 のである

◇……その橋の袂には、前橋格
 子の障子屋敷に、屋敷を練登り
 で包んだ遊覧も居るであらう、
 白木の舟舟に、野郎あたま
 の賑あかい紅梅の若衆も見
 えるであらう、たゞ黒い線では
 あるが、面白く描いた橋の上
 は、無数の人々が、黙々として
 うごめいてゐる
 ◇……隅田川の中央には、打上げ
 火が、手先からクルクルと曲線
 を描いて上へ登り、二つに分れ
 て一つはせんまい式に輪を描く
 屋形船の二つ三つ屋形船に紅提
 燈を吊つて、遊覧を添へて居る、
 隅田川の美人こそ、歌麿が最も意
 を注いだものである

◇……隅田川を手にした二人は、
 何れも隅田川の遊覧であらう、歌
 麿式の柔かい線に包まれて、何
 ともいへぬ情を味はしめる、
 遊覧持つ小兒の手を引いた町家
 の女房、その小兒の背に三升の
 圓筒さしたのも歌麿のもう一つ
 の技巧である
 ◇……左端、大のしこの提灯もつ
 た小女、それから流遊、遊覧の
 女房をして此の九人の遊覧は、
 家並の黒い直線と、橋の曲線で
 ある地上を遊覧の流しにしたのも
 何處となく気が利いて居る
 ◇……夕涼みの浮世繪はまだ春
 信にもある、清長にもある、清
 長の妖艶と、春信の品位とは其
 に其清長であらう、併し此歌麿
 の意味はより一歩を進めて居る

隅田川夕涼み
 喜多川歌麿筆



るから濡い毒かつた〜い江戸時代〜と昭和が多
 かつた、見物物や尾や、いろくの夢の物や尾が、河津岸、
 あつたよな、うん、尋い今〜と、江戸時代、
 納涼物か、式十口七つ〜と、煙花の唯一の良縁、
 じきろ〜と、今、唯一の良縁、一日限り〜と、

七年四月十日
 女良薬 無代て進玉
 月経一回、月経異常、婦人病、子宮内服、心道、
 七拾回決算帳、鐘紡株式會社

を弄するをいって川淵と称することゝあらた、女
 の良薬のありき〜と感もさるを得ぬ、い〜と時
 勢が変りし名、都下娯楽の〜と納涼お紙
 と太鼓をも七〜とこの〜と維持〜とある多
 のあり、式〜とこの時代お紙に〜と変りし名、
 ○拙著『地味』頼山陽の才四版を出すの〜と多分、
 といふ〜とこの〜と先頃、秋田新聞を發行し、
 費して物事〜と河津岸〜と一冊の山陽が出版部
 ち〜と運送して来た〜と、削いた見〜と、
 ちある〜と一冊の巻末、和四萬を
 博士の細評が跋に代へて収め〜とある、
 此所〜とある、此の批評を跋に代へる〜と、



…るこのに今
味涼の戸江

【一】

び遊舟の川大

「夏の涼みは兩國の…」と
我等が昔の狂言詩人は歌った
が、江戸人の歡樂の一面は、
實に大川における夏の船遊び
であった、東京灣の金波銀波

に洗はれた都、都島が心のま
まに浮んでた清らかな水を
た、た田川川筋の江戸
戸人には夏は實玉のやうに貴
かつた、そこから数々の江戸
趣味や江戸藝術は獨特の地方
色を豊かにして泉のやうに湧
いた、それ等は惜しいことに
今滅びゆく悲哀を味つてゐる
た、かうした廢殘の藝術や趣
味やの奇特な研究家やかくれ
た保護者や名匠が、あちこち
に殘存してゐる。ビルデング
文明の殺到を前にして、過ぎ
去りし江戸文化をなつかしむ
者に取つては、之等の人々は
實に尊い人々である、先づ之
等の人々を尋ね廻つて紫色の
江戸の夏をしのんで見る…

今では船遊びといへば兩國の川
開き、川開きと言へば大煙花を
聯想させて、夫もつい先夜のや
うに年一回の行事になつて了つ
たが、之は主客顛倒で往時は大
煙花は船遊びのほんの餘興に過
ぎなかつた、川開きといふのも
今の富士山開きと同じでそれか
ら何箇月かの夏の行樂舞臺の三
番さうをつづめた行事であつた
抑も川開きは「こゝろまよりかへ
つても實は武江年表」呼ぶもの
の本に出てゐるが
八代吉宗の享保十八年五月廿八

日本神の祭禮の日からでそれか
ら八月廿八日までの三ヶ月間は
所謂川開きの期間であつた、も
ち論煙火の五彩の光は毎夜人を
呼んだ
當時兩國橋を中心とした兩岸
(この西には水端へ乗り出し
たよしす園心の「並茶屋」がし
つ比し船燈ろうや美女を配して
人を呼べば、かるわさ、からくり
猿芝居、大人國、小人島、化物
屋敷、つなわたりなんご皿を演
かす様な見世物がはやす
水面にはすき間ない程美しい光
の屋形船がけんらん目もあやな

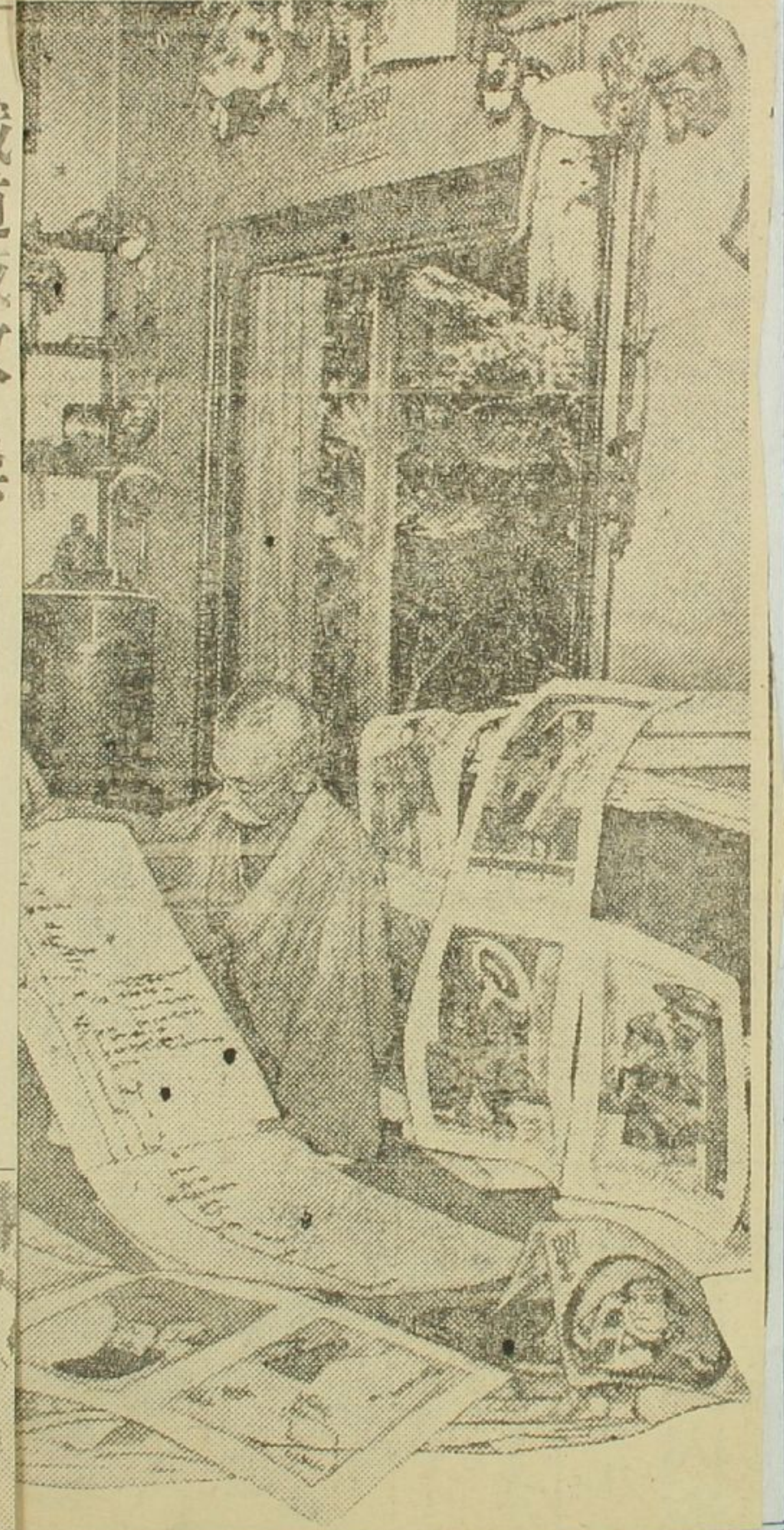
男女の群をのせてたよひ、物
賣り船がほらかな聲でうるつ
く、果物、白玉、三ころてんの
香に、茶屋はもよりの橋から岸
から人波は夜毎になだれ打つ盛
觀を呈したといふ
其角が「此の人数舟なればこそ
涼みかな」言つたが芭蕉は「こ
うに二雨が花火間もなき光か
な」言つてのけてゐる、と思
へば「吹けよ川風、上れよス
テ、中のあるじの顔見たや」言
つづき碎けた小歌もある
最も享保以前でも船遊びの盛況
はもこよりで兩國橋の出来た萬
延三年前後から、老樹三澤大

名屋敷の高城ですごい位の兩岸
の景を稱へて當時の人はよく
船を呼べた、乞食や泥棒のあつ
たは今さかばかりはない
さて川開きはやがて煙花で代表
され元治以後年二回の餘興とな
り明治十七八年頃から現在のや
うになつた
むかし兩岸で大勢力あつたのは
日本橋、兩國橋、柳橋からあの
邊一帯を占めた船宿で萬西、大
黒屋、武藏屋など(天明年代)の
大茶屋もいまはあきかたなく消
れたのはものかない
(この項つゞく寫眞は兩國の兩
國川遊びの圖、幸尾隆太郎氏蔵)

るから濡の濡かつたといふ江戸時代
かつた、見勢柄の尾やいさくの夢り
あつたよな、さる事いふ、今、
納涼の火の七つ、さ、煙花の唯は
さきさるる、今、唯は一日限り
な、

を弄するを以て川開と稱すること
夏を感するを得ぬ、いさく時
勢が衰へて、都下娛樂の一と
と大衆をこころいへ、維持し
の、式、今の時代おぼろ
〇北甚他、兼頼山陽の東四段
い、あ、と、先、秋、日、新、泊
費、し、物、京、す、と、河、も、一、舟、の、山、陽、が、出、版、部、

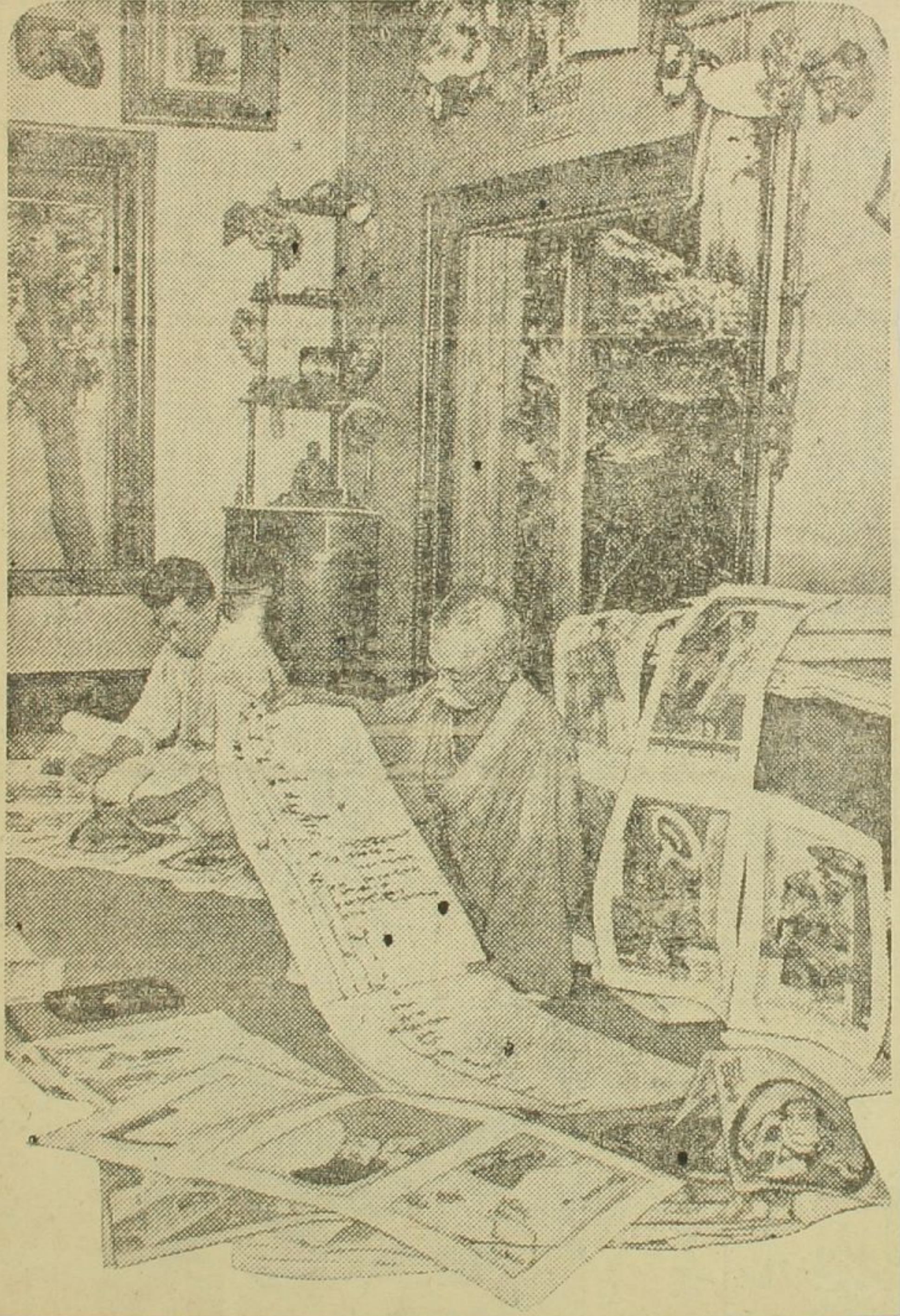
かつて指回をして置いたものであるが、こゝから早く四
 版が出ようといふ夢も思はさうな出版部員の泣
 き、日くドシク泣きがあるのを、大急四版を伝わり
 やく品切と断つて、こゝろく満人かといふおた、何
 不景氣濃厚が大抵古物、去るぬ出版部
 の七坪の若者のことき、さう一向去るぬ、
 ラジオの古物と拙著のみ、不景氣取らずと
 去るぬ、去るぬの感、去るぬ、
 の去るぬ、こゝに左の如き、同か出ておる、去るぬ、
 後、去るぬ、去るぬ、去るぬ、去るぬ、去るぬ、
 の去るぬ、去るぬ、去るぬ、去るぬ、去るぬ、
 ことか、こゝに、二人の助手を使つて、何れも



鐵道減收に祟られて
 續々廢業する運送店
 僅か半年間に四百餘軒
 鐵道側は自然淘汰と涼しい顔



趣味の夏



錦繪の整理に暑さも忘れて……坪内博士

海軍省印刷局、梨園風俗見立、版式書式書風といふやうな大々的な表をつくつて助手の書生さん

月ほど前から始めたんですが、なしら寛政のころから明治廿七年ころまでの三萬枚から整理するんです

た「これが完全に整理されたら直接関係の方にもすぐわかる様になります」と、成功の暁を頭に

かつて指圖をして貰ひたいのであるが、いんま早く出版が出らうといふ事でも思ひさうな出版部員の話

抛擲し自身を衝にあつてゐる道徳の熱心と
リ性ハ説くも野暮多し、為中音扱方面から恐ら
く足利金ハ此の坊に費すがち南を得ておるとい
ふて早大に缺けを了結を志さうと披し過るゝ
を購つて補充してゐることゆへに全体此の錦
絵にも道徳が甚だ研究の足る早大圖書館に
きんといふから、自らが彼長時代より牧草を採
又七とゆへに四ヶある同に購ひ入れしものある。志
望此れをせしめられたるす其儘に置いた。研究上價
値の無いものであつたらうと見る。このとき人を得
せんば分敷かを通り出来らるゝ此の熱心は費用の
可なりか、ついに七、此の坊に大なる價値を添く

此の道徳の努力の在りしを以て得ぬ
道徳漸やく熱心地を了つた。此の坊に
の仕子の為の記録を七月後に入れ、七月三十一日
〇一昨の苦執を思ひ大段差戻の傳記稿を
翻讀し才二篇才一篇を二六条に譲りしに、
此部令に折馬由也が擔任して稿を以つた所である
が、蘇雅用を了るべきもの。更なる高須に書き替へ
せし所である。此部令に差加中央政府に入り至難の
状況の向ふあり、地租も改訂し、回債も償却等々
入苦戦したることあり、大久保木戸が洋行の留守を
守つたこと、其の留守に征韓論の勃発したること、
ろん茅が動搖するつて、民権論が興起し、終つて

全開設の議がおこり、十四年改変にむくまむたを
錯綜し、侯の経歴中尤も志のつかしい事がある
の割合に、侯自身生前の事として語らざる
ものが多い。侯の著者、最も苦心して志を
し、通篇六章、これを相馬の初稿に較べると筋
からいへば、文章もより、亦無駄な引事、うき
優うな主優つてあるが、妙に、二章の問題
が問題だけに乾燥し流れる趣がある、こゝより更ら
ぬ一工夫を要する。征韓の役の問題の、就して先侯
の立場が、事実に鮮明なものである、事實
征韓を名とし、清長が参る、其の戦の、為めは戦つ
た、裏面に、復施子書信が伏してある、先侯も

枚挟みとする、この頃、困窮する相馬、そのが保し大
体、侯の為め、回復の策を揮い、する、その
の候、出来てあるが、その、材料の補給を要
する、侯の、思ひ、十四年改変に、むくまむたから、事
の爆発、先侯の、三章、の、策者、が、全力を、集めて、以、丈
に、侯の、案を、解し、柳、案、快、を、呼、び、ある、もの
がある、志、か、し、此の、三章、も、為、説、練、を、要、する、先侯
の家、に、存、する、書、信、類、を、し、此、侯、の、材、料、と、な
る、もの、が、あ、る、と、い、う、事、が、使、い、い、る、もの、の、一、面、面、面、に
ある、もの、は、亦、木、高、行、の、日、記、に、此、改、変、を、説、明、する、こ
と、に、役、立、つ、た、こと、を、痛、感、し、て、悲、しく、此、の、事、変
は、先侯、侯、の、不、幸、大、切、な、所、に、侯、の、同、僚、の、具

の軽重を問ふ又この在るから或るもの充分の
著議考量を要する
七月ある記

此稿をこの稿の編輯行程、一稿控を生じたこ
との附記を要する、最初の稿を三年間に印刷
まひ満ちます元であつて、昨年の末を中巻
一冊に付の組上つた譯文、全部の首稿は五月頃迄
二巻惣つたから、順次印刷、四七は六月頃
の三巻組上り、とらうに譯文もあるが、爰に面
倒を生じたのは、先著の關係の深い武富久の
等にも信じておける不満のせい、此ことせし、不
満の根本は、まことと文体とあり、次きうと事實
の如くもある、個物とこと、この二編、其

業に、寧ろ免れ難いこと、生きた關係者が
存してある時は、充分其人の満足を持し
得ることを心すること、言ふまでもなく難い事、
あつた、列した山陰の文体、懐んどうの先輩が
文章、満ちてもあつた、このことも寧ろ南の如
く、唯比半に正解をまことと乾燥無味の傳
記を心とせよ、まゝの格、お困難の多し、
あつた、まゝの傳記を要する、まゝの流布
を固る、まゝの相應の筆下の働きの要する、
譯文が、まゝのまゝを、自ら筆著者の主観を
出さる、まゝの、まゝの、先著の、
あつた、まゝの、まゝの、先著の、
あつた、まゝの、まゝの、先著の、

走しといふ説は起り、その校訂者と久松に擬し
て見れば、久松の先鋒利産を以て括ぬとあ
つて強く、ことごとく、久松外の人たる所から
往向現業者として先鋒の持道可を交
け、文合書き直さし、あること、あること、これら
め、終定する少くとも半年歳を正し、さし、仕未
とす、自分兼に中心、一時責任上六月を限
りし、責任の解除を申出た位は、あるが別に
執筆、者を換へ、さし、あること、あること、
読み直さし、さし、さし、此の半年間に出来、さし
け、訂正すること、を力め、おろ、さし、武部七
う、勤勉、を存、校訂して、ある、ため、

誤謬を正し、此所も少くとも、尤も議論のある
各章の説、編者の主観論を出来、限り
省く、ため、各冊の首部、其巻全部のこと
概説するの方針、改ちること、さし、此問の
苦心、一トあり、無つれ

○協調を一身有餘持債し、未だ加藤内閣の協調決裂
の日か、未だ、こんな別、不思議、さし、初めから強引、さし、
と、ある、加藤首相、弟、憲法、此の決裂の一幕を、
と、単獨内閣の樹立を期待、さし、こと、さし、さし、さし、
一、政友會の衝突と、さし、抱念、心中、を、さし、加藤の単
獨内閣を、妨げ、んと、心懸、を、練、つ、こと、さし、想像、と、難、から
ぬ、全体が、弟、弟、一黨を、率、ある、さし、改、友、を、関係

いしてゐるが、事實第一黨の主張を押し通して来たと
ある、手本の閣政及出身の権々三人の閣僚が、財政方針
に異論があつたといふ、強ち内閣不統一の故を以て
総辞職を命じてゐる、といふ譯もある、を、主流と辞意
を呈して、三人の政友閣僚が辞表を出さぬのを、對照
すると、爰に加藤の主流と、か愈々鮮明とする、議者の向
佐を博して、免とせ、政友閣僚が例のこゝろ、小策を
弄すること、激者、非難した、と、政友會ハ此の衝
突と、政友本黨と、應ニ無ニ提携をと策して、その
深意、いふ、元老の固執、を此の支救を
：奉けしめんと、いふ、元老ハ議会の解散
と欲せることが、今の、而も、加藤、一軍、備内

閣を組織せしむる、解散ハ早晚免かぬ、といふ、
政友本提携の、掌：内閣を組織せしむる、ハ
政局の安定を得る、：庶幾しと、こゝろを以て、元老を
釣えんと、いふ、唯、此の、政権を握る、の、み、執、中
一、閣事を、玩、小、徒、輩、の、小、策、ハ、いつ、七、此、の、後、の、ま、あ、元
老、性、々、此、殿、ハ、い、る、こ、と、ハ、既、往、に、あ、る、か、ら、此、も、七、或
ハ、横、車、を、回、す、物、な、り、こ、と、ハ、い、ふ、ま、い、か、と、一、時、を、等、を
い、れ、老、い、ち、た、え、元、西、園、寺、が、一、人、ハ、決、し、重、牧、咄、内、在、
を、招、致、し、て、相、談、が、あ、る、と、い、ふ、を、等、を、一、會、を、其、等、を
氣、味、い、せ、以、て、流、石、と、え、元、と、内、大、臣、ハ、横、車、を、回、し、
一、あ、る、う、ら、に、大、命、ハ、再、代、が、あ、る、と、い、ふ、茲、に、學、獨、の、
閣、を、見、る、の、政、取、と、ま、り、に、折、角、の、政、友、等、の、小、策、

も形泥に帰し、非難攻撃は政友に益々集まつた。政友は
流転しつゝある時、新聞新報すく極端に記つて政友を攻
撃してゐる。朝日や日経や其他有力の新聞も、皆政友
の陋者を非難してゐること、勿論に、いつて、慶應の
この頃の元老が慶應の元老の今も及が始めて、あ
る、當分の事をも、これからといふに、慶應の、筆もあ
つた、元老が慶應の元老といふ、十一、奇に、元老
が危殆視さん、自有害無益視さん、とある、一、証をも
見るべきである、何んといふ、元老の内面、真面目
目、四政を料理してあるの、比、その仕事、の、いま
も半余である、内、これと慶應さん、と、天下の、議者
の、許す、つゝ、所、の、流石の元老、も、良心に支配さん、

と見ると、政友会、策士の、の、所を、や、く、加、あ、が、先、手、を
打つ、た、為、め、の、策、が、行、い、ん、う、う、に、い、の、或、然、と、荒
し、辭、職、を、決、め、る、事、も、あ、り、な、い、も、請、願、日、を、請、ふ、事、も、あ
り、あ、つ、た、と、此、間、に、策、士、の、形、勢、或、の、功、を、奏、す、と、い、ふ、も
知、れ、ぬ、先、前、政、友、會、ハ、頻、りに、策、士、に、敗、れ、た、世、の、形
勢、と、う、つ、て、ある、政、友、と、政、本、提、携、の、こ、と、も、内、閣、が、其
手、を、入、ら、ぬ、と、あ、つ、た、と、ア、テ、に、う、つ、た、と、い、ふ、ハ、あ、る、の、也
八月二日午前記

○文化文政の、演、習、原、の、娯、楽、を、い、は、し、文、藝、の、比、し、さ、え、
の、こ、の、あ、つ、た、こ、の、地、を、疎、ら、し、く、も、無、かつ、け、れ、娯
楽、の、形、勢、を、い、は、す、く、つ、人、を、娯、樂、す、と、い、ふ、こ、の、こ、
ハ、隠、れ、た、事、の、こ、と、を、い、は、す、也、合、和、品、や、華、下、談、に、長

しよあがみは、南時ハ流辰、赤か古原ニ通つて、
い、婦婦七准に、枕席を孝の、支の、しきつた、
地、漢禱を心、この、おん、を、自、方、の、を、生
時代、即ち、政、治、を、さう、り、を、お、に、位、に、あ、る、勿、論、に、政
度、に、於、て、ま、ん、か、あ、つ、た、い、わ、い、て、珠、ら、し、き、う、な
い、ふ、を、の、こ、と、い、う、の、松、島、屋、の、粧、と、い、ふ、婦、婦
の、こ、と、い、五、山、中、禱、法、を、勤、を、を、あ、る、浅、号、寺
中、ま、い、北、山、が、人、丸、の、ほ、の、し、と、の、名、の、海、の
朝、衣、を、自、者、と、し、刻、せ、し、め、た、碑、も、あ、る、自
か、ハ、初、め、に、其、の、肉、書、を、流、山、天、帝、ニ、示、さ、ん、と
又、此、の、い、先、次、の、こ、と、も、あ、る、か、中、井、敬、儀、ニ、就
て、答、へ、ん、と、い、ふ、は、る、ま、い、で、浅、号、寺、北、山、の、碑、か、あ

さ、ま、い、ま、中、井、か、目、也、が、人、が、あ、る、こ、と、を、い、ふ、て、あ、る
あ、る、ま、者、の、筆、其、男、風、心、唐、物、を、考、へ、に、為、め、あ、る
時、一、層、お、て、え、や、し、と、い、ふ、か、新、物、か、あ、る、か、あ、る
か、う、江、尾、ハ、オ、も、に、時、也、其、方、原、に、北、世、と、今、一、枚
書、か、せ、ん、ま、ん、を、書、書、法、に、収、め、て、あ、る、自、分、
ハ、天、帝、ニ、示、さ、ん、と、い、ふ、即、ち、其、の、心、然、内、の、こ、と、を、い、ふ、あ
つ、に、雅、語、を、慈、雲、字、を、文、卷、と、い、ふ、に、容、顔、ハ
花、不、如、と、い、ふ、人、ハ、名、め、て、あ、る、か、ま、海、ハ、さ、う、り、を、也
あ、る、圓、貞、の、い、に、若、奴、三、十、六、佳、機、の、あ、る、こ、と、あ
こ、も、う、に、い、ふ、未、に、一、見、を、得、え、の、天、帝、ハ、北、世、を
偉、ら、さ、う、に、吹、聴、し、ん、或、る、能、徳、に、の、を、を、あ、る、か、ま、ん
ふ、と、い、ふ、あ、る、ま、い、

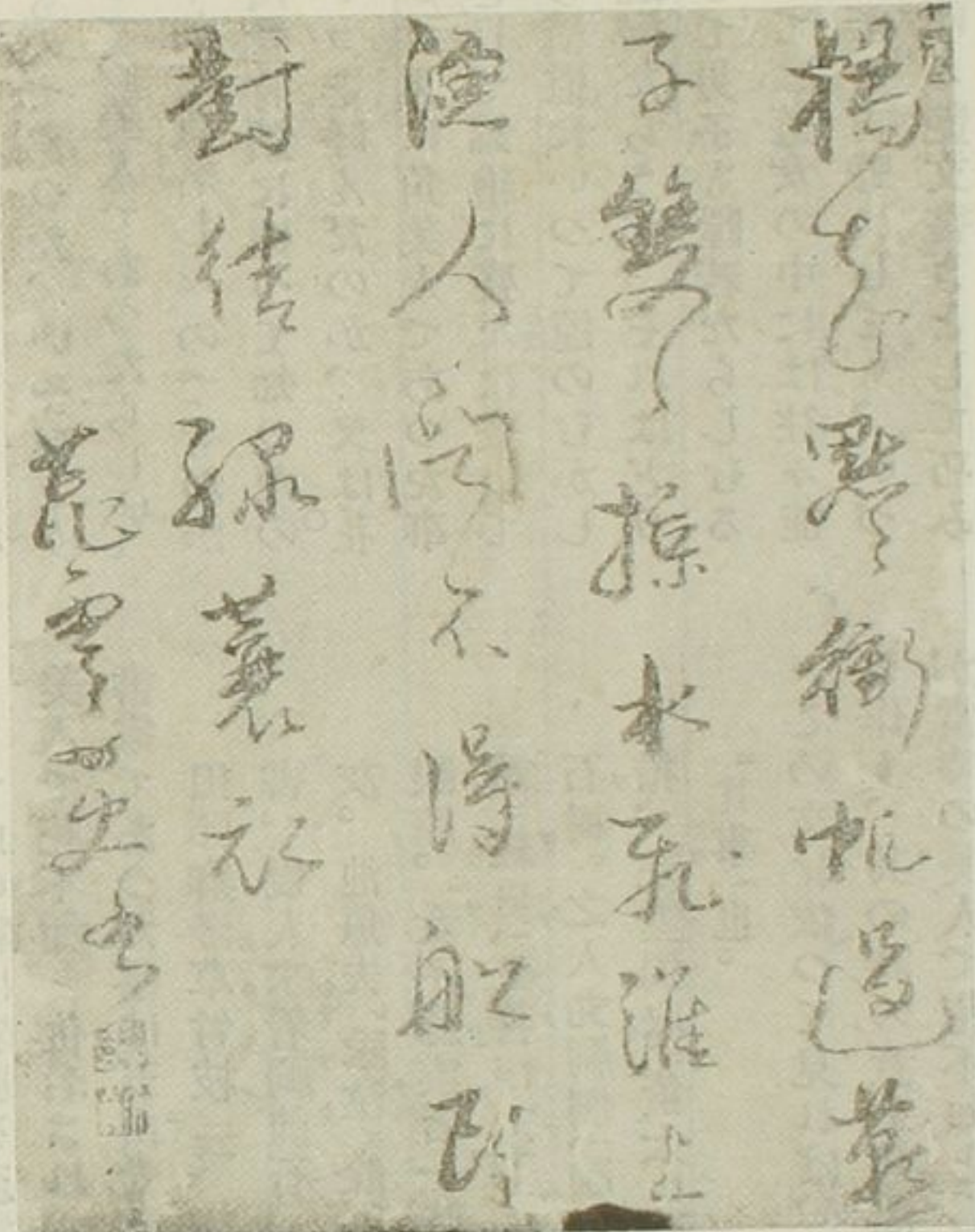
和と題して出て居る 自註

蕊雲女史の碑

披官稻荷社の側らに在り、大字にて保農々々登明石能浦
廻旦霧爾四摩伽久禮行不念遠之所思と人丸の歌を書せ

り、蕊雲は吉原の妓なりと云ふ、裏面に井敬義の撰文あり、

蕊雲女史名粧、文鶯爲其字、夙藉于北里半松樓矣、烟花中最錚々者也、天資嫺雅、誦習經史、兼嗜國歌、又從余學書、實妓流之才也哉、蕊雲間有禱於淺草寺中人麻呂祠焉、遂自書其神藻朝霧之什、以勒石、樹之祠傍矣、蓋還願也。嗟乎夫青泥中之蓮花也者乎、爲記其背、
文化十三年丙子秋八月



董堂井敬義

隨例點簿、忽得此件、如橫雲截、山略覺、豁暢、

○五峯遺集の序文ハ、餘り人を存せしむる、免角の語也、自人カキ美を忌人カキ、美を所を追く

刪一して、左の定行ハ、余カキ美を忌人カキ、美を所を追く

八月三日録

五峯遺集序

予屢遊越後、與其賢士大夫、接地沃而風淳、庶民殷富、禮文之化、絕諸州、性、出偉人傑、士豈其河岳、鐘秀乃子、靈不期然而然者歟、五峯改口、君中、前、河、賀、前、村、人、常、祖、已、下、累、世、好、子、業、藝、文、文、暎、君、視、村、以、十、四、年、頻、有、聲、望、君、天、資、穎、悟、年、十、三、善、詩、文、為、里、之、學、務、負、衆、屬、以、前、途、奉、為、孤、子、議、定、改、而、主、新、瀧、報、館、其、尾、崎、悞、也、其、浦、古、池、市、為、春、城、等、文、共、痛、論、時、事、慨、然

志于當世會大隈侯創改進黨乃日入其堂
柑風聲於北城侯亦重用之進侯妻君亦
尋赴為衆議院議事者前後三十年馳驅奔
走不遑寢食而未嘗一日廢文墨其詩益
且且當余之續刊大正詩文表以編纂心願同
贊之其沒也而今古屋館春袖海田也
坐等相與論定遺行編者若干卷曰上
峯遺集屬余叙之嗚呼詩之闕乎政教
也大笑古之詩觀風察俗以考政教得失故
曰詩亡然後春秋作而今之為詩者何如哉
凡官月露徒華其詞而貴其義否者高
宰理宦無復知聲調之有格君則其淵

濺博幸觀古今以經世之餘入作者之域意素
而思深法健而詞高風之乎治世之音可以辨
蔽或世矣君嘗撰此賦詩話十餘卷論列六百
年間八百餘人既收闡幽顯微之功今與斯
集冬觀益知河岳鍾秀乃子靈不徒有也豈
唯詩人之翹楚而已哉

大正十四年歲在乙丑五月上浣 日下寬謨

○村山詩之助其例のこゝちの方書画の流に
耽るゝの美々しく示さん以深田一蕙の畫冊を
門人々をき時や以平本にありふ畫院が事と
女あり子及七例の如を扱めてある。いづくの流の

道上
道下

高きあり得れ一事と印人池永道雲の家か打山と縁
家のあることとありて池永の家ハ里を捨つ助の
薬舖で今も此屋其業を持續してある。雲の災は
一千万家の印か亡びたと云ふ事も構へないことと思つ
てゐるか。村山は海軍とあると本居も倉庫があつ
た為め、多し入んで置いたものが却つて此大に罹つた
構へいよりの一面の瓦が落ちて、そのうちを幸免の縁か
あり道村の和歌と歌もある。道雲も愛玩のものを
して其家の物と大切うしてゐたものであつたか。これこ
ひは但し幸と云ふべきは道雲が苦心して著した
家海火災経の著述のものがおのり行李入
りあり、此も持出し七巻も本居が心得て居

は為り、池永と持田ハハ鳥者となり、厄を免れたと
いふ。此池永の別邸とも云ふべきことの公大井のあ
る、多しとも在るいかにあつたか。花とあるは
是ハ幸と全部無事と云ふを得た。其の中、
雲が愛玩したる鹿物の番札や二三体の佛像
七あり、道雲の薬行屋丈、薬河の如草の
佛像をも珍重したるもの、子供に財産を分
つて遺言もあつた。佛像一軀を添へたと云ふから、可
う多く佛像を花としておとる。今も存してある
二体の佛ハ回家も大切なるもので、一体ハ薬舖の如草
の塗金の中縁にキヤウ像と云ひてあるか。これと
家原が陣中にも離さるゝりた大切なるものを切

を嘗て井伊と通つたといふ、またか何れ此家に
 在るかといふ、池永の井伊家の出入のよむ、道二重三
 礼あり、その交遊し、これ端活の研があつた、井伊
 侯ハ、そのを不望さん、由義をく、此佛像と交換す
 ることなる、此の比と云ふ、又今、一体の佛像、ある、三
 尺位、そのを運送す、時代の名心、或る傳か、池永
 と預けし、其傳、こゝろ、此のよむ、此等、幸に
 大井の宅、かくん、爲の助か、つと、いふ、
 ○八月四日、神の、出房と、漁り、荒干の、田方を、辨ふ
 多く、川崎、千席の、の、花本、え、中、日、禰、修、出入、を
 ともあり

一 やまもと物語

二冊

- 寛永頃の流傳本、を、鈴屋の、下、魚、彦
 が、あ、あ、四年、六月、新、庄、本、を、以、り、て、校、合
 し、曰、丑、年、一、正月、十、日、道、麻、豆、か、第、万、生
 庵、を、松、を、校、合、更、を、平、吟、庵、屋、匠、が、結、草
 の、書、入、れ、り、り、を、巻、尾、と、い、ふ、く、の、説、話
 あり、千、虎、山、花、本、也、價、五、十、山
- 一 中尊寺古堂式三番手敷 一冊
 高、美、堂、本、を、え、千、席、の、花、本、こ、音、木
 の、飾、考、也
- 一 寛永二年拾地帳 一冊
 此、考、寛、永、二、年、以後、古、志、郡、樫、貫、庄
 六、日、市、村、の、拾、地、原、を、え、墨、付、十

八枚河村彦左衛門の名と印巻尾にあり
リ其古文者也

一 骨董集

四冊

此方又千虎四巻本より落丁散枚
補遺あり別に千虎の考証を附録し
てその多し

一 傘の豆考

字本

一冊

屋代弘賢の著なり。リ。此字本の
千虎の考証補遺三枚巻末に
添付の外書入多し

一 葉玉考

全一冊

一 葉玉考

十二行

え又千虎本より巻尾吳葉菫の類
細の團ニ枚を収む好書本也

此外の席本ありと云ふもの二三あり

一 行津賢

一冊

四ツ切本より此の仕扱を録し其の多し
富山の受銭屋が跋あり其の多し
二同し四ツ切本より本名出あり

頭筋 配の由と云ふ 價十三円五十一

其也

一 葉花金夢合

五冊

寶曆五年 開板の八文字尾本也
巻首心者自笑其笑の名をつら

この序文あり、略礼との間、是に托し豪商の
 其の表、深決を例の筆、改るをおう
 く、叙し、等とあり、半兵衛、爪の徳あり
 一、小野、皇司、字、盡
 一、冊
 天和三年、五月、麟、初、屋、改、ま、る、大、本、也
 此を多くあると古版、大本の珍らしし
 ○早大の中柄、種、名、の、久、しい、研究をせしめ
 る、自分も、も、あり、の、材料を、集、め、こ、も、あ、る、が、此
 改の、東、東、り、と、ま、る、改、う、連、動、と、あ、る、左、の、改、の
 此の、ハ、其、一、班、に、実、反、と、何、者、の、関、係、あ、る、換、ひ、も、あ
 る、が、是、を、道、破、す、る、は、さ、う、な、い、中、柄、の、研、究、が、是、ら
 ぬ、偶、々、骨、董、集、を、見、る、に、寛、政、の、風、流、の、圖、が

つたので他の學友等の様に女學生等と交際出來ず、又遊蕩
 すること氣怖れし、遂に或機會よりして群衆中に入り交
 りて惡習に耽くるに至つたとのことである。

又變態色慾に基く淫猥行爲の中で割合に多いのは色情性
 拘摸である。之は色情性崇物症と名くる變態色慾に罹つて
 居るものが異性の代理物として其の所持品例之手布巾、鼻
 紙、櫛、簪、手拭、紙入等を手に入れ之を翫弄して快感を
 覺ゆる爲に群衆中に於て之等のものを竊に拘り取るのであ
 る、極端になると婦女の毛髪や、襟袵の袖などを鉄刀で
 剪り取つて持ち歸るものさへある、之等は往々慣れない探
 偵などから金品を目的とする眞の拘摸と間違へられること
 がある、併し色情拘摸の方は其の目的は變態色情に基いて
 居るのであつて眞の拘摸とは其の趣が違ふ、勿論之等に對
 する處遇法も自ら異なる譯である。

此の外同性愛に溺れて居るものが群衆中にて同性者を誘
 導する様な場合も稀にはある、或る徒弟は鶏姦をされ度い
 變態性慾を有し、群衆中にて○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○。

最後に少い例ではあるが群衆中に夫の所謂色情殘忍症を
 見ることがある、或は美裝せる婦女の衣服に洋墨汁や硫酸

等を振りかけ、或は又鉄み切り、甚しきは婦女の顔を斬つ
 たり、尻を斬つたりするものがある、先年滋賀縣下では祭
 禮の夜二十人餘の婦女が尻や股を小刀様の刀物で斬られた
 椿事があつたと云ふことである、恐らく變態色慾者の行爲
 と想はれる、東京では先年十七歳になる小僧が二十餘人の
 藝者や雜妓の後方から背帯腰の邊に硫酸を振りかけた事件
 があつた、本人の供述によつて其の行爲は明かに變態色慾
 に基因して居たことが分つたのである、實際斯う云ふ實例
 は他にも少くない。

總りに之等淫猥癖者の矯正の問題であるが少青年などは
 此惡習に染むと容易に之から脱却することが出來ない、從
 つて一面は其れが漸次身體精神の上に惡影響を及ぼして終
 には挽回すべからざる禍根を貽すことになる、此の意味に
 於ては可及的早き時期に警察などの手にて發見され嚴論に
 よりて反省の機會を與へられることは大に本人に取りて却
 つて幸福である、既に惡習性を爲すに至りては却々警察の
 力などでも其の矯正は困難である。

就中色情異常者に對しては自ら處遇の途を異にすること
 は云ふ迄もない、之等のものは前述の如く病的異常人格者
 であるから、徒に嚴罰に處し強いて惡風を匡さんとするこ

とは妥當でない。之等のものは其の都度先づ精神的個人鑑別を待つて其れ其の精神性狀と體質とを診査し其の惡癖の依つて來る原因を明にして之に適合する醫藥を加味した矯正法を施行するの必要がある、又少年者にして斯う云ふ異常あるものに對しては夙に豫防的注意か肝要であつて家庭にあるものゝ充分に留意を要する點である、即ち可及的注意として春情の誘發せらるゝ様な機會を與へぬ様にし延て手淫の惡癖に染まぬ様に努むるを要する、之には場合に依りては誘惑の多い都會生活を避け、身體の強壯を圖り尙武の氣性を養ひ鞏固なる意志を涵養する等のことも必要であらう。

要するに病的色情異常者に對しては之を單なる不良行爲なりとして取扱ふ場合ありとせば甚だしき誤解にして又單に矯正すべからざる惡癖とのみ見て傍觀冷笑するが如きは之亦仁なる道に非ず、宜しく進んで之が矯正救済の方法を講ずる必要がある、茲に自分が特に本題につき出でた所以のものは決して徒に奇を好んだ譯ではない、一般に淫猥者殊に手淫癖者の如きものは多く病的異常者なることを世に知らしめて之が治療救済の途を講ずるの必要あるを教へ、又潜れたる之等異常者に對しては自己の病的なることを自

覺せしめて反省の機會を起さし、依つて以て國民保健及び全安保持の施設の上は多少の裨益を與へんとしたのである。

民衆娛樂的 錢湯風呂

早大教授 中桐確太郎

日本文化の特徴の一つと謂ふべきは、錢湯風呂(私の所謂日本式風呂)の發達でありませう。私は此研究に興味を以てをる者でありませうが、頂きました此問題に御答へするには私の準備はまだ不十分であります。但、天下同好の方々の御援助と御批正とを仰ぐのよすがともならうかと存じて、敢て御受けを致しました。が、誠に残念なのは、突發したる、用事のために有合せの貧窮たる材料に依りて其一端だけを疎略に申述ふるに止まらざるを得ぬやうになつたこととあります。是れは折角の機會を與へ下さつた御誌の御好意に對して相濟まぬ次第であります。偏へに御諒恕を願ひます。

温浴と歡樂

温浴と歡樂との間には深密なる關係が有るやううに見え。佛教經典の描ける極樂淨土に於て浴池は重要な地位

を占めて居るが、その最も著るしきものは無量壽經の記事であらう。其の極樂國土には七寶の諸樹、林を爲してをり、珠玉莊嚴を極めたる講堂精舍宮殿樓觀があつて、其内外左右に諸々の浴池があるのであるが、其浴池につきて次の如く述べてある。

内外左右にある諸の浴池。或は十由旬、或は二十、三十、乃至百千由旬にして、縱廣深淺、各皆等一なり。八功德の水、湛然として盈滿せり、清淨香潔にして味甘露の如し。黄金の池には底に白銀の沙あり。白銀の池には底に黄金の沙あり。水精の池には底に瑠璃の沙あり。瑠璃の池には底に水精の沙あり。珊瑚の池には底に琥珀の沙あり。琥珀の池には底に珊瑚の沙あり。磤磤の池には底に瑪瑙の沙あり。瑪瑙の池には底に磤磤の沙あり。白玉の池には底に紫金の沙あり。紫金の池には底に白玉の沙あり。或は二寶、三寶、乃至七寶、轉共に合成せり。其池の岸の上に梅檀樹あり、華葉垂れ布きて香氣普ねく薫す。天の優鉢羅華、鉢曇摩華、拘物頭華、分陀利華あり。雜色光茂にして水の上に彌覆せり。波諸の菩薩及聲風衆、若し寶池に入りて、意に足を浸さしめんと欲せば水即ち足を浸す。膝に至らしめんと欲

せば即ち膝に至る。腰に至らんと欲せば水即ち腰に至る。頭に至らしめんと欲せば水即ち頭に至る。身に漑がしめんと欲せば自然に身に漑ぐ。還復せしめんと欲せば水即ち還復す。調和冷暖にして自然に意に隨ふ。神を開き體を悦ばしめて心垢を蕩除す。清明澄潔にして淨きこと形無きが如し。寶沙映徹にして深きをも照らさむといふことなし。云々

此の如き浴池に盈滿せる水に八種の功德がある。稱讚淨土經の説明によればその八種の功德の中に清冷といふことがあるけれど温暖といふことはない。大善見王經の浴池も冷水であるやうに見える。是は熱帯地方の天國としては然るべきことであらう。然るに無量壽經の前掲の文中には調和冷暖となる、是は此經が温帯地方のものなることを示してをるのでは無からうか。

中和温帯の地方にあつても、海水若しくは河水に浴することは、古代に於ては殆んど皆行はれたのであるが、歡樂のためにせるものは、温浴を用ひたものゝやうである。ホーマーの時代には温浴を以て柔弱のしるしとして多少卑んだやうな趣きもないではないが、それでもなほ慰樂のためや、賓客接待の爲には温浴を用いたやうである。西紀前千

百年頃のものかと云はるゝ希臘チリンズの宮殿内にある浴室、(彼のシュリーマンが發掘せる)は温浴のためなりと認めても可からう。

西紀前三三三、アレキサンダー大王が波斯王大流士をイサスに破り、其の行宮を占領し、夕刻、その戦塵を洗はんが爲に、その浴室に至りたるに、その浴槽、水壺、洗盤、香油盒等悉く黄金を以て細工せられ、芳香は馥郁として室に満ちてをるし、それにつゞける宏壯なる大廣間には椅床食卓相連り、大饗宴を張るに足れる有様なるを見て、嗚乎、是れ眞に王者の居なり」と歎賞したさうである。此のダリュスの浴室も温浴であつたことは想像されるのである。

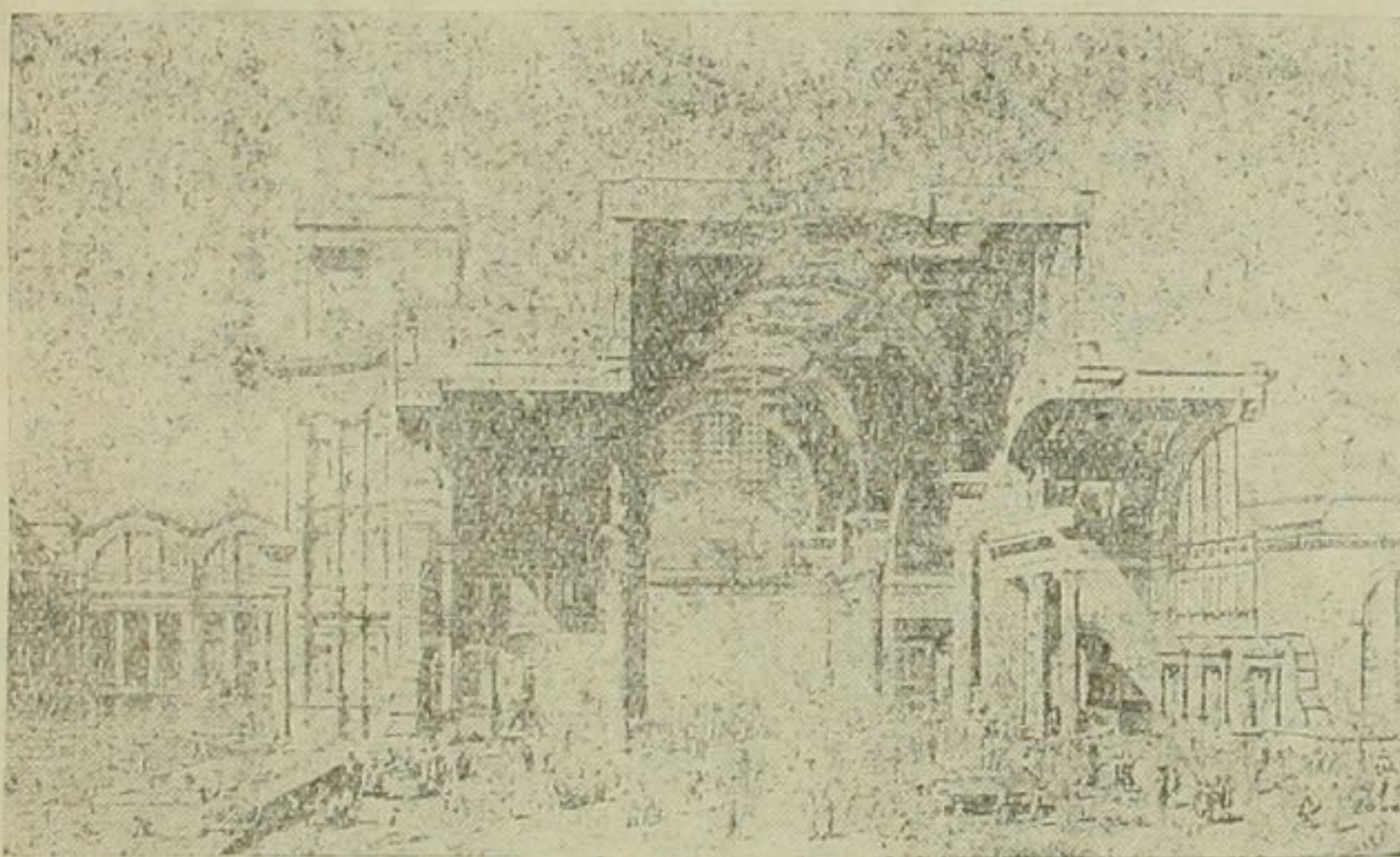
東洋華美の浴風は漸く希臘に移り、更に羅馬に及びて大發展をなし、遂に彼の公浴殿の歡樂境を現出するに至つたのである。

羅馬に於ても當初はタイパー河の水浴を行ふに過ぎなかつた。彼の大水道が(西紀前三二二頃、アピウス、クラウデイスによりて)造られてからも、ケエリアン丘とアヴェン山支との間にある平地に水を滙めて湖の如きものを作り、市民をして游泳せしめたといふことである、所謂公共水泳場であつて、可なり廣大なる建物がその周圍に建て連ねられ

そこには廣大なる冷浴室(遊泳場)を始めとし、温氣室(自由遊戯及び休憩に用ゐらるゝ處)や、熱氣室や、蒸氣室があり、また脱衣室、香油室、塗砂室、體操室、談話室、講演室等、參差左右に相連つてをり、地下室にはミトラ神祕祭壇の設さへもあつたといふことである。

此の廣大なる浴場に日夜數百の都人士が、多きは日に七度も沐浴し、出入優遊して逸樂を恣にしてをつたさうであるが、西紀四一〇年アリックの一炬に羅馬は灰燼に歸したともいふべきその頃迄、公浴殿は羅馬都人士にとりては一日も無かるべからざる歡樂境であつたと傳へらるゝ。

羅馬公教會が勢力を占め、厭世禁欲の風が吹き荒さぶにつれて、西羅馬帝國範圍内の公浴場は頽敗の儘に委せられ其美はしかりし圓柱や彫像等は運び去られて寺院の建築に利用せられたるものも多く、當年



の面影は跡形もなく、一陽來復の期は永遠に來るべしとも思はれなき有様であつたが、東羅馬帝國内に於ては其事情

を異にし、公浴場の如きは相當の保護を受けて繼續し(現今に於てもプロウサに於ける浴場の如き當時の原形をその儘に遺してをるさうである)。更に回教に繼承せられて、ますます流行し、現に今日に至るまでも、小規模ながら土耳其風呂として、多大の勢力を示してをるのである。

西歐に温浴の復興したのは、主として十字軍が東方の文華に觸れ、その感化に浴し之を故郷に持歸つてからであるといはれてをる。人間に歡樂を好むの情の存する限り、温浴の趣味を解せない筈はないのである、殊に文藝復興の人情解放運動の氣勢に煽ほられ

て、勃然として起るに至つたのは寧ろ當然のことであらう。

痛

今日現存せる史料によれば、之を嚴禁してをる基督教寺院内に於てさへ、温浴耽溺の甚だしき現象を呈したことが知られる。又此時代に描かれたる歌樂境の理想畫に温浴の場面が尠なからずあるのは誠に面白きこと、謂はねばならぬ。その一二を掲げることとする。

温浴と歌樂との間に於ける關係は、會點が孔夫子の間に對へて、「暮春には春服既に成り、冠者五六人、童子六七人、沂に浴し、舞雲に風し、詠して歸らん」といつた清興に於ても見ることが出来るし、又長恨歌にあはれを止めたる華清宮の逸事によりても明かであらう。此の如き實例はなほいくらでも擧ぐることが出来ると思ふ。抑々、温浴と歌樂とは何が故に此の如き親密なる關係を有するものなるか、此問題に關する研究は今姑く之を略して、これか



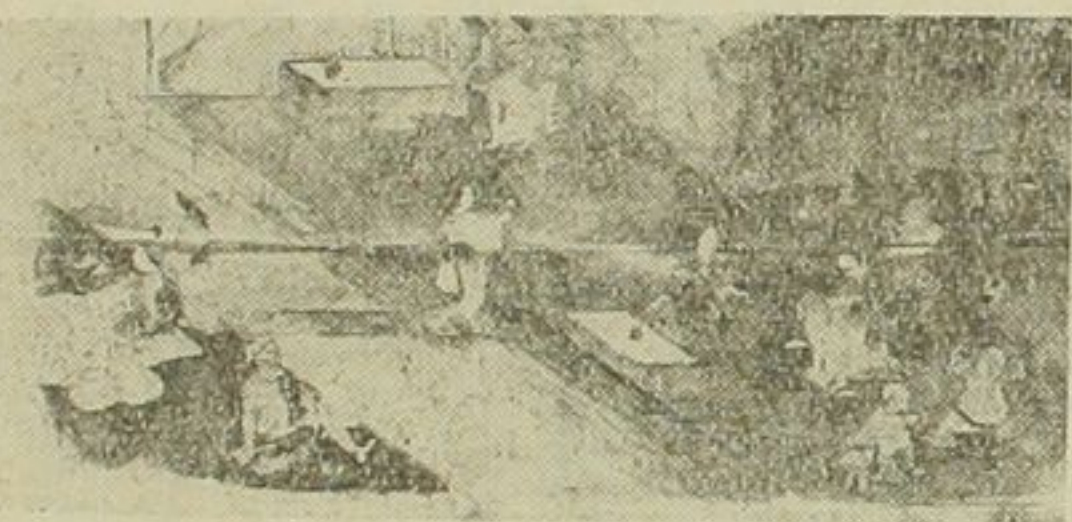
少し日本温浴のことについて考へて見よう。

日本式温浴の特色

日本民族は由來澡浴を好む人種である上に、温泉が世界に比類なきほど豊富であり、且つ盛んに之を利用したるが爲に、温浴の趣味が、早くより民衆一般に理解せられるやうになつた。加之、西歐諸國に於ては、人心を支配せし基督教が温浴に對しては禁欲的勢力となりて活きたるに反し、我國に於ては、最も有力なりし佛教が、其温室思想によりて之を奨励したが故に、我國の温浴は世界に珍らしき特異の發達を爲したものであらう。此事につきては會て述べた事もあるが、なほ其特色について少しく述べて見るに、其一つは

衆庶温浴

であらう。浴の目的の上からいへば、(一)衛生保健のためにするもあり、(二)病氣治療のためにするものもあり、(三)游泳技術のためにするものもあり、(四)宗教儀式のためにするものもあり、また(五)趣味享樂のためにするものもあるのが、他の目的のためにするものは姑らく之れを措き、趣味享樂の目的の上より見るに、我國に於ては温湯浴を喜び、衆と偕に之に浴することを樂となし、又その方向つて發達を爲し來つたやうである。西歐文化の諸國に於て、主として享樂のためにせらるゝものは所謂トルコ風呂であるさうだが、是は單身浴であつて、湯女とも稱すべきものを待らしめ、遂には淫樂に耽けるを常とするといふことである。我國に於ても湯女は随分古くよりあり(通常説かるゝは有馬温泉仁西上人復興當時より)とのことであるが、或はそれより以前にも溯ることが出来るかと思ふ、その後には丹前風呂等に見る如きものもあつたけれども、入浴は單身浴、若しくは一男一女の偶浴とも稱すべきものではなくて、やはり衆と偕に浴するのであ



つたやうである。

衆庶温浴はいつ頃より始まつたかといふことは未だ考定し得ぬ所であるが、西紀八世頃(？)橋仲時が、四國なるその領國に下向し、寺院坊内村里等に湯屋を立て、晝夜を別たす之を使用せしめて以て人民を慰めた(神道集)といふことがあり、又西紀十二世紀の終頃(建久三年)鎌倉の山内に於て、後白河法皇追福の爲に百ヶ日温室を設け、往反詣人並びに士民等をして浴せしめた(東鑑)といふことがある處から推せば、後に發達せる民衆浴即ち錢湯風呂の萌芽は可なりに早く發生したやうに思はれる。

但し衆庶温浴には浴槽の大なるを要し、水量燃料などの關係もあるから、農村などには其設備は容易なことでは無かつたらう。従つてその浴槽の大きさは一人若しくは二人入り位のものに過ぎなかつたらう。そういふ場合にも、所謂風呂入り講、又は貫ひ風呂など、稱へて、或は大家の風呂を中心にするか、或は各家順番に風呂を立て、其部落の或團體のものが、時を期して相集り、順次に入浴することとし、それを

待ち合はせる間、團樂會談、風呂を中心とする俱樂部様のも
のが成立せることは、可なり廣く、各地に行きわたつてを
つたやうである。而して現に今もなほ行なはれつゝありと
聞くかの佐賀縣古賀風呂の如きは、衆庶借浴にまでの發達
の経路と見るべきではなからうか。大正六年九月の大坂毎
日新聞に掲げられたる佐賀縣人椒雨郎氏の記事に左の如く
ある。

古賀は佐賀の方言で、二三十戸の社交的部落を指してい
ふのである。而して各村二十から三十位の古賀がある。
その古賀が單獨または聯合して一の共同浴場を建て、居
る。之を古賀風呂といふ。構造は三四坪の小舎の中に一間
四方許の浴槽を設けてあるに過ぎぬ。毎夕各戸が輪番で釜
を焚き、五時頃から十時頃まで勝手に入浴せしむる。それ
が悉く男女混浴である、云々。

その混浴入浴の形式だけについて云へば、支那の「混堂」と
同一の様に見えるけれども、支那の「混堂」は同國の賤民
といはるゝ人々の専用であつて、混濁汚穢を極めてをり、
之に入つてをるものゝ様子を見ても日本に於て見るが如き
和樂の相のないのを常とするので、其氣分に於て全く根柢
を異にしてをる様に思はるゝ。

の長所がある。此點に於て、日本式温浴は正さに一種獨特
の浴であると謂ふべきであらう。

勿論我國に於ても蒸氣浴は可なり古へより行はれ、今で
もなほ一部分に於て行はれてをる。歴史上より見れば、鎌
倉時代の頃より漸く盛んになり、足利時代に至て其極に達
し、徳川時代の半ば過までも其勢は續いてをつたやうであ
る。前記の丹前風呂の如きも、又西鶴あたりの小説にあら
はるゝ風呂なども、何れも所謂、蒸風呂であつたと思はる
ゝ。然しながら蒸氣浴は追々衰微し行き、温湯浴が再び之
に代つて來た。所謂、柘榴口なるものは蒸氣浴の折の遺物
であらう。(外に湯の温度を保持する實用上の意味もあつた
であらうが)。併し此柘榴口は段々高く、せり上つて行き、
遂に今日に至つては全く取去られてしまひ、浴槽も今日都
會地に見るが如き、所謂の温泉式となり來たつたのである。
その發達の筋道は興味深き問題であるが、これは他日に譲
ることゝしやう。とにかく此の如くして發達したる温湯完
浴は、衆庶借浴と云ふことと相合して、茲に

清徳遺篇なる歡樂境

を現出し、一種特異の民衆娛樂機關たり得る資格を有す

今日我國の都會地に現行せられつゝある如き民衆借浴の
起原はいづれにあるにしても、其發達が、佛教寺院に附設
せられたる大湯屋、浴堂の實施と、且又、借浴を常例とす
る温泉入浴の經驗とによりて、助長せられたる趣味に負ふ
ことの多大なるべきは疑ひなきことであると思ふ。

温湯完浴

である。衆と借に浴するといふことは羅馬の公浴殿に於
て大規模に行はれた。併しその主なる要素は蒸氣浴、熱
氣浴、及び冷水浴であつた。今日に於ても、トルコ風呂、
若しくはロシア風呂の名の下に行はれてをるものは、その
蒸氣浴、熱氣浴の部分である。東方回教文化國の婦人に取
りて、此上なき楽しみとせられてをる浴場も、亦之に他なら
ぬ。十九世紀の半ば頃より漸く行はれたる共浴場の借浴の
部分は水浴場である。然るに我國の浴法に於て主として用
ゐらるゝものは温湯である。此の温湯にして濃密なる液體
は、その中に、ゆつたりと、入り浸れる多數の人々をして
開神悅體、渾融陶然、自他一體の妙感を味はひ得さしむる

るに至つたのである。即ち各種の階級の人々、身に一布を
纏はば、眞裸體となりて、此に入り來るのである。賢慮正
邪、貧富貴賤、凡ての粉飾を脱して、天真爛漫の姿となり、
相借に此の温かき液體の中に浸り、こゝに渾和融化、陶然
として自他一體の感を味ふのである。疲れ散じ、凝り舒び、
血和らぎ、體調ひ、汗垢流れ去りて清快和暢の心地となり、
諷詠し微吟し、相顧みて歡語し、快談し親睦雍和の氣、洋々
と堂に滿つるのである。若し是等の人々、日々相見え
相知れる中でもあるれば、浴堂は即ち一種の簡易なる社交俱
樂部となるのである。よく之を指導すれば、眞正なるデモ
クラシーの精髓は、健全に養成せらるゝであらう。うまく
之を發達せしむれば、淨土樂園の眞趣を此世に現するのよ
すがともなり得るであらう。

民衆娛樂の機關としては日本式温浴は特異の資格を有す
るのであると私は信するのである。併し如何なるものに
も弊害が伴ふのが常である。温湯も之に耽溺する時は遊蕩
氣分を助長し、淫慾を不時に刺激し、また衛生保健の上
にも害を及ぼすに至ることもあらう。どうか相當の方法に
よりて之を救ひ、此の比類稀れなる民衆娛樂機關を長く保
存し、その健全なる發達を見たいものと思ふのである。

銭湯風呂に對する希望

かく述べて來れば、現今我國の都會地にある銭湯風呂に對して、いろ／＼改善してほしいと思ふことが出て來る。蓋し日本式温浴の根本の長所は、温き液體の中に、衆と共に全身を浸し、開神悅體、以て自他一體感を助長することになる。故に

- 湯水は之を豊富にし、冷熱その宜しきに適せしむることを得るを要する。
- 浴場は廣やかに且つ清らかに作り、晝は陽光自由に差し入り、夜は燈火明かに輝やき、暗陰不潔の感じなきやうにするを要する。
- 多人敷混浴より生ずる浴場の汚濁は之を淨むるの設備を施すを要する。例へば目下東京神田の青年會館の水浴場に備附けるやうな淨水殺菌機を取りつけるが如きである。多少の考案を加ふれば經濟上必ずしも不可能では無いさうである。

○壁景(即ち通例浴槽背後の壁面に描ける山水の風景の如きもの)を出來る丈、美術的になすか、或はその代りに時々の地圖、統計表、若しくは新作の歌詞などを、優美に

掲載するも可からう。

○蓄音機の如きものを洗ひ場の一隅に備附け、正確なる香曲を吹奏せしむるも可からう。

○附屬として現今、大阪實業若しくは天王寺噴泉に於けるが如き餘興場を設くるも可からう。

○新聞雜誌閱覽所、若しくは簡易なる圖書館を設くるもよからう。

○簡易清酒なる喫茶店を設くるも可からう。

○雨天にも利用し得る體育場を附設し、種々の遊技器械を備附くるも可からう。

要するに、浴場を中心として清健なる俱樂部を組織するのであるが、是等につきては、その道の人々の精しき研究を請うて、正當なる發達に資するを期すべきであらう。

民衆娯樂場としての寄席

今 風 來

寄席は娯樂場としては、比較的安價である事と、色物の席では内容に變化の多い事と、座席に餘り著しい等級がなく、且つ表々の日常生活に近く、且つ座席に餘り著しい等級がなく、

凡そ日本人位風を好むものはありませんが、この風の起原は実に古くは、この風を好むものには、凡そ日本人位風を好むものには、

風呂の話

大早 教授
中桐 確太 氏
(2)

みそぎから出た風呂

大層古い風呂の起原、風呂好きは日本国民浴室が七堂伽藍の一つ

立殿といふ三つの新殿が立つた、前の二つは神を祭る御殿であり、後の一つは温浴の湯殿であり、す、みそぎはかくの如く朝廷の儀式として重んじられて来たもので、
が、この
か、みそぎを重んじ
かつ愛すること、世界第一の多数を持つてある温泉と結びついて、今日の健全な衛生的な温泉浴まで發達して来たものである、
す、数からいふならば支那などは多数の温泉を持つてゐる時であり、また、世界において最も多く、
大嘗会には、悠紀殿、主基殿、回

凡そ日本人位風を好むものには、ありませんが、この風の起原は実に古くは、この風を好むものには、
に、最初はみそぎといふて清き川の水で身を清め、神につかへるといふのであつたのですが、いつの頃よりか温かき湯でやる様になつたのです、今はどうかわらないが皇室におかせられては、毎朝湯できよめられてから政にのぞまれたものです

また即位式の大嘗会には、悠紀殿、主基殿、回

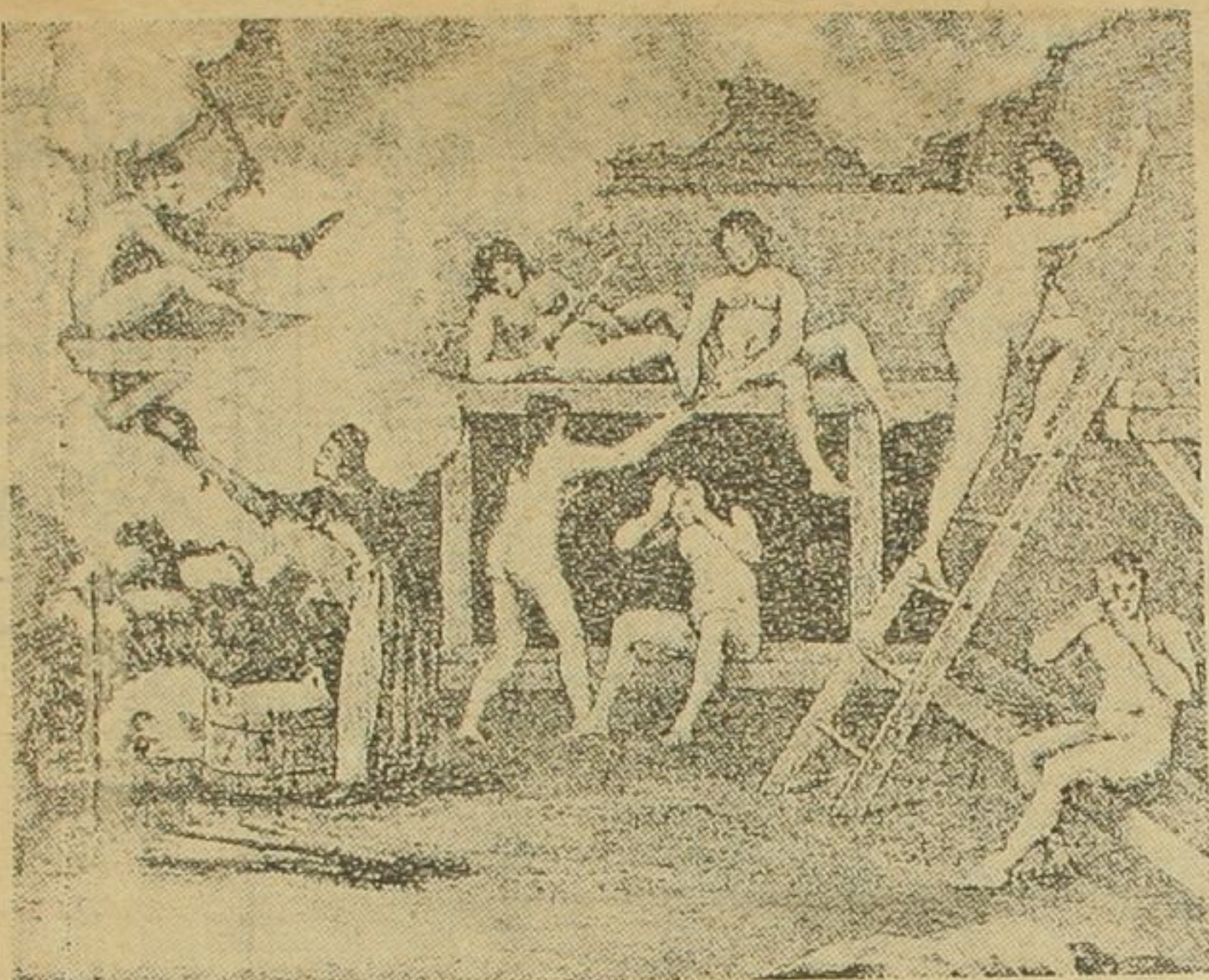
○温泉の利用されて

あるのは日本でありませう、実に日本の温泉利用は神代の昔から始まつてゐるもので、今日では日本全国に行き渡つて居ります、かうした日本固有の思想に更に一層の力を與へたのは仏敎の温泉思想であります、インドの風は私の名づけで

○熱気浴と冷水浴と

いふものであつて、今のトルコ、ローマ式の風呂に外ならぬのです、これが支那にはいつて、日本の温泉浴のものが寺院に建てられたか本米風を好まない支那人には歓迎されず、一時七堂がらんの一つとして建てられた浴室がいくばくもなく衰微してしまひました、ところがこれが日本に來ると

○温泉思想を正直に実行して非常なる進歩發展を見るに至りました



髪形次りの風名風俗の一端を説く材料がある。また
八束都島原の正月の行幸を錦文流が「粟大門
屋敷」(寛永二年改)の左の記述がある。

巻一の内 あくろ二日、えのひかほくぬこと
ふき、焼初を風名をとめを、此代をあら
と極んと、客の器量治方、風名尾の馳走
にうつて、高下品とあり、風名、下帯を
入、風名あたる時、銘々の下帯、濡るる、校
の間に、繁敷節をも極つて湯液、物と
りぬ、太夫よりさうへのかうこ、四尺寸の大風
呂衣いづれ、是をあら、川おろ大匠の後、四つ
て、かうこ、報し、神背を極て、髪を解き、

をきこえて後、秀をとのひり、いこき、い、茶を髪
やり、か、後より、お二重の大太い、下帯
に、けん、引せき、瑞逢う、い、人敷、襷出す
え花掛のふを、叙し、う、ま、あ、時、の、風、俗、を、こ
と、ま、あ、む、あ、う、時、の、風、俗、を、こ、解、き
洗、ふ、り、又、下、帯、を、着、け、る、風、俗、を、こ、入、る、こ、と、い
寛永の團子、あ、ん、ど、新、大、永、七、改、り、し、と、名、く、う、衣、
髪、を、色、正、用、に、風、名、変、を、換、く、こ、と、い、此、文、中、に、あ
り、

以上の文、骨董集に、僅、ま、一、行、り、き、あ、る、の、よ、う、な、は
う、し、中、柄、材、料、と、い、う、
八月廿日。
○中井積善の自筆本一冊を贈る架中、



二

此書題目山記希く昔山崎中の待合せし三十枚無界
半紙本、假り綴りし和表紙を缺く、此書刻本、
在りや否、未考あるに違ふ、或、集中に収めざる
人、但、此好紀行自著に成る、殊とす、又、近の装
釘を期すといふ

八月五日記

○前日面白作郵の巻首に載せんとし、同社の
寄る斑家花の寸本を撮影し、その左に収
め、小書きのものを右のところに置くこともよく面倒を免
れて、才四のことと、この大ききものを縮写し、比較見へて
おせし、ろくま、才三ハ、豆本法集任の巻が才五の、河
お全集の豆本、七あり、皆、大さの手中に載せ、その
と、齊しい位、大さ、る、過、き、ぬ

八月五日記



十二行



又、及お標表の方法より、新らしいもの、此
 方法で扱ふに、家並に此等も、洲とすることか、

○此頃九段下神保町
 今同七段迄、各戸に手
 拭き箱と短冊を、
 別表に、黄毛の、小旗
 を掲ぐ、まゝ、砂
 利、置、換、設、つ、互、及、お
 の、時、時、深、ぬ、き、あり
 此、の、増、進、と、砂、利、置、換
 を、心、る、市、の、任、務、に
 及、お、を、表、す、る、もの

口上の宣傳も、此の無言の宣傳力あるに似て八月六日記)

○紙後瀨波漫筆の巻末頁に、舊像ある所から先頃の送りの一巻、其の身主娘の法衣を位せてゆゑ後書畫帖一冊を贈つた、身主を備へつけ、宿泊者の文藝あるものに押さえてある用、供せん為めあるを、その先づ押さへし巻首に松茂稲雨の四字を記し、更らに在るか山在、此は白首帰の句を題し、帖を津波と題し、四字の題字は瀨波の風景を記す、此は十字の劉長卿の句を著り、自家その折りの心算をあらわし、この

ある、瀨波の海岸に、此の昔の跡は、松木ハ一種の風致を添へて教養も、養正身ハ萬頃の稲田を平視し、殊に雨後、趣あり、松茂稲田の題詞は、本以也

八月六日記

○温派史研究家中桐隆大印、身主の老翁、材料を謝し、且つ波の、前年某雑誌に研究の一斑を載せ、其の印刷物二冊を贈る、活字余久思ひ出せる材料、といふを、或許あり、自分も特に此の研究を心掛けることも無ければ、さう、此れを雨思ひ出し、その左の教項、こゝとさうき

一西本教者元雲園内、ある風景は、柳山時代豊前の用ひ、その為、其の傍に在る、この

又ハ天正長祿の風流の模式を記するは是れ
これに遊風流にあり

一 東鑑に頼朝由井と流と浴して伊豆山
を拜すること一二ヶ所ニ散見す、後醍醐
海に浴の初めを記す

一 貫之の土佐日記、都を去るに十日許あり
津に舟ありし時、舟中の女流華堂
：舟に浴するを貫之に見て消然の筆と
押ひ人をも驚かせる貝の倉持日記、舟
寄るに女人の浴部と形を記ししを
り

一 高野山浄法寺院に傳へる時多院の

凡そ浴しる古への模式か否かのハ如
きと可なり、大なる長方形の力マテ
の儀に、この儀も、無冷蓋風流にあり
一 蓋京に列しし時、北条金成由石先の浴
室を見たり、不謂く、この風流を、心
閉の儀に蓋流を傳へる仕掛らんハ湯
槽にあり

一 房州の某所、三茶公との別荘あり
其の浴室を見たり、この儀に、蓋の
の浴室を、一室を、受ゆるハ、その
内、蓋の儀に、所傳接し、又ハ、但
椅子一脚を、受ゆるハ、浴槽あり

或は不意に浴室とわけけることあり
時婦人の廻ける所にもあること語りし
思ふに陸奥の平に並風岩の為めは備
ふことよこを思ひし中桐の詠しる千代田
の浴場の園と見えし退浴並浴
共、侍らることいふ古格を守る家、此
の習風存する事あるもやと思ひし
一 長根歌にある駿山の浴場の園常るも何や
らと出しておれを保存して置いたる言だが
こも披考に由り、あの園は湯浴ゆめ
抱くべきことのひあり

コシナ真面目の材料、去こ拂をえ多くの中桐

の知る所も、往の切れば果ては、滑秋方よりいれ
しと移り、越る子ぬの某地の酒樽に到りし時浴
室男女の為の特ゆの設けらるる時を以て男女
の混入を利しけり、唯今男、唯今女の標札を
戸外に掲げあるを又て一笑せしと後し、亦家花
に高原彦彦磨はが高河直塩は高原の妻の
うち又すもを偷視の園、題する長歌一幅あり
玉の如き美人かカマテをまきこくさまを偷見し
神も現躍る事あり、彦彦磨の如き真面
目のその者の歌とては殊なりと笑ふに奈の料地
屋に浴坊を備へたる如めは、高原の駐春亭なること
抱一の秘のこ伝ふといふこと、高原彦磨は、高河直塩

の初年まゝ五丈梅と稱する所謂の本質^{（？）}を市や
の銭湯のこときよありたり。唯は異するはザソ口を
欠き削るときはよきしと記しあるもの流せ出た
明治の初年まゝ四丈の銭湯存じ、まゝを必らず二階あ
り、茶室を張らするせもありたり。一時ハ文藝に多く
浴を各業するもの不在に出来たり。風呂の格式は皆
ザソ口をとりて簡単なものなり。荒いせをとりて茶室
を出し、今のコレイ、ハウスとも見え、こきせのころし
火防のせえ湯屋の様にして面倒する致を各人に出るこ
及人以上の浴場の影を収めたりとを茶室の者
生時代の流せ出に、我由邦人が剛に八月七日録起
つて後めより手を洗ふ身お湯のあるもの入浴の

思慮と其の源を問ふ事潔癖から来ておる外人も
美人と解し得ぬ。老婦人の常服を看み外女の素肌
柄、老婢が午洗を侍り、柄拍をとり外人と差向
けたり外人の手も指し、こきせとツボンのホチ
を外し湯器をせり、老婢の微笑を懐く
流せ出せる。

中桐らと客をえんれ日本湯浴史流をザソ口讀ん
見るもの日本心なき襦袢と唱へる襦袢を拂
ふ法がある神者の大切なる式と云つておる。ま
が朝廷の儀式の内にも編をえんれ、道に四民の
濯を洗ひ浄なる法とまゝ度しとある。
最初の冷水と身体を洗ひ清めるが近

と氣候等の關係から温浴と云ふ、その氣
化して後、その人体を形とする紙片を形に投じて
穢と呼ぶ、扱ふも云ふに、保く此の習俗儀式
に類するもの、その邦人の潔癖の性を表して
おるの、偶々此の佛が海来の後、一層此
の思想を蓄め、佛果をやらせ、
を忌み之れを扱ふを以て、罪障を拂ふの
端とする、此れ神道と異なり、所が無つたを
こと大寺院に於てハ、必ず大なる温湯入浴の
設備があつた、其樂の爲めを解するの
後の思想は、如きの罪障を淨め、その
東大寺の浴場、その阿彌陀佛の額が掲

けえとある、その其の宗教的の一儀例である
ことか、その克明皇后が公衆の垢を自ら
拭ひ、えんじと云ふ、その宗教觀
念から起つてある、その好むもの、その不潔を
去る、中桐の扱ひ、あつた、繪巻に病鳥が
浴して、おる、圖がある、この病を去つた
いふ神話を古いもの、その風呂の形式を
今も朝廷や大寺院の風呂の形式、そのつくり
の畫かた、その身体の不潔を去る、罪障
を一掃する、結果痛も去るといふ、医療
思想もあつた、その生じ来る、淨心ある、
神佛に同じ、法淨法を行んで入浴を

数代に比み上り日本を利する事と深泉が全
出する。これ日本が火山国である為であるが、
常為親念に此の自然の湧水を感嘆し利用
し之を病を醫するに用ひ并に夏木の花
先づ古来珠重が有馬の湯であることき、京
都に上るに為り、安閑して高貴の階級かこ
こ別荘を距るにことなり、定家の時月
記に記してある位である。一旦新橋に泊りしに
ともあるが仁西上人が之れを舟具した時、京
河に來の十二神將、象り土上の坊舎を設け
各坊に湯女を置いたとある。あんな湯女を設け
に権輿七十を置く、強う後世のこころを淫をある

やうなもので無つたことか、江戸の、温浴の家、あの上
大切なるものと云ふは結果、古後に入浴の大きき
重きことなりき、費用も多くかけること、惜まら
ざつた、尚蒸風呂も感嘆し行はれた、この朝解
あつたの、これ來れぬ、あつたか、八月七日記
の、風呂といふが、此湯の巻目にあるが、久松宗友
味と帯付しある、及埃池も、云々
言傳ふ、奥南部の地、一の渡り來る、海上云々
し、都におり、く、小々、木の花をく、く、湯の全
く、これ木を海く、夫、夫、乗つて、おを
休め、又く、りへ、三、南部の地、ある時、こと
ことく、す、然、一、春、物、時、又、木、を、く、

へし帰るん所々を悉取らん。歸之熱くそ多く
の人の年々爲故といつるも此木出に踐りあふ
を四人捕らん。雁の爲に此本を以て凡名を焚
ふ。往人を入はせしむ。是其進善也。之を
難くして凡名と云ふ。

古人今人

- 昔は久米の仙人なるものあり。里川に衣を洗ふ女の大根足に通力を失へり。
- 今は天空の飛行機、草刈り娘の赤い腰巻きに現を抜かし墜落し來る。
- 娘こそ災難なれ。鬼も十八娘も二十、めうが島も花盛りの盛りを見ずして散る。
- 飛行中尉を恨むと思ひの外、太郎兵衛、芋作相集まり、兩者の靈魂を結びしといふ。
- 母なる人はおろ／＼聲「娘もあの世で中尉様のお嫁になり。こんな喜しいことはない」
- アメリカあたりならば、直に損害賠償を訴ふるといふ、日本は泣いて喜ぶ。
- こゝに日本ならでは見られぬ情景あり。父の曰く「これや娘、必らず未練はいふまいぞよ。」
- 食ふに食はれるものが、化して強盗となるは、近ごろ日本の新流行なり。

古人今人

- 芝公園の裏手より、川に投じて死を圖れるものあり。人あり、驚ろいて救助す。
- 見れば六十にあまる老人なり。病院に運び、ねむるるに介抱して幸に蘇生す。
- 老人目を開き怒つて曰く「何奴だえ俺を助けたのは、お蔭で明日から又食えねえ」
- 恨りにも命の恩人なり。尋常ならば両手を合はせ、再生の大恩を謝すべきところなり。
- アペコベに怒喝するは理を失ふといへども、語中無限の哀音あるを如何にせん。
- 「泥棒を捕へて見れば我が子なり」今の世の泥棒、捕へて見れば、悉く是れ我が子ならざるなし。
- 食ふに困まれば強盗をしてもよし、といふ理窟はなけれど、聞いて見れば氣の毒にあらずや。
- 金はあるところがあり。無きところになし。有を無に通じて始めて天下の廻りもの。
- 金が廻はらぬ故、首が廻はらなくなり、遂に頬冠りとなり、忍び足となるぞよ。

五五

隨筆頼山陽に就て(二)

後藤 肅 堂

六 ごとに闇黒面があるか

自分が此一篇を草して見やうと思ひ立つた動機を、手つ取り早く申すと、先づその「はしがき」の始に、著者が始めに山陽傾倒者であつたのが。

そのうち山陽の弱點や闇黒面が追々わかり、傾倒の念が全くなくなつてしまつてからも云々。とあるのに不審を起したからである。

傾倒と否とは問題でない。たゞ問題は山陽にどんな弱點と闇黒面があるかに在る。若しそれを彼の前半生の事とすれば、あまりに分りすぎて居るほど分り切て居る。それに辯護の餘地も、又その必要もなく、全部を承認する事は前云つた通りである。たゞ問題は彼の後半生に在る。

人間たる以上弱點はあらう、しかし彼の後半生には一點半點の闇黒面もない。たゞに後半生のみならず、前半生をも加へ、其一生を通じ、公明正大、疵瑕共に露出して日月の蝕の如く、黑白共に明々白々にして、今さら裏から透して見てボロのやうな事は一つもない。

放蕩も、脱奔も、不孝も、不忠も明けつひろげである。弱點と云ふは好し、惡徳と云ふも又惡しからず、左れどそこに一つの闇黒面もない。我が山陽はそんなケチな男ではない、惡るければ笑つて斷頭臺へも上らうが、陰へ廻つて内所で陋劣な運動をする男ではない。それを此著者に依りて、一生の心血を絞つた日本外史の樂翁公獻上までを、自己推薦に依る運動の結果とされ、しかも其上には上はべだけを飾つて、堂々樂翁公に上つる書を作り、世間を誤魔化したものとせらるゝに至つては、勘忍が出来ぬ、その勘忍の出来ぬ惡罵を此に提出しようとするのである。

しかり惡罵であるが、自分の惡罵には一々根底がある。傾倒をしていたゞくには及ばんが、全く山陽を知らぬ人からして山陽を論じてもらひたくない。彼の道樂的半面(前に云つた藝苑的方面)は自分の知らん事、それは兎に角として、文學的歴史的に關するものに就て、全く撤回してもらひたいのが、本篇起稿の趣旨である。

それを云ふに就ては、先づ此書の著者がどれほど山陽を論ずる資格を持て居るか、吟味してかゝらねばならぬ。

それをなすべく、開卷第一の第一頁の口繪からして驚倒された。なんでこんな紙屑が卷頭第一に出て來たのであらうか、

著者は云ふ「詩は他の書にも出て居るが、春風の題識は何れの書にも逸して居る、そして其題識した

隨筆頼山陽に就て

此詩の由來を語るものである」(七頁)

まあ此の位む途方もない話はない。これまでどこへも出て居らんのは事實であるが、それは出すべからざるものであるから出さんまで、出した方がボロツ買ひである。

その題識と云ふのは。

此先兄春水翁。所_レ作示_レ其子襄_レ者也。襄時髻亂。今味_レ此語意。如_レ見_レ壯年後事。所_レ謂知_レ子無_レ如_レ父耶。抑偶然爲_レ識耶。襄近閱_レ遺集。見_レ之愴然。以_レ無_レ親書本。請_レ余代錄。掛_レ壁自矢_レ隱操之有終_レ云。

庚辰六月

春風老人

七 間違ひだらけのお話し

それを先生どう解したかと云ふに。

山陽の呱呱の聲をあげた時、父春水の喜びはさすがに一通りではなかつたと見えて、特に一詩を賦したのが、そのまゝ、筐底に残されてゐた。

と云ふのが乃ち此話で、それを父の没後に發見して、叔春風に題識を書てもらつたと云ふのである。

それを果して正解であらうか。

(呱呱) 嬰兒の啼く聲 (呱呱索乳)

(髻亂) 髻は説文に小兒垂結也とあり、亂は説文に毀齒也、男八月生齒、八歳而亂、女七月生齒、七歳而亂とあり、小兒の垂髪して齒のぬけ換る頃をいふ。

少々變だわネ。一方は赤ん坊で、一方は男子八歳。昔し老子は三年の間母の胎内に居つたと云ふが、八歳の赤ん坊があつてはやり切れない。

此詩は今まで魔誤つて坐席に困つて居るから、序に申して置かう。藝備偉人傳の春水の所や、頼山陽大觀にも此詩を出して居るが、理窟が分らるので、「春水一日江戸官舎に於て鶯を聽て感ずる所あり、詩を作つて兒襄に贈る」として在る。たゞし赤ん坊の時とせず、十歳前後と見たのは、文字の力に於て隨筆著者より優つて居る。

此の詩と云ふのは斯う云ふ譯です。山陽詩抄を見ると、その第二番目に、

甲寅首春作。 將懷_レ家君在_レ東邸

黃鳥嘴々日 載陽。辛盤遙拜向_レ東方。霞關應_レ侍_レ春風坐。曾否_レ回_レ頭憶_レ故郷

(註) 藝州邸は霞が關に在り。

問題の春水の詩は、乃ち此詩を見て喜んだ時に兒に示したのである。その詩に

隨筆頼山陽に就て

出_レ谷新鷺聽始奇。遷喬汝欲_ニ向_レ誰期_一（下略）

とあるのを見ても、一見して此照應が知らるゝ。甲寅は寛政六年、山陽十五歳の時である。その詩を後に（庚辰文政三年山陽四十一歳の時）叔春風に書てもらつたのを、春風老人何を勘違へしたのか若亂と書いてよこした。これでは全く物にならるので、山陽先生ぐる／＼巻いてポーンと紙屑籠へはかした。それが、屑屋の手から廻り廻つて著者の手に移り、今度堂々と口繪の第一頁を飾るやうになつたのである。

十五歳が春風老人に依りて半減の八歳となり、さらに著者に依りて赤ん坊となる、モ一つ行くと消へて無くなる。恐ろしい世の中だ。

所がモ一つ滑稽なのは、山陽先生自身が此詩に就て間違へて居る。餘談ながら序に蛇の足を添へて置かう。

寛政甲寅正月山陽十五歳の時は、春水先生在國中である。乃ち本書の年表にも在る通り、去年九月江戸より歸り、引つゞき六年間在郷、これは動かん事實である。すると此年首江戸の父を思ふ作のあるべき筈はない。そこが山陽先生の考へ違ひである。

一體此詩は父の喜びを得たばかりではなく、大變大きな事件の誘引となつたものであるから、特に穿鑿を要する。乃ち山陽自ら書後に「襄十三歳時、先人祇_ニ候江門_一。家信中時有_ニ襄詩_一。」云々、以下を自分

が代辯すると、それを三博士の筆頭柴野栗山に見せたものがある。栗山は儒服せる豪傑にして仲々えらい、春水子あり之に實學を教へず、詩なんか作らして置くとは怪しからんと云ふので、宛も薩摩の文學赤崎貞幹先生歸國の序を幸ひ、藝州へ立寄つてもらひ、先づ綱目を讀めと云ふ栗山の傳言を十三歳の山陽に傳へてもらふことになつた。此の赤崎貞幹も、高山彦九郎を國に迎へ「預期麿水酒。一醉抱_ニ清芬_一。」と歌つた儒中の傑物である。これ田舎者の山陽が始てエライ人を見、エライ人の傳言を聞き、後に修史に志す第一素養を得た山陽傳の發端である。

乃ち此時のである、十四歳の時の正月に入るべきを、十五歳へ入れた。赤崎貞幹の來たのでは十四歳の夏である。

山陽から春風老人、それから今度の此著者、たゞ一つの詩でも、此の位間違ふのだから世間は物騒だ。

八 取材ご年表

次に材料の取扱ひ方を見るに、それにも大分鬆亂式が多い。(十) 臨終と未亡人の書簡の所に「未だ山陽關係の流布書にないから全文を抄録する」として、六頁に亘る山陽妻君の手紙が載せられて在る。それは大正初年東京日々に連載され、後に全集巻に收められた鷗外博士の伊澤蘭軒に「私は今全文を此に引くことをなさない、何故といふに屠赤瑣々録は廣く世に行はれて居る書で、何人も容易に檢す

る事が出来るからである。(鷗外全集卷八四一九頁)とある通り、圖書刊行會本の竹田全集に出て居て有名なものである。しかし金剛石はいくら古くとも光りに變りはないから、それを此へ出したのに異存はないが、その後に出て居る解説があまりに見當違ひが多い。

その一例として、此時山陽の世話をしたのは關五郎である事を云ひ「普通世間では、後藤松陰が病床に侍して、詩文其他校訂の事に當つたやうに云はれて居るが」云々。とあるが、世間で誰もそんな馬鹿な事は云はない、松陰は自分で山陽の妻君と同年だと云ふほどのよい年で、今では大坂の篠崎小竹の女婿として、小竹の大財産を一手に引受けて世話をして居るので、多忙此上ない。山陽遺稿に。

喜世張來問疾、時壬辰八月四日

と題して

湖江看我病。犯暑見君情。(下略)

とある(山陽九月二十三日没す)この世張乃ち松陰である。よく事情を知て居る山陽は、ちよいと見舞に来てくれただけでも、これほどに特別待遇をして居る。其人が付き切りで世話の出来るものと思つたり、云つたりしたのは、今までたゞの一人もない。

その無いものを他説として自造し、それを打壊しては自家發見を誇るのが此著者の慣手段である。手段としては巧妙たるを失はぬが、錢を出してそれを讀まざる、方はこたへざるを得ない。これは其一例で、到る所にそれがある。

此の書状にはいろいろ研究問題がある。文中の主人公となつて居る關五郎とは何ものであらうか、それが解釋されんと山陽の臨終は明かにならんが、此の著者はそれを問題として居ないから、こゝには略し、一つ云ひたい事がある。

自分は前號に、年表に就て少し云ひかけた所を妙な所で切れて要領を得なんだが、現に此の山陽妻君の手紙に二ヶ所まで「結婚後十九年」とあり、著者も解説中特にそれを引用して居る。それを年表文化十二年乙亥山陽卅六歳の條に「是歲小石氏を娶る里惠女十九歳」とあるに照見すると、一年ちがふ。年表の方では其年より山陽の没年まで十八年にしかならん、年表と本文とこんな違つては年表が何の役にも立たん。世間普通は年表の云ふ通り文化十二年結婚と云つて居るが、こう云ふそれを裏切る反證が眼の前に在るのを奈何せん。處女が最初の結婚を、大事な夫の没後涙の中に數へ、しかも二度までくり返して書くのに、年數の數へ違ひがあるべき筈のものではない。それも老ひ朽ちたお婆さんではなく、まだ四十前の女盛りである、著者の云ふ如く一つばしエライ女である。

此手紙の第一着眼點、第一の貴重な所はそこに在る。そこに山陽結婚問題の秘密が伏在して居る。こんな重大問題——しかも此書は彼等の結婚に就て、長い頁を費すを惜まぬ直接關係問題に就て、何等の疑問さへ胸に浮ばず、空々寂々に看過されたのは、折角長い手紙を収録しながら物足らず思ふ。

九 山陽と其故郷

同じ項中(四六頁)「臨終の時長男餘一は來合はせなかつたと見へるが」云々。これが尤も怪しからん話である。第一此の餘一話しは根本からして大間違ひをして居る。年表天保二年の條に「五月餘一江戸修業の途入京」とあるのは何の事やら。本文を見ると飛でもない事が書てある。「一説に山陽が其長子餘一を江戸に出したのは、一つは己れの志を達せんための前提にして」云々。これでは全く山陽傳は出て來ん。一説として他人の説らしく記してあるが、苟くも山陽を説くものにこれほど譯の分らん事を云ふものはあるまいから、こんな一説が世の中に存在して居るとは思へん。

何となれば、山陽は廢嫡である。實際彼の子にしても藩の方では全く久太郎襲を認めて居らん、春水彌太郎の直接相続人である。久太郎は全く籍のない人間である。春水の歿したのは文化十三年山陽卅七歳の時にして、餘一は其時直ちに頼家を相続し、表向き山陽には指一本も差されん。それが今日(餘一東下の天保元年)ではもはや十六年経つて居る。「山陽が其長子餘一を江戸に出したのは」なご、自分の自由に出し入れが出来るやうに考へるのは、餘りに人を馬鹿にした話ではないか。現に此時山陽は餘一の來たのを喜んで「于役接遇異勞逸。天涯相見亦君恩」と云つて居る。君命以外に山陽なご指一本もさゝれん、それを「長子餘一を江戸に出したのは」なご、我物顔する一説がどんな所にあらうか。

年表の修業もおかしい。前云つた通り一家の主となつて既に十六年、山陽廿二歳の時の子であるからもはや年は三十一。二人の女房を持つて、二人の子の親である。それが今さら官費留學の江戸修業でもあるまい。

こゝで話は山陽臨終の時へ返るが「來合はせなかつたと見える」は餘りによそ／＼しい。人間一生の別れに、長男にしてしかも宗家の主人たる此人の、來たか來んか位は本氣に調べて貰ひたい。元より久太郎を認めんから賜暇もない。いくら道中困難の世でも、一路坦々砥の如き江戸と京都である。それを親の死に目所か、墓參にも行き得ない勤めの身の悲しさである。

藝藩は山陽に對して、死ぬまで實に無情であつた。イヤ死後にも無情であつた。嘉永以降日本外史に羽根が生へて飛び、日本國中の津々浦々到らぬくまもない世の中に、藝藩だけは其採用を最後まで禁止して居つた。

獨り藩のみではない、彼は死に到るまで故郷の廣島を征服し得なんだ。藝備碑文集を調べて見ると。

虎山	二十一	杏坪	八	春水	七
津庵 <small>一餘</small>	七	茶山	四	小竹	二
支峰 <small>次男</small>	二	山陽	二		

隨筆頼山陽に就て

と云ふ割合になつて居る。末の十年間は殆ど毎年歸省して居る關西文壇の飛將軍も、豫言者故郷に容れられず、死ぬまでどう／＼此地だけは征服し得なんだ。

順當に行けば山陽の死んだ翌春は、餘一歸國の豫定であるから、京都では一日千秋にそれを待て居つたが、どう／＼延びて夏になつた。わざ／＼釣つて置たでないにしても、藩のやり方は決して薄恩でないとは云へぬ。それを今日山紫水明處へ行つて見ると、麗々しく淺野の殿様の額が掛つて居る。よい氣なものだ。餘一の歸西は凄愴を極めた星巖の送詩と、壯巖無比な豊山の送文とがあつて有名なものになつて居る。それを「臨終の場へ來合せなかつたと見える」は、これも亦よい氣なものだ。

十 興味と滑稽

臨終序でに(十三)未亡人に就ての一節を批評しよう。

本書中惡材料を使用して居る所も随分多いが、此項などはその中の壓卷である。

著者は此の結婚一條に就て、其出所を顯さず只單に「其事情に就て興味ある話が残つて居る」と云つただけで、ここにどうして残つて居つたやらを明言しない所に臭い所がある。

本人が秘し隠しにして居るのを、わざ／＼底を割るにも及ばんが、これは山陽傳中一番困る問題であるから一言いたす。

此の出所は自ら頼三樹三郎門人と名乗つて、山陽及三樹三郎の事を、明治廿二三年頃新聞「日本」に出した薄井小蓮と云ふ男の話を、丸々そのまゝ取つたのである。此の記事は後に袖珍日本叢書の三篇として「頼山陽の家庭」と云ふ小冊子になつて居るが、それにも及ばん。民友社から出した「頼山陽及び其時代」の一七九頁以下に全文が抄出されて居る。

話は大變ロマンチックで面白いが、丸きりお話にならんほどの嘘八百である。現に家庭専門の木崎尙氏は「家庭の頼山陽」凡例中に、

又頼鴨厓の及門と聞ゆる薄井小蓮翁の直話を筆記したものと云ふ「頼山陽の家庭」と題する小冊子あり。老人の覺へ違ひもあるべけれど、事實の誤傳せられたるが餘りに滑稽らしく、試に此篇と相對讀せられんも一興なるべし。

とある。木崎君の云はれた通り眞に滑稽である。その滑稽がだんまりで二度の勤めをするとは、猶更滑稽である。

薄井小蓮名は龍之と云つたと記憶するが、明治二年に出版された高山操志の題高山彦九郎肖像には、尹之號小蓮信濃人とある。明治初年に裁判官をして居つたが有名な法螺吹きで、史談會でも筑波山義舉に自身關係したと云ふ、エイ加減な作り話を持ち出して史界を混亂せしめた事があつた。その札付きの滑稽が此に再現したのである。と申すと甚だ失禮だから、その出所を明示するために二三の對照

を引用する。

(薄井) 山陽先生は酒が廻つて居るし、少しは酒癖もありますから。

(隨筆) 山陽は折から酒氣もあり、聊か酒癖もある人にて。

(薄) 馬鹿な奴だ、人と約束をして出て来ぬと云ふソンのことがあるものか。

(隨) 何を馬鹿な、人と約して出て来ぬと云ふ事があるか。

(薄) 所が山陽先生、今までこれへ出て居た給仕女を見るに、至極柔順で舉動がいかにもシトヤカであるので。

(隨) ところが、山陽は其席に在つて周旋してゐた、女中の至極柔順で其舉動が如何にも淑やかであるのに。

この位で大抵立證は出来るでしょう。家庭の頼山陽著者が評した「滑稽」の幽霊が此へ出て来たと云つたのが穴がち嘘でもありません。

要するに見合ひに行つた所が、先方が出て来ない、そこで山陽先生そこへ出て居る女中を貰つて、ヌタコラ歸つて来たと云ふ簡單明瞭なお話が、乃ちこれである。

著者はそれを興味と云ふ。いかにも興味ではあるがしかし滑稽である。木崎君の名は敬意を以てしてば、本書中に出て居る「家庭の頼山陽」の書名も出て居る。その木崎君がその「家庭の頼山陽」に於

て特に「滑稽」と銘を打つた材料である。興味ではあるが滑稽である此の悪材料を、出所を特に隠匿して眞面目に山陽傳の中へ混入されては困る。申さば一種の毒殺である。

こゝで話は再び前の(八)未亡人の手紙一件へ戻る。著者は此の二つをどう連絡しようとするか。著者自身に調製された年表と、未亡人自身に書かれた結婚の一年違ひをどう解決されやうとするか。たゞ一年の歳の差と云ふ以外、秘密の鍵がそこに在るのではあるまいか。

十一 悪材料の復活

それと連続してモ一つの怪しからんのは、その次の(十四)三樹三郎に就てゝある。(七一頁)三樹三郎と其師の一項に就て、著者は其材料の出所を「これは三樹三郎の門人薄井小蓮氏が、私の郷友久須美雪堂氏に語つたのを其まゝに録する」と云つて居らるゝが、勿論前項に云つた結婚問題と同一な頼山陽の家庭」と云ふ小冊子から出て来た悪材料である。そして悪材料としては此の三樹の方が前の女中話しに輪を掛けた悪材料であることを知られたら。

一旦新聞に出、再び單行本として出た材料を、一度は無出所に、一度は箇人私記として出した理由は別としても、それが札付きの悪材料として定評のあるものである事だけは預め御承知ありたい。

これは「其まゝに録する」と云ふから著者に責任はないかも知れんが、この方も——イヤ此方特に跡

方のない丸つさりの作り話である。話としてはいかにも面白い、もしそれを事實とすれば山陽先生の死を飾る好々逸話であるが、いかせん事實は全く無形無根である。

長くなるから、且つあまり馬鹿々々しいお話だから此に擧ぐるを略するが、一言にして云へば、山陽先生息を引取る前に遺言として、此のイタツラもの（三樹三郎）はどうも手に負へんからと云ふので、その教育を生前の仇敵であつた人に托すべく、且つ自分が息を引取つたら死骸はそのまゝ棄て、置き、此子を伴れて行つて頼めと云つたので、妻君その通りにした所、先方も大いに感じて一切を引受けてくれたと云ふに在る。事實とすればいかにも古英雄の面影がある。山陽先生その位の事はやうな男だが、惜いかな事實全く無根である。

論より證據、その文（隨筆）に

（一）川上（委託を受けた本人、名は儀左衛門）は一層感に打たれたと見え、それなれば私も參つてお世話をしましょうと、直に妻君と同道し、萬事の世話もし（二）葬式が済むと、三樹三郎を連れ歸り十六歳まで懇切に教授をしてくれた。

とあるが（一）山陽の葬式帳は今以て頼氏に保存され、頼山陽大觀に出て居る。それには棺側から焼香までズラリ八十七人の名が列べてあるが、その中に川上とも上ともない。

（二）の方は、前に云つた本書収録六頁に亘る未亡人書狀。これは四十九の中陰明けの日閏の廿五日に書たものだが、その中に山陽遺言を記し「又二郎三木三郎内に置候へばやくにたゞすになり候ゆゑはん料出し候ても外へ遣し候やうに申置候」とあるのみで、例の英雄極感的好逸話は夢にもなく、五日を過ぎた今日「三木三郎はかよひ兒玉へ遣しをき候へども、これもいまださぶしく内に居り候」とある。兒玉は山陽門人にして帷を京都に下し居るもの、川上儀左衛門なんかの話は夢にもない。丸きり夢物語りである、イヤ夢にもない話である。これも興味といへば興味であるが、全く事實にならぬ話を興味専門で混入されては困る。

要するに此の二つ（結婚話と三樹三郎に關する遺言）は、一度四十年前世に出でたのを、冷笑の中に黙殺されたものである。周囲の空氣から云つて興味ある此の二つのロマंचチックが全くの根なし草である事は世既に定評がある。

思はざりき、それが大正十四年の聖代に新装されて再び世に出でんとは、その所謂暗黒面なるもそしてそれらが著者の所謂山陽の暗黒面觀察の一材料たると云ふならば、その所謂暗黒面なるもの、價値が疑はれなければならぬ。

（付記）山陽の妻君問題は重大事件である。これがモ少し分ると山陽傳中の分水嶺たる此年代の事情が幾分判明するであらうと思ふが、此れ位分らん話はない。

著者の取つた材料が無類の悪材料として、早く既に世の中から葬られたもの、幽霊である事は前云

つた通りであるが、著者は其上にも一つの悪事をして居る。

一切が原材をそのまま取り入れた事は、前に出した貸借対照表で分明して居るが、その中たゞ一つ、ホンのたゞ一つだけ私案を加へた所があつて、しかもそれが大變悪ひものになつて居る。その加へた私案と云ふのは、五八頁の始に、

山陽は始め小石の媒妁で、二葉屋と云ふ寺町三條上る煙草商雨宮某の娘を妻君にして迎へることに云々。

乃ちこれが前申した見合の當日違約して出て來なんだと云ふ豫約流れの未成品としてあるのです。所がこれが大變悪るイタヅラなのである。嘘つき専門の薄井小蓮の原文には、此の「寺町三條上る煙草商」がなくて、たゞ單に住所不詳「間宮何某と云ふ商人の娘」となつて居る。それではどうして「たばこ屋」が付いて來たかと云ふと、そこに大變悪るいたづらがしてあるのです。

土臺ちよつとも見當の付かん此の妻君話しに、一點の光明を與へたのは上野南城と云ふ人から森田思軒へよこした手紙です。それは「頼山陽及其時代」の一七七頁に載つて居る。その書である事柄をそのまゝ採用すると丸で間違だらけであるが、よく／＼玩味して行くと間違だらけの底に大變よい種が埋まつて居る。爛眼の思軒氏も此手紙にあまり重きを置かなかんだが、自分は山陽妻君の身元調べは此手紙が唯一の手がかりと思つて居る。

寺町三條上る所の二た葉と云ふ煙草屋の娘と云ふのは此手紙から出たものです。

南城氏はそれを山陽の現妻君、乃ち問題の未亡人の在所として居る。

所が何を勘違へしたか、此著者はそれを豫約流れの方へ持ち込み、おまけに煙草屋の下へ「雨宮某」を入れた、此の雨宮某は前云つた如く小蓮の方に在るので、全く筋の違つた二つを繼ぎ合して一つにしたのである。

豫約流れとなつたものならごんな小細工をしようが、ごんなイタヅラをしようか害にはならんが、そこに困る事がある。と云ふのは小蓮の方の話にも「煙草屋」が出て來る。

土臺丸で當てにならない小蓮話ではあるが、これ丈けの話をするには多少の種があつたのかも知れん、所謂「千三つ」位の眞實が含まれて居らんと限らん。その千三つの一つとして此の煙草屋を拾ひ上げて見やうかと思ふ。

それには「親許は江州仁正寺の煙草屋」(乃ち未亡人の親元)とあつて姓名はないが、妻君を江州(近江の人)とするのは皆認めて居る所である。

煙草屋に共通點がある。天秘未だ容易に漏すべからずといへども、自分は此時分寺町三條上る所に「二た葉」と云ふ、「江州出」の煙草屋のあつた事をぼろげながら探り當てた、イヤ探り當てかゝつて居る。

今が大事の所である。これがかまると大分話が面白くなる。それを此著者に薫瘠を一つ鍋に入れて煮て仕舞はれては豈憤慨せざるを得んやである。序に讀者諸君に注文す。

山陽の妻君問題は大變重要なものだが、ちよつとも分つて居らん。

山陽行狀には。先生入京。娶小石氏。近江人。墓誌銘には。君諱梨影。小石氏。江州人。とあるのみで正當な史料は此以外何に一つもない。

行狀は其人（未亡人）を目の前に置いて書た内弟子江木鰐水の筆。墓誌銘は「余庚同君。悉其平生。」と自賛して居る後藤松陰の作。いくらでも事實が知れるのに、此れ以外も書てない。

小石元瑞が養女分として世話をしたのは事實らしく思はるゝが、それにも確證も旁證もない。

「柴折り焼く」を詩文の中へ織り込である山陽自身も、筆を握つて何か書てやらうと鶴の目鷹の目で始終山陽身邊をねらつて居る小竹、竹田も何も書て居らん。諸君一つ身元調査をやつて下さい。

x
x
x
x
x
x
x

○道邊かニ目的を考へ早大第二巻設計
以後各巻の分類を見るに如くは学術的の出
来とみれば、その印刷に附する是れからこ
ろ眼するが、又三巻といふ一類と、その一類の
巻の教とを考へけると左の如くは六巻と見
くは能なるは三巻と云ふは豊田の如くは、高橋大
七流行する各巻に、巻の如くは、その一類と
あるが、その如くは左の如くは、その一類と

忠臣蔵

七八四

麦原

三九二

勇我

五〇二

一之谷	一六二
味背山	一一〇
千本橋	一九一
伊達騷動	二三七
鏡山	二一六
助六	一二四
うたかたおしな	二〇三
不夜花古伝	二二一
ある道邊の分類と死後との子があらざるの傳の數の	

死後集

四八四

早大のエレクシヨンの如くは臺中にあるもの

見よべきである

見立傳

- 1 き日ひ風俗 侠客侠婦侠賊いよせの若者名妓等、擬し名優の中像を画けるもの
- 2 浮世風俗、擬しもの
- 3 江戸の名所并江戸の名所 名物おと因に劇中人物を画けるもの
- 4 風情をまことに見立たるもの

割つくし月つくりの類

5 器物又三

鏡 四子板 押箱 酒盃

團扇 柱掛 木と因とて画

6 名刺名や説見三

忠臣蔵 八犬傳 田舎源

氏白縫 物持 彦と因とて

この

以上見立傳の部数中 早大の巻画の数がいん不
とあること 油心と云ふと大坂左のこゝろとある

一 きりひ見三

五三三

一 段本位見三

二三七

一 八段人物見三

五三

一 八犬傳見三

五七

一 風情 見三

四九

一 浮世風俗見三

二二三

一 文句入流行見三

二八一

一 器物又三

六三

一 いろく見三

二一八

一 忠臣蔵見三

八九

一 注名所つくり

百二九

江戸名所づくし

る七三

江戸名物のくし

る六

名刺歌題づくし

六四

又五條と画家の心算と苦心したるものむちも執味の
 流つてあるものもある、彼名伶よりして當年の從
 たるものむちもあるけれども、其數の夥しいものもある
 一説に上記の數に依つてもあることが出来ぬ
 のむちが執海と執き、露米の世に於ては、
 きり、横井也右の執海の記を初め一見すること
 を得れば、此の文ハ也右の集に漏れてあるものもある
 前年、執海も、
 此の記の原本とちをとり取り冊中に入るもの

文を別々に入らざるなり、以為るは讀むことが出来
 るいりを遺域より、此を傳り受け一説する
 るといろくの墨蹟とせよ、一卷に收めがあるが
 皆本陣、清盛、氏の一色亭、閑ん
 の紀文、和歌、
 寸のおむらうき地文、紙に細出、
 行、
 州、
 らさぬ、軒、浦の月、の一句がある、
 の寸、
 のこととせぬ、
 のありて、
 のありて、

の中身が、持玄にて無いか、峰須賀原寺家
二枚と其の高時の回か、花とあり、また五十九
家の熱河池と収めあるから、略に大要か知る者
一降次賀原寺七こ、八折とんじることかある、又也者
の荒原尾出徳川の奥方七こ、八折とんじることかある
也者、八折の陸原、従い、此のむ、三十日、わう、地記、あ
つたこと、八折、海紀、行む、む、む、ことか出来る、為、家、未
ハ、折、海、の、舊、家、七、井、といふ、家、の、書、卷、三、四、を、齋、ら
し、き、ん、そ、ん、じ、其、中、に、い、ふ、依、文、山、が、他、人、の、心、に、傷、
折、海、の、里、の、泊、を、折、し、し、よ、の、と、細、井、廣、津、の、也、
と、卷、菱、湖、の、古、卷、と、か、あ、つ、た、菱、湖、の、古、卷、と、
折、原、記、を、折、し、し、よ、の、か、其、の、後、記、より、丙、申、の

嵐、紋、の、折、海、と、折、し、し、よ、の、美、を、折、り、得、た、此、の
古、い、歴、史、に、あ、る、邊、り、あ、る、ふ、る、の、に、尖、り、置、つ、と、存
する、古、墨、跡、の、以上、の、お、ま、ト、ト、無、の、折、子、に、あ、る、
○、或、十、年、折、海、行、く、が、夏、出、つ、た、は、こ、と、か、あ、る、の、全、通、折、
海、紀、に、乗、つ、た、こ、と、も、あ、る、か、ら、と、思、ひ、ま、つ、つ、と、あ、る、邊、り、お、ま、
を、折、ふ、こ、と、○、い、ま、つ、た、折、海、の、舊、家、の、七、井、と、い、ふ、事、
と、折、海、の、折、海、の、折、海、の、折、海、の、折、海、の、折、海、の、折、海、の、折、海、
け、し、七、十、六、の、位、か、ら、い、ま、つ、た、折、海、の、折、海、の、折、海、の、折、海、
考、の、古、と、決、き、か、い、あ、る、一、折、折、の、こ、と、を、折、海、の、
ま、い、か、ら、夏、の、あ、る、お、ま、の、い、ま、の、折、海、の、折、海、の、折、海、
例、の、折、海、の、折、海、の、折、海、の、折、海、の、折、海、の、折、海、の、折、海、
ま、い、か、ら、夏、の、あ、る、お、ま、の、い、ま、の、折、海、の、折、海、の、折、海、

を飲むのもさうくさうの梅酒にシンナチの汁を流
しんじつ好を思ひいんをさして道を渡さるるを好孝
従携り高くとあきてるや止めり引返し以てシンナチの
トニ子に工事をシ濡ぬくため玉工事を着成するもの
説もあるが科学的に思ひぬの出る不を思はぬと変化
せしめる新工法を施し工事を繼續するに變へ
て、**日**例のみ名を問ひぬの大湯を金と淫涌止
まう却つて各系に新湯出さる持持さう、**道**邊が熱
海の業を明つて**歌**の踊りと美味飲のぬ匠の研製
からぬの類性しぬ**道**道を又此せしめつてあつた
浦の流るん浸みぬ海岸は今に成見よりさうのバ
ラウの貸別着お料理を成つてあつた、**海**

城なるものて停車場附しぬ橋尾の支店敷多く
出来ぬおに、数年を経ぬ此道の山別に社地と書
すべし、いんを就して今経道をつとめつてあつた湯ヶ
系天の倉、石をわら橋を築いぬぬ来ぬる金子馬
治の流しぬ橋の天會屋此流大湯なるんはなるや
其他の建築に手を掛つてあつた、さうの温泉に就して
一行の秘をたあつたものをあつた、**秋**の好徳秋におこ
いぬ漸んぬ教する、**津**のいぬ露なるも持持るの大無あり
土中、埋めぬ花にさすもの後、天會屋の手に入
こんるの温泉の中を流しぬるもの、其の傍のいぬらぬ
おかしらぬいぬらぬ、**也**も道の名をぬ見候のものを
あつた、**丸**の松樹あるぬぬきぬはぬらぬぬぬらぬぬらぬ

あの山は毒き草を食ふべし風改一信もん着し山の上
行きたんを毒草を食ふべし例の道遠式也
道遠のなごんを執つてさうし一枚の書もあつた
瀬ももたつたさうしあつたけあつた、諸視さん
ハ大樹のや、高かさ大樹幹四方にさうん中
のの故地を存する人あり、その道遠さう、役の
行者を必する時、道遠梅屋の二樹、攀りさうとしか
つてさう、こんと其おは、縁の縁をさうさうし
さう、道遠笑つてさう、白衣を着けさう、こととさう
さう、羽織を裏返しして白のお二重の裏地を見せ
さう、こととさう、噴飯す、道遠一冊の画帳を出して、余
三首四首とも、余宗其芳金の三文字を著し、あつた

塞く、道遠一書、其の友を一卷と、さう、器を御
い、一色身、残数と、七巻と、さう、余と、さう、
余残の字と、底心、日、堂、多、留、影と、さう、へしと、さう、
道遠之、従、お、熱、海、未、元、の、念、を、い、道、遠、の、心
熱、海、の、未、元、を、自、考、せ、る、を、察、し、と、さう、お、元
の、未、元、熱、海、某、さう、北、野、の、自、分、の、寶、也、自、分、か、熱
海、の、所、長、と、さう、の、事、場、の、何、か、あ、る、さう、但、北、熱、海
の、歌、を、集、め、集、し、さう、ことと、さう、其、故、地、古、に、さう、さう、
さう、さう、北、野、の、歌、を、集、め、集、し、さう、是、ん、自、考、し、と、さう、大、切、の、紀、念、也
と、道、遠、余、の、な、ご、ん、の、故、地、向、二、首、を、認、む

おろこち、唯、熱、の、考、花、の、村
せい、ら、ま、の、音、は、ら、う、し、と、さう、さう、

○河井黙阿彌の家を継ぐ者校友河井俊也も黙
 阿彌の志を黙阿彌の自筆の狂言心者心る者を工口
 たりつ所し以て冊子を寄る未だ黙阿彌の志
 の先年の中寄せしことかあつたか
 黙阿彌全集の首巻を置く為前年の貴派
 を増補しその中拾め依敷の多いものあり狂言心
 者の心る者へ拾めて同様のものささる心者生流々
 一より別つておちういよは、今、震受、此方の
 行を多くてい、えりちちの家、ちつた方め、
 僅うの笑を免かんれといひ、譯文解説と全文
 の活版に附し、いよを、いよ、ぬめお、

解説

「狂言作者心得書」といふこの小冊子は、黙阿彌の極く晩年、門弟の請によつて書いたものであります。いつ出来たものか明白ではありませんが、多分明治二十年以後七十三四歳頃のものと思はれます。原本である自筆本は、高弟の一人故竹柴其水が秘藏してゐたので、一昨年の震災を免れたのであります。書きやうは至極簡單であります。江戸末期から明治へかけての江戸狂言者の勤めぶりや生活ぶりを大凡知ることができます。二三同好の友人の勤めもあり、一門の者の希望もあつたので、ホンノ副本を作る積りで、玻璃版によつて複製して見たのであります。

複製はかういふものに経験多き稀書複製會の主事山田清作氏の御厚配によつて、殆ど原本通りに、手際よく出来ました。附記して謝意を表します。(大正十四年七月一日、河竹繁俊誌す)

○河井然河井の家の後継者校友河井安俊も黙
 然河井の伝と黙然河井の狂言心者心者心者心者
 心者心者心者心者心者心者心者心者心者心者
 心者心者心者心者心者心者心者心者心者心者

(表紙) 狂言作者心得書

- 一 立作者は大夫元座頭ニ相談の上世界を極(め)狂言の筋を立(て)座頭へ申し一場づゝ筋書をなして二枚目三枚目の作者其人の得手の場を渡し狂言に仕組ませ横書出来の上讀合せをなし同じせりふある時ハどちらかはぶき一直し)なして清書をさせ正本となすなり
- 一 立作者の書物は大名題(顔見世ならば)だんまり大詰二番目淨瑠璃なり
- 一 立作者ハ二枚目作者を伴ひ座頭の宅にて狂言の内讀をなす座頭一座の役を聞き役不足のなきやう相談をなし立作者添削の上表向き三階にて本讀ありて一座へ狂言を聞かすなり
- 一 立作者大名題を書き小名題(俗ニ四枚)ハ二枚目作者書く

- 顔見世寄初の節三階に於て來年の惠方へ向ひ立作者大名題を讀ミ二枚目小名題を讀むなり
- 一 立作者淨瑠璃を綴りのり入へ自身に清書なし三太夫の家元へ狂言方持參なし家元に讀ミきかせ本を渡す狂言方へ祝義として金百疋蕎麥を馳走なすが例なり
- 一 立作者は名題淨瑠璃ハ必ず書くべきものなれど四代目南北翁ハ淨瑠璃不得手のゑ始終二枚目作者ニ書(か)せしなり
- 一 立作者ハ看板番附の下畫自身ニかく人もあり外に畫心有る者なれば差圖してかゝせるなり
- 一 立作者は狂言方見習等を宅へよせ書抜きをさせるなり
- 一 立作者は惣渡ひの節三階へ出席なし一日の狂言を一見なしせりふなどの誤りを正し又ハだれる所を其場の役者と相談をなし直すなり初日の内棧舗にて見物なし悪しき

○河井然の稿の家と修けりて校友河井安俊とて黙

所を直させるなり

一 立作者ハ初日より出揃ひ迄日勤なし仕きれぬ幕の長短を斗り不残出揃ひし上ハ次興行ニ掛るゆゑ日勤ハせぬなり

一 立作者は作者中の給金を表より受取り夫々へ渡すなり昔ハ立作者仲ケ間の天窓をはる(給金の上まへをとるなり)事有り近年ハなき事なれどかゝる事ありてハ仲ケ間の用ひ悪したとへば五分の拂ひの節ハ給金高ゆゑ立作者一分足し六分ニなして拂ひ又ハ手附金延引の節は立替て遣すやうニなさバ自然と用ひらるゝ也
一 貳枚目作者は立作者の相談相手にて萬端引受多用なるなり書物ハ小名題(四枚)狂言ハ顔見世ならば四立目の淨瑠璃五立目の世話場又ハ二番目をかくなり

一 貳枚目作者ハ本讀前ニ立作者より相談なき名題役者へ役の柄を嘶しに廻るなり

一 貳枚目作者ハ顔見勢寄初の節小名題を讀むなり
一 貳枚目作者ハ役の納り兼るを扱ひ納めるなり初日の内日勤出揃ひ後ハ三枚目ニ頼み合(ひ)出勤をせぬ事あり
一 三枚目作者ハ萬端貳枚目同様ニて書物ハ三立目貳番目序幕なり初日より日勤ニて用事ある時ハ狂言方の筆頭に頼むなり

一 狂言方とハ四枚目五枚目の作者にて稽古を引受てなすなり此稽古をなす者ハ本讀の節作者の傍ニて本を聞一日の筋を能く覺え我が稽古をする場ハ其前ニ
一 遍本を讀み我ニ解せぬ事あらバ作者ニ能く聞置べし役者ニ問はれて答への出来ぬハ恥かしき事なり
一 狂言方ハ稽古中其役者の覺え憎きせりふへ印を附置

初日ニ早く附てやるがよし舞臺へ本を持出(し)せりふを附る時ハ成丈ケ見物へ知れぬやうな役者の蔭か道具の蔭へ身をよせてせりふを附るなり

一 狂言方幕明の木ハ能(く)板附キの役者を見て幕を明ケ幕切りハ早く舞臺へ廻り幕引きの者を見て舞臺上手へ裏向きニしやがミ居て何とやらしてト木頭のせりふと一緒に立ッてチヨント打なり前より立ッて居て打ッハ見ぐるしぶさまなる物なり

一 狂言方ハ正本の清書せりふの書抜きをするが役なり稽古中役者の直し出し時は其作者へ届ケゆるしをうけて直すなり

一 見習ひは諸事萬端見習ふなり稽古中狂言方の傍に居て其場へ出る役者を呼び集め稽古中書抜にせりふ抜ケて居る節是を書入(れ)など致し稽古の仕様を見習ふなり

此内誰の稽古の仕様がよし誰のハ悪しと能き人を見習ひて稽古を覺へ狂言方となるなり

一 見習ひハ初日ニ衣裳小道具の附師帳ニ記し有る品をいしやう小道具ニ代りて役者の所へ配りしものなり又名題役者の所へ幕間の聞合せに幾度となく行くものなり是ハ見習ひに限らず狂言方も聞合せに行くなり

一 見習ひハ初日幕明きて舞臺上下ニ壹人づゝら裏きニ控へ居て小道具等不足の時ハ樂屋より持運び稽古人の小用をなすなり此内に初日の出しやうな役者へせりふの附ケやうなど見習ひて覺ゆるなり

一 見習ひハ芝居休日中立作者二枚目作者の宅を廻り業用の使ハ素より俗用の使をなす其折ハ作者宅ニて食事をさせ小遣ひを遣して遣ふなり

一 見習ひハ商家の丁稚同様ニて昔の給金ハ一ト興行

鼻紙代として金一分か二分なり實に馬鹿々々しき事ながら
稽古を覺へ狂言方となり又作者となり人に用ひらるゝを
望みて一生懸命に出精なして立身をするなり

一 見習ひハ作者の筆取を初め正本の清書かきぬきを
覺ゆるが専一なり

右者故人二升屋二三治中村重助竝木五瓶五代目
南北等の教示なり

○此書開く乗る本町の公館を以て珠珀堂と二三の
圖書を携ふ中に稀歎の書あり 八月十一日記

一 住よし物修

二冊

古流字版元和漢か此物修の流字本
云と珍らし 校字書入あり いまど何
人かを弁せざる 元正しに一行流字の
るを録す引く 校字目のことを経
四大典に均字とあり 此書價三十
六圓 川崎千虎の家より出づる前に
精いたる大和物語と同一持まらざる者
入ら或の同し人か彼是を照せば
或の筆者を判し得べし

一 能面目利之書

一冊

此書川崎千虎の自筆を二古来の
名寫きし面を別巻し其の心者の特
徴を説き 鑑定の手引とて心者
の印を振し貼りつけあり 面を鑑
定するに要用の書也

一 燧代衣圖

一冊

日記

一冊

文化五年戊辰仲夏日記書字畢 源相伝
義博と巻尾にあり、そんを千虎亦騰
寄り也別に記し冊と添ふ

一 山姥謡抄

二冊

寺崎洞龍子の撰と傳る尾張に於て上坂
のよの、福抄をよみよきそ、稀んるるよき
余先頃一巻を得しよきん、端本をよみ
つアト招きし

○夏ハ午睡ニ代わり、湯を讀むの事一具ハあり、
此の内から往く、あつと受けることもある

一昔原の老魁がハ文字を讀むのハ大名行列
：傲つたよきと思つておれが、七鳥並に
奴の態度：擬したよきとり子、こんも一説
あり

一昔一の湯屋、ガソロ口があるに著るの

選浴、較々勢物の感があるに、並風若
の撰(笑)の風が遺つたよき、解するハ、あつ
たとうきつ、あつ

一、つり原を著るよきの文、文覚院の御つて、初巻
帳を讀むるを、閑して、寄附金、養集者、の意
氣、初め、あつと、しと、獨笑したか、此の寄
を、中心として、信田の御つて、御つて、あつと、
郎が、文覚を、やつたこと、あつと、文覚が、結、
き、冷、笑、する、せり、つ、は、此、優、る、よ、き、と、あつと、
語、つ、ら、早、大、に、記、念、守、る、よ、の、折、信、田、の、文
覚、初、巻、帳、を、元、捨、して、あつと、あつと、登、録、は、
寄附者の、説、に、あつと、あつと、七、一、具、ハ、あつと、あつと、

しん

一陰曆の四五月頃、玉川に鮎を漁りしを、
携いて四谷まで来た。久しい方のまゝであつた
松竹新居に來ると、意がひける。此の鮎を
携くことの難うしを、
唄ふを例へて、
唄はぬに狐は、
あふが此唄を、
遊女が夢裏にや、
と云ふ。

あふが、
こ人は、

こ人も、
こ人も、

のこつてある。

一江戸のノニキ時代に、
うさぎ譚を、
巧みな、
家の、
代、
大、
ん、
こ

九てみるおせしうい記さうつかりさるすしと
信することか出来さの物る氣かす

一 茶番が志きうに流行して巧み人を擔きさる成
功を誇つた時代にウツの精錬さんたことも悲愴
に似るある、或るウツの老人と云こえいのが、誠やの
某月某日自宅でおせしういふち又さると廣くを
やし、其日大勢が読めかけると主人不在と断つ
た類いなる、今の或る記さうの三面種のや
うな珍事の報告を改め措つて配らる、人を
驚かせしことも度々あるが大抵、其の記さ
のどこかに、皆らと隠し文句があつたよ、
遊世三三の子か生れたとつた能報をいふ

行の支の頭字を後とし、今の花しは是れを
とあるのむ、人小本擔かんと一笑しとよあ

一 幕方の若年寄田沼山根守 云知か公退後の
毎夜染地の自邸心、唐河、天鷲絨の蒲団
と表い以上へ、縮緬細久の土俵を捲く、多勢の
女や考にお撲を元らも、勝負に物さす具あ
る元口の者、縮緬羽二重さの清くを遊
へに、其時、凡来山人の平が源内が長柄禪
念珠とゆふ段本をゆりて遊遊ととつた
こん、其魚の嬉樂の江にさる者いそある一印
のあり、禪念珠と云んを倚流かあることハ
あうううう

一 依田公海の著し本朝史初新編、魔伝義
 者小春の事か載るをみる。幕末洋川の故の
 女の故の門の奇術の柳川一徳の書を讀むか
 一とあるが、えんを王の偽外、此を而して
 但中野のえんを自找料、より海を黙
 禰が魔伝使ひのせしとつを考へてある
 一 此頃の中央公論に真山吉果の馬琴の性格を仔細
 二論し、よか出で居る、一種の馬琴の観心あるが、
 一概に馬琴を臆病と見る人、昔前、直言
 するを遠慮し、さうも業、ハ思ひ分出いて
 詞を遣つてあるとあるが、これハ必しも臆病
 の故といふ難い、偏狭の彼の性格と世間交ハ

リと好まらう、つれ彼を動かすある筈が、臆病の
 故とばかりの評し、あつた、彼人の時と、大膽に
 こそ、先向を敢てしてある、現に、こと、ひ、人
 が敬意を失した、場合、然るも、自から斯く考へ
 ず、場を、さ、い、い、よ、は、よ、い、と思ふ、は、と、お、え、を
 る、と、い、る、漢字が、福を、い、ハ、ケ、と、ある、へ、き、人
 を、偏、使、の、文、と、の、者、を、羅、と、せ、し、む、ある、
 一 吉田の速断も困つたものがある、**偽証**
 つめ、し、や、ん、し、よ、か、ん、か、し、や、ん、し、よ、か、と、て、も、し、や
 けん、な、氣、あ、る、と、い、は、れ
 一 吉田の速断も困つたものがある、**偽証**
 つめ、し、や、ん、し、よ、か、ん、か、し、や、ん、し、よ、か、と、て、も、し、や
 けん、な、氣、あ、る、と、い、は、れ
 一 吉田の速断も困つたものがある、**偽証**
 つめ、し、や、ん、し、よ、か、ん、か、し、や、ん、し、よ、か、と、て、も、し、や
 けん、な、氣、あ、る、と、い、は、れ

作が、折子をのびつたう叩いたりするのを、羨望性
と見難い、荒の無いベランメー、秩谷の婢、エジ
プト病的と見難い、マゾヒスムは大陸病の日
本の女子の時代と見るべきものあり、あとのあり
のひある。

八月十二日記

○尾上榮舟(八郎)とあまの、歌と草假名といふ書
が出た。これ、こんど近頃の名著である。此人は、大に肉魚
の門人と見へるが、歌と草假名の研究者と一と見へる
方一人者の、五十嵐力の山書をも月旦して持し、草
假名の此人である。本書も、上代の歌、殊に古今集
の和歌、就て、こんど歌と草假名の合はれ、このあり
肉魚、且つ新らしい研究もやると見るが、此を

らうん、これを、と、他業的のもの、この研究の一端を
述へ、(さ)きさの、快の、業の、と、あ、は、は、は、の、感、一、七
す、が、草假名の研究、此書の、六分、通、り、を、よ、め
如何なる肉魚、い、え、を、と、精、一、研究、し、れ、よ、う、外
に、い、あ、る、ま、い、一、つ、の、考、し、ら、う、墨、蹟、が、澤、山、と、世、界、に
あ、ら、ん、ん、ま、ん、と、見、る、ま、い、の、便、利、が、あ、る、と、見、る、比較
研究、七、出、来、る、譯、い、あ、る、が、こ、の、比、較、研、究、も、
肉、魚、を、扱、め、て、あ、る、ま、い、の、研、究、比、較、を、就、し、一、種、の、後、
眼、を、要、す、る、い、ま、あ、る、ま、い、の、著、者、の、い、ま、あ、る、ま、い、の、眼
を、有、つ、て、あ、る、か、い、ま、あ、る、ま、い、が、肉、魚、の、門、人、と、あ、ら、ん、ん、其、の、
後、も、あ、ら、ん、ん、あ、る、ま、い、の、相、當、の、眼、か、あ、る、と、見、て
よ、う、ら、う、ま、い、の、研、究、の、依、果、を、見、る、と、従、来、古、業、

家が鑑しと費之は道凡の依理行成にしてよハ
十の九令九を破ん仕島つてなる、随分無残
の感もするが如何、上代傳名の研究がこれに
せんておれあ、却て之れをいひ、此道の研究
が真剣に始まりて来に、端緒と見て此書を書
ハ務むる、昔から上代傳名の遺書を珍とす
こ一種の流があつて、さへ多く富貴の烟と居して
おる、保し多くの盲目者依り、其の巨著の筆を
散らすを以て、筆者が道凡の遺書に依り
たの故である、然るに、然らずとて、彼等
の狀を七遷の遺書に譯わいあるが、さへして
其の墨蹟、尚上代の書寫を父の如く、いんが自らい

る、此書は古の遺書に指針がある、此書の價
値の歌の研究も、七遷の研究もあるやうな
思ふ

八月十四日

○前の執海は、内なる、道凡の遺書、淡々と
自家の一比び、小説家としての、悔い、流か、生か、さ
ド、シテ、動機、か、ら、と、いつ、と、私、さ、君、の、書、の、二、三、の、事、の、
及、洋、文、を、後、に、感、ず、る、所、か、あ、つ、て、小、説、の、筆、を、絶、つ
た、とい、ふ、か、さ、う、か、と、さ、へ、な、さ、う、さ、の、道、凡、の、道、凡、
ハ、西、洋、の、小、説、の、形、式、が、自、家、か、執、し、て、お、れ、馬、琴、其、他、
日、本、式、の、小、説、に、比、ぶ、る、と、然、る、に、離、れ、が、あ、る、一、旦、浸
潤、し、て、馬、琴、其、他、を、脱、却、し、て、自、全、紙、白、紙、と、さ、る、の、か

東西洋の形式とやうな自



第六十七百五十七号 (第三巻通商雑誌)

るじが

篆刻家

大臣やお上り議員

ダクの目年君

て五六十年も技術を磨いて来たといふ篆刻家その人である、篆刻家には篆刻の外にも多少の舞臺の大津繪師家としての立派な腕を持つてゐるその篆刻家としての牛面には篆刻屋の主人公といふイヤな家業を持つてゐたのは初めての見取であつた、それにして今年は何のあたり年かは分らないが「政變のおかげでね……」と意外な方面に話が結びついてゆく、さて政變と篆刻師との因果關係、以下目年君の話である。

一度代官にでもえらばれやうものなら紙や扇子に「どうぞ一筆を……」と押しかける、まして大臣や官といつたやうな
高位高官 においてをやである、門前市をなすとは嘘のやうな事實である、夢窓、木堂、大塊などの筆目機なら威の昔に用意はあるが筆に自信のない新大臣や新次官、或ひは新出の貴族院議員や代議士などに頼る用意のあるものは十八中に一人か二人、そこまづ馴れ馴れしいのは篆刻師のところである篆刻師の方では待つて来たとはばかりに「判は大判、中判、小判を各二通りづつ六個を用意しないといざといふ場合に間に合ひませぬ」と相手を嫌しがらせて押しつける、併し判は間に合せても持つて生れた

「この頃は」情華といふ竹の織羅で作つた筆があつてそれを使ふとどうもカスレができて如何にも大家の筆のやうな味が出ますよ、この節の篆刻師はたゞ判を彫るばかりでなくこんな方の教授もやらなければなりませんから中々忙しいですといふ何しろ今度の政變で作られた新大臣、新次官、さては近くえらばるゝ貴族院議員などからさぞ筆が殺到するのだらう(眞價は目年君)

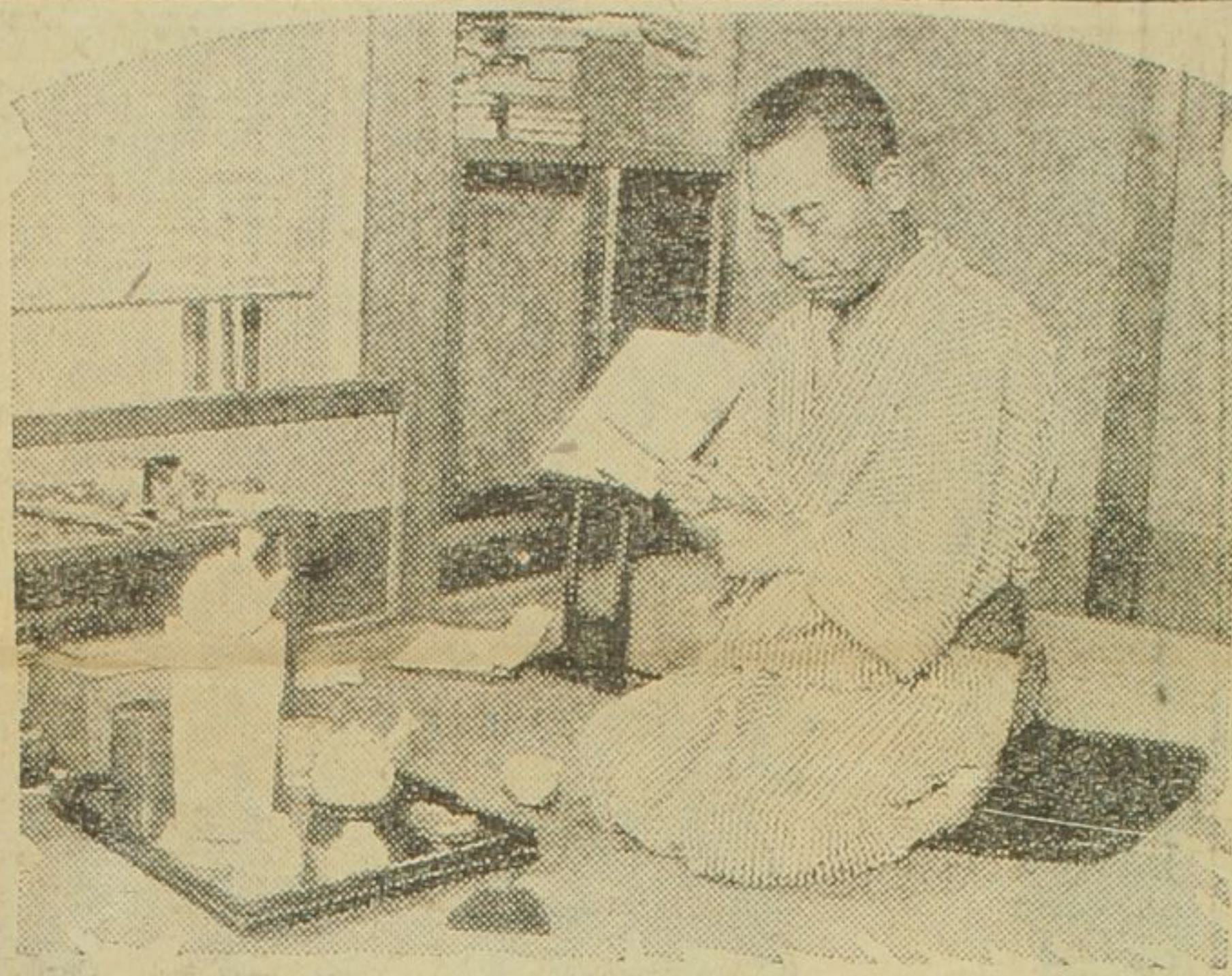
から始つてウグヒをいから、断然小説を履く脚を、移つて、實の初めから是長の方こそ志して一筆をまて、魚雲し以方がよかつたのと云ふておれた、芝居の脚を、と書くと其の素養の重く誰んを免れ、うと云へば、ら、黙阿弥の董洵か、多々々々々々を、と云いた、河内河の、研元、無倫助けて、おるひあゝ、八月十日記、○今日の神の青竹、旋舞、数珠、を、八月十日記

一佛文譯

景徳鎮陶録

一冊

千八百五十六年の開版、御う巻尾、にホフマンの口を洵説を添ふ、又、有者



藝妓屋のあるじか

天晴れ篆刻家

日参する新大臣やお上り議員

汗ダクの日年君

こゝは牛込神楽坂通りの裏手、壁を張らした抜き衣紋の仇ものがしつかりなしに出つ入りつするところすくそれとなつかれる藝妓屋の春陽、長火鉢の向かふには大方イナセな角刈り頭をもさまつてゐるに思はれるがこれはまた型にはまらぬ向かふ録巻大鑑の家兼師先生汗びつしよりで針の先のやうなこまかい仕事をやつてゐる。今年はお陰で當たり年で……と眼を血走らせながらもホクホクしてゐるこの男こそ今家刻では

第一流の腕っ利き

わさく交明まで押し出していつ

高位高官

をやらぬ、門前市をなすとは、木堂、大奥などの兼目機なら成の昔に用意はあるが誰に自信のない新大臣や新次官、或ひは新出の貴族院議員や代議士などに判の用意のあるものは十人中に一人か二人、そこでまづ馴れ

付けるのは篆刻師のところである篆刻師の方は待つてましたとばかりに判は大判、中判、小判を各二通りづつ六個を用意しないといさといふ場合に間に合ひません」と相手を慮しからせて押しつける、併し判は間に合せても持つて生れた

金釘流は

間に合はぬ、そこで俄か手習ひが初まる

うろくをみまゐる、さうして西洋の形式をやうい自

ふいびつとウグイスのさか、断然と夜を度る形を、移つた、実の初めから芝居の力に志し一まふまふと、魚雲し以方がよかつたのにと云ふておは、芝居の脚を、と書くく、其の素養の重く誰んを覚え、と云へ、う黙阿彌の葦刈か多きと云ふ、と云へ、河内、研光、無倫助けをみるひあゝ、八月十日、今日神田の香林庵新数珠を焼く、八月十日

の終七巻末にあり此も今頗る稀
九也

一 轉玉為自修印譜

一冊

此印譜玉房人の需に應じ自刻の
印を搦し玉房人の巻首に自筆
の後語あり、殊とすす不以

一 賣茶為茶異圖

一帖

賣茶為茶異圖名の版行とありある
もの若干あり、こゝを浪華の木村
兼茂中の子好石居木孔陽が

十三行

各不_二散在_一する

題外の處ある全部と換る一と
版行し玉房人の巻首に玉房の如
品数多く、且つ各異に精彩色あり
り、極めて稀觀のよき一展す、巻
尾に木孔陽の題後あり、川崎千
虎の舊存也

一 成風柳多留の和

九冊

寶尸と云ふ柳多留の和をあると
柳多留拾遺(三冊) 柳多留の内十八
十九の二三冊(則ち九冊)を缺く、他日補之
を要す、且つ其也書價名と高し、此

空本を二十冊の價あり、尙く可し
口町の散策中蹴鞠書二冊を購ひ入る、正徳三年
の版で蹴鞠指南大成といふ標題のあり、上巻に
寛文二年の奥付のあり、蹴鞠百首和歌を載せ、
ふゆに「応永十二年沙弥宗雅の奥付あり蹴鞠
の奥儀十四ヶ條を収め、下巻に「陳外郎二位左
林の子政光の蹴鞠家伝十七條を収め、上巻に
「下巻に漢文の序あり蹴鞠の大意を叙す、
此種の考今殆ど要あり、あゝか、但し洋式
ト、ボールに蹴り方を比較する料、子と婦
九、り、ちとも流動也、我の作法を紙の上
得し得べきあり、其道、今、つれ漢書

分りて直に洋式と比較し出来難ければ蹴鞠の
訣の移りて洋式のせん、次頁すへきその法し
少くもさをも受の、フットボール又伝承するとの
彼此比較して説をまてハ一頁ある、余の前年
蹴鞠と和歌とを合せ考へ其致を「とす、こ
とを説き、一書を「得ることあり、和歌とす
ら比し得るもの多む、フットボールに比較し
やうことのある、蹴鞠の古法を考へ、比
フットボールに一新を加ふることもあり
か、此書の序文ハ撰者の名を欠け、此道の流
革、技藝の要をも叙し一斑を呈す
我邦鞠之形制者以革為円、兼、壘、其中而蹴

蹈之戲矣。又游藝之一也。開地因桓構鞠坊而
植以柳楊松楓之四本。戴烏帽子。被直垂
葛袴。着鴨履。而八人各隔指而立。向者為
相手。左右為脇詰。是蹴鞠之八境也。余按蹴
鞠者。說多端。考中華之所由起。黃帝制之
以習兵之勢。或比之塞尤之類。或始於戰
回之時。云亦按漢霍去病。唐薛平。宋
鞠。再來蹴者不少。我邦則不知起於何時。
世未聞之也。自中古朝廷有蹴鞠之御。則
元鳥井。難波。而家与加茂。神宮。松下。候蹴
至。故也以元鳥井為蹴鞠司。以松下為露
柳役。至今其門戶最矣。粵洛下。西洞院

有陳外郎二位者。林者。好蹴鞠。在林子右。新
衛政光。傍得父傳。而其藝出人。名振世。列四
之主。聽其藝名。而皆構秘坊。招為相并之
架。弓競馬。為武藝之一事。故治國之
助乎。誇奇觀。遊說。則又不與此藝。宜於人之
相望矣。今也。政光。心近有巧。其蹴踏。則不羨
去病之志。不慕薛平之風。大小輕重。得之心
而應之。脚。優游自如。鞠。方停身而止之。鞠
急遠時。折脚而送之。其蹴頂。自肩轉背。
或為或亦流而袖。有立而蹴。定者。有跪而蹴
者。有顧而蹴者。有舞而蹴者。如列生似走
似逐。躡之在前。忽為在後。其甲乙。高下。有一

較三足之法、其風體之輕也、若舞蝶之戲、度其進退之舒也、若遊鳥之向暖、不亦歌舞鞞笛而催悅目之興、誠一時之壯觀也歟、誰見而不賞矣、云々

文格と云うと、要も只一端を知つて得し（八月十二日記）
○阪五峯年の遺稿漸く印刷に回つたこと近
行、今日余の主宰の会社と見本揚一枚を以て
り来る、おれを上海の印刷所に托し、宋版字に排
印せんとの縁をうらうらと、乱後上海定案の運び
かたき形勢をうらうらと、吾今社に於て十月五峯
の忌辰を式ゆせしむること、うらうら、五峯生前
其の校訂を託す伊藤香雪の遺稿を今社に

印刷し、前例あり、五峯の集の体裁も大体に
倣ふこととし、見本紙も其の如くうらうら、但し体
裁其他につき、鈴木森袖と協議を要するこ
とあり、今日只を四谷に訪つて決定する不左の如
し

一題箋、四分書、屋の書を抄ふ事

一卷首五峯の八眼を掲げ五峯年手
書の六言自然山の詩二首を影映
して収める事

此二首今も二十年前五峯余の爲め
に短冊に抄す現に張り交厚紙にあり、
此詩何故か遺稿に逸す、可成遺稿

中に入らばしとい余の北集印を乞ふ電
後者命と袖海に示す

遺福各紙欄心下部に七松山唐梓と
入る事

用紙ハ唐紙を用ひる事

文集の内二三の小品文を削りてしとい
余の望望する録りて多る弱るるは
各元捨つる日之比し頗る見方
か故し

五峯の未定を存し余の物唐紙を記し
る一文あり、若しあゆの字入を經てお
南の文とすし得る寧ろ此文を存す

右のとき地も後其の好を袖海に用ひ
す

一袖海の余が為の代化して巻尾に附する
序中の吟定の稿を國分ち唐一人にゆし
たる面白からしむす袖海拾遺をの巻を
七加くやし、こみ七亦余のたえのりし袖海
之れを流す

一巻尾に五峯の友人の執持を収めざる
の以見え本月三日余ら十名計りに
は人を紅葉館に招待する事

以上今日協議の概要あり、願ひ五峯及後世に
二年に亘るとす、昨年の忌辰に出版の成印を納

しつゝの一年後、然れども其の産物名を神海詩
が努力各詩に加筆し、跡を見れば一年後、然れども
敢て遺憾と云ふるは、是れ其の彼等、或は固か、今
を聞らば、ちや産主として、行をかく、現を執業
し、朱字ハ、先富りるま、ちびる、きこ、の、あ、う、神
海之れ、此を、其の、人、情、多、く、其の、人の、存、する、時、に
厚く、し、其、人、に、べ、い、冷、か、ら、う、を、等、同、人、ハ、此、の、昔
の、例、を、破、え、ん、と、欲、し、し、努、力、せ、し、と、思、ふ、と、余、ハ、一
た、い、い、ゆ、り、ま、た、し、こ、き、な、う、と、思、ふ、し、し、七、詩、ハ、必、思、ひ、一
て、玉、成、さ、う、人、悪、俗、を、存、せ、ん、と、思、ふ、ハ、佳、作、を、存
す、ま、ら、ん、若、か、ず、と、翻、中、し、更、に、思、ふ、と、思、ふ、と、其、人、の、存
す、時、ハ、友、人、と、事、も、未、だ、思、ふ、と、多、く、非、を、難、せ、ず、改、む

べきも改め、うしに、い、は、海、島、の、に、み、難、き、を、な、う、と、思
五、峯、の、面、前、に、於、て、ち、産、物、何、ん、を、斯、く、多、く、の
雄、貴、を、加、ふ、る、を、得、ん、但、に、佳、作、を、傳、へ、ん、以、免、ふ
儀、難、し、る、所、な、し、是、れ、友、誼、の、敦、厚、な、る、所、以
と、思、ふ、し、此、集、収、あ、る、不、文、其、に、三、百、九、十、首、多、く
晩、年、の、詩、を、収、め、の、壯、年、の、詩、を、取、ら、ず、是、れ
故、の、意、に、従、ふ、ま、ら、ず、唯、に、壯、年、の、詩、と、云、ふ、概
ニ、棄、つ、べ、か、ら、ん、と、思、ふ、も、亦、多、し、其、行、を、留、め、せ、る
ハ、故、に、改、し、つ、ハ、余、の、思、ふ、遺、憾、と、す、る、不、可、な、文
ハ、多、く、晩、年、の、心、を、不、の、こ、の、こ、を、其、の、少、ら、き、ハ、故、に
元、捨、た、る、ま、ら、ず、余、之、れ、を、厭、み、て、精、進、を、と、と、思、ふ
文章、五、峯、の、本、録、に、あ、る、を、改、む、辛、甫、の、言、の

如きの録するも是らざるを乞ふ、五峯が病臥の後
余の如物、塵の埃は、福を属し、一記文のこと
き甚心終、定稿とありたりしもの也、此文のこ
とき多めの母が除を施し、寧ろ文中に加ふべ
きよか、これ自から私しと言ふのありき也、八
月十八日記

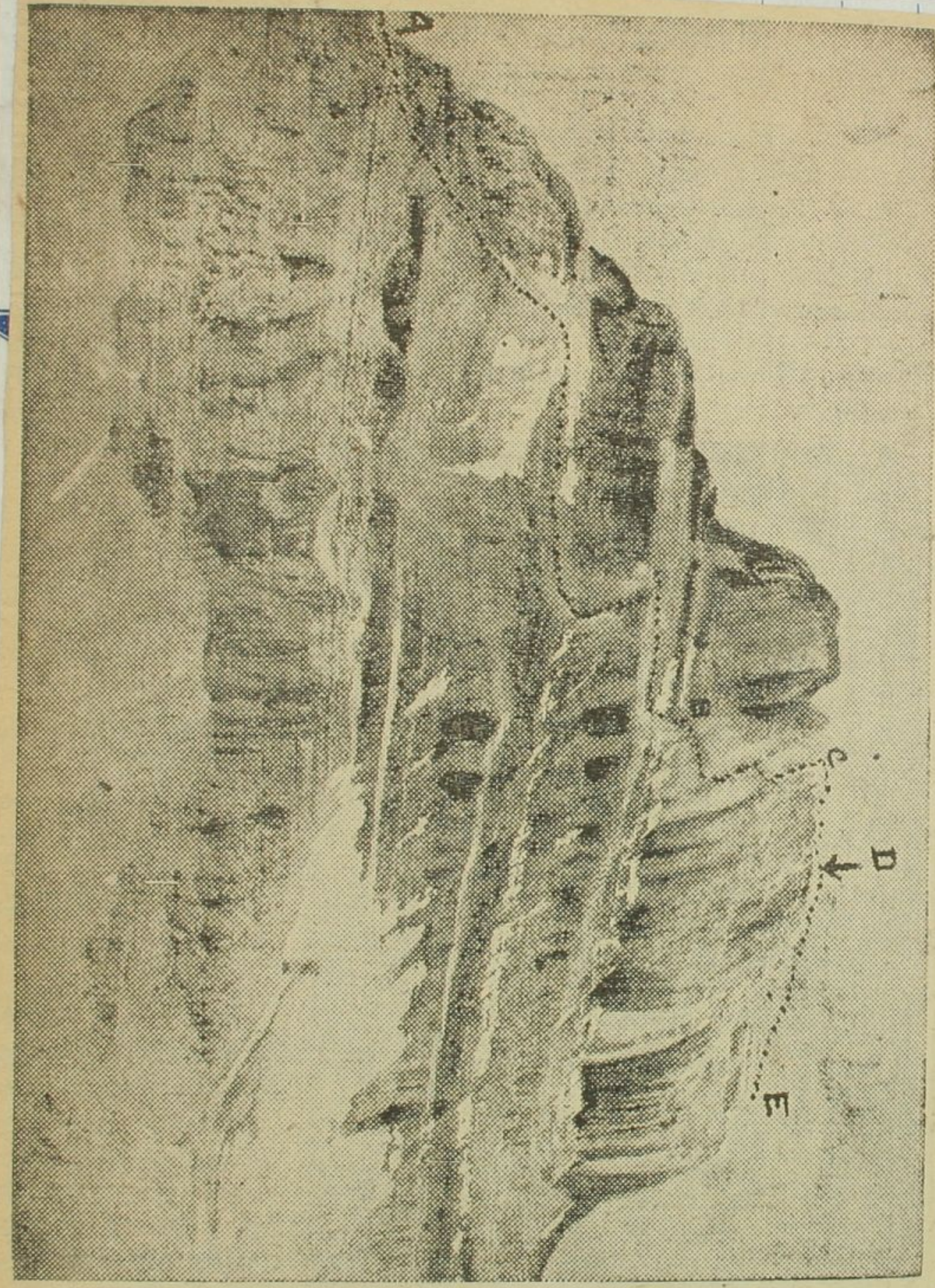
五峯遺稿の材料、一括、館森袖海らる庚子中
を檢するも、五峯、沙友の朱批ある、草稿少
か、より、森、換、南の朱批あるも、尤も多し、寧
ろ、湘、南、之、ん、次、く、地、に、碧、香、清、推、等、の、朱
批あるもの多し、此の稿者の内、五峯と批
物故し、言ふも三四あり、此等の稿、五峯の

家に保存を要す、此の稿、清紙塗抹の反故、恐
らく、保存を助し、得可きもの、余すりを考へし、
一冊子に、貼付、約、四、十、枚、を、収、め、の、散、佚、を、備
ふ、之、れ、を、五、峯、の、家、に、存、す、る、可、也、亦、余、が、家
に、置、く、可、也、
八月十九日記

○ 飛訪、歐の、先、行、世、界、人、の、未、比、及、其、變、身、を、能、く、せ、る、ア、ル、バ
ー、夕、獄、の、登、壇、也、此、の、二、大、冒、険、の、朝、日、日、の、斗、畫、を、そ
れ、に、邦、人、に、試、み、ら、ん、前、者、の、未、中、途、に、あ、り、後、者、の、既、に
目的を達す、想ふに、冒険は、日本風を、世界風に変化し
る、日本目的、冒険は、膽力と、精神との、あ、り、技巧、も、物、質
も、優、く、す、り、寧、ろ、技巧、物、質、に、頼、る、を、所、と、し、た、う、に、
既、往、の、我、が、冒、険、を、し、以、斯、し、と、目的を達せし、こと

六利を達し得ざるものあり、と次の二大冒険のこととせば、
 ソシヤの東を伝線して目的を達し得ざるものあり、アムバ
 ーと登攀の如き、八食料天幕其他の設備を運搬する
 馬の女廿三十八頭を数ふ、費用の大きき知らし、訪談の
 危核も多くと國際的運動也、列る要必需品の供給を
 得べし、如此のものあり、又あるんば、此の冒険も目的を達
 し得べきものあり、**第一** 危核に於て或許の時日を費す
 七、登山に於て如何なる路を以て進むか、如何なる機械を用ひ
 べきか、**第二** 要の目的を達するものあり、又、改西人
 の冒険も目的を達するものあり、**第三** 物質的機械のこと、今次
 の我冒険も漸やく西洋風となる也、**第四** 暴虎馮河の
 冒険も壯も蓋し其目的を達し難し、

十二年



冒険は東方の嶺の中腹より見た
 るアムバ、パ、マの東南面路線は我
 等の登攀路を示す(A、B、C、D、E)間は晴天西
 嶺の部分最も困難なりし處
 (D)は夜を徹した山腰上のテラ
 ス(頂上)

支那の探險
 支那の探險
 支那の探險

口坂の五峰山遺愛の印章を余の手で得た偶に五峰
 の及故を換するもの所を印に刻着其の由来を
 注す印は數十紙あり、左の四紙は余の手で
 したる印に關係あるものなり、爰に收めおく。

鶴鳴于九皋



高芙蓉刻三浦桐陰菴藏桐陰數
 世杏林名家筆通文雅自用因年
 皆倩名手成之此印其一予曾一
 見食指大動君即脫贈附以一詩
 之有似九皋鶴聞天聲本清逸居
 且珍重不泯印人名
 芙蓉名彪字猛皮甲斐人吳北江
 云芙蓉好學博涉群書最精秦漢
 篆法執筆絕倫馳名海內崇禎山
 侍講稱以為印聖蓋本邦印人秦
 斗宿亦在亦有高約

美人香竹詩屋



壽山辟邪鈕
薛田友律刻
岡田旭畫不吉漸派
獨愛此寶借玄十餘
日章把收不控

興耐為中控五嶽以似及以海
乃以不亦此也白如也
此予廿年所愛物
有人曾作據



白蠟蛇鈕藏六刻
全疑凌字直從
後水即也藏六據
說文辨全服

一
 崇禮章 林谷山人乃山人歸去來印
 講命由一 條鉢自題詩云自把那生現
 學先農級橫鉢遍玉魚銅厥頭地
 耕無稅債筆一 條麻德公其所自命
 可知也蓋歸去來印有二則一 條
 鉢一 條佐藤硯湖家硯湖没後送
 市島春成得其數方此印其一也予
 嘗藏細井廣澤中井董堂書印
 春城垂涎三尺乃以易之



○和蘭のロツニニヅムに今から五十年程前にはウア
 クリースと云ふ人がある此の人の烟草の王様と云
 へ人も許した其一生は煙草に其名將と云ふは
 である彼の煙草の味は彼が
 あり煙草の味をやらハイブヤらが蒐集する
 あつた死んだのが十一歳であつたが煙草を
 七から六十年万と云ふもの殆んど手からハイブを
 一にことかき一内なる平均十割はつて煙草
 だれをういである。習くべき喫飲量と云ふ
 である、まゝに煙草の中へ生きた人
 である、彼が煙草の生煙を捲き、極古い
 葉巻のおおむの煙草をとり、是の所より一書

上等の和蘭烟草を一ぱいつめ、お刺さん。パイ
やらは焼酎の瓶やらを詰め、葬儀の香をさ
別々の遺言をさうし口ツテんダム中の烟草
飲みと云ふ烟管飲み、皆別席の招待をさすは
葬儀と別しにさう一人葬儀と云ふグアソクシ
の志をさすをつけ、パイプニツと品上の烟草十
おなつともつけやつた、葬儀の式が行ん出ま
後その巻別席に皆パイプをさす一齊に禁物の
烟をさすともつけ、さう一人の灰より灰に
土もさすともつけ、さう一人の灰より灰に
と一回の櫃の前を集りて代さく更灰を櫃の上
けはさすともつけ、さう一人の灰より灰に

の一部を一定の基金として幾いそんが口ツテんダム中
中の金氏に年々一人ありすおなつたの烟草を無代
配布するさうし、彼の如き人をいふやうな生
き物さうし、彼の一生を物のいふやうな果ては
人といふさうし、さうし、
蓄積潤着烟草礼

漢物紙

○英王のエドワード王は喫煙家にもあつた、嘗て王が
さい、皇太子もあつた時に千八百九十一年加太
ハ物とさすともつけ、さうし、一行ハ其の庭の中ハ或時人
おなつた、さうし、皇太子もあつた時に千八百九十一年加太
あつた、さうし、皇太子もあつた時に千八百九十一年加太
か、口におしは、さうし、皇太子もあつた時に千八百九十一年加太

檜木正に同席を禁し得無つた、八月廿一日記
○此秋吾々早大出身の今次政府に任官した十二人の
為め祝賀の言葉を紅葉館に催して、聯合内閣の
際より五六の任官を見れば、八名は二人の出入閣し
て早速暫く再かあり、政務次官にありはよの前の
二三人ありはう又二人加り、冬其任官も又増加して
前からのを合いせると、即ち居すりうも七保せる
此任官も八名あり、外に秘書官が四名出来た、
この早大出身者、未曾有のことである、別に一人
の大臣の出来たのは破天荒である、高田の入閣し
たことであるが、あんな早大出身の、校友の入
閣は今を以て始めとする、此席上吾等も感慨

の材なし困難いよのあつた、席上早速の演説もあ
つた、高田が、僕等も三十二年の苦節の結果
二過きぬ、加藤首ねり大隈、縁の深い人、
あつた、早稲田出身者を要路に引上げた、
其縁の關係も、我々も早大出
身者が二十名以上、その多数が、私学から出た
い、多年政界に功を積んじ結果として愛、利、
つ、よの、朕つて、カチ得た、保し、冷静
に考へて見ると、張政、政治的人物、早大か多く、
又出、し、て、この、私学も
早大出身者の、軽蔑を、得た、
久しい方のこと、進歩、多、
久しい方のこと、進歩、多、

あるが、實の帝大出身者の要路に立つた中、大臣ま
ひ進人目比との決して多くいふ。又比較的近年のこと
に属する、以山正一や萬池大基や、漢居新等の諸
人、閣に比けんも彼等、帝大の先如輩に比、外西大
のの者業を、帝大の友、校格があるから、是れを比
較的早く入閣したの事、不也儀いふ、其他不言也、帝
大出身者皆帝大出身である、けいもその入閣の極
少頃のことと云ふ、兎に、神長の間、私語の、政府
の要路に拒絶を念つて、おしい、るの、ことを、さう、いふ、
の、言、を、思、を、流、飲、る、斗、の、下、下、東、ひ、ま、あ、り、痛
状の、感、を、禁、し、得、る、の、定、吏、生、活、に、近、上、つ、て、行、く
か、ら、く、一、筆、要、路、を、占、め、得、る、の、政、黨、改、治、の

漸やく實現され、お、帝、大、に、就、も、悔、候、
の、感、を、さ、す、を、得、ぬ、大、隈、元、侯、に、今、日、を、見、せ、
こと、が、出、来、る、う、ら、に、こ、と、を、い、ふ、を、等、い、過、越、候、と、
八月廿日記

○右、録、松、雪、を、ま、り、の、後、の、内、と、お、井、大、中、
が、其、の、父、お、出、軒、の、忌、辰、に、郵、物、を、ん、為、め、日、誌、
一、冊、を、刊、行、せ、ん、と、し、海、の、印、刷、不、に、托、し、た、が、忌、辰、に、
来、月、に、迫、つ、た、ゆ、ひ、に、刊、行、の、別、産、を、い、ふ、を、い、え、来、る、
い、と、い、ふ、か、ら、バ、ン、ナ、日、誌、か、と、い、ふ、と、こ、目、ろ、い、え、を、北
窓、日、抄、と、い、ふ、と、あ、る、百、枚、程、の、漢、文、の、よ、ま、を、さ、う、
此、の、日、記、の、来、歴、が、お、七、一、三、の、息、軒、に、維、新、の、際、
休、幕、帝、大、に、あ、つ、た、の、を、勤、王、家、に、つ、け、放、ら、ん、

危殆ハ身に逼つた身を遷すを披かしてあるといつても其縁を汲みよめる姓にシテ其を交へて私一の内にお隠れするんが知んまといふのむそ
の者に従ふこととさう、三月月改七日此の百姓家に
執伏し此の百姓家の田王子附近の某村にあり
といふこと此乃ち此の日記を、まこととある間、毎
る姓其体は此の日記を考ふるを考ふる記し此の
ルといふから、随分不確定の記すと思はれらるる
が、此の日記を、騷動の状況が現れてある目所、
興味あるといふも云へる、まことの角、息軒の文
し此の文といふ不く、あるの價位がある、此の日記を、ま
る姓家の、變物とさういふ譯も、息軒が別

湖物を老いし、存てまの日記を考へし此の爲め、ま
この家、大切と云へて、所以、あ井家と、ま
借り出すことが出来ず、つ人を遣りし、数りか、つて
考へつた、まの、まの、
八月廿二日記
の神田の二三書坊を訪れて二三の圖表を購ふ
中、左の二書や、此とさういふ、

一 苗譜

二冊

此伊坂本流雪の著す、天保五
年の自序あり、此本に彩色もある
との否とあり、之を血彩色七本を
んとす、此流禱觀のものとす

一 房陽郡の志

一冊

一 南信郡の考

二冊

二書は、嘉永四年向南信郡、海津車の著す所、南信郡の考、往々坊方に出入り、信陽郡の考、ハ頗る稀し、殊と云ふし

一 亀井昭陽の自筆振本東遊賦 一帖

文化三年十二月刊す、不細字振本、此此昭陽の集、漏漏といふ、あり未だ控さる、皇道あり、日本墨、帖の内、加ふ、可なり

此の文未堂と宋法字と排印し、玉洞集才珍本と号て来り、是れ昔年、函令す、尾支那の逸詩に托

し、教の伝し、常の一枚摺り印刷し、こと、美に奈良の族、月日身、於ける里木欣堂を、材料とし、字も也、猥意の文字多きか、公信し、得たり

八月廿二日記

○ 烟学禮讚といふ者と、後又、あゝの具を感した、外し、此の全紙、材料を、外圓に拂り、日本のことを、除外して、日本の、烟学禮讚を、書いた、ドンナ、うと、閑に、任せる、記帳、ある、之を、看き、つけ、お、く、追、考、へ、出、る、に、随、い、追、補、し、り、あ、く、り、す、れ、を、七、卷、考、し、は、く、日、本、の、都、と、し、文、の、一、部、の、出、だ、か、出、来、よ、う、と、思、ふ

一 一 烟学を、使、する、証、跡、也、証、跡、を、あ、る

くまの川柳何れと過るとは更ら二倍多
かろく、山世の人の詩と替りて自分の
常と云ふ痛くもよの左の二首ひあさ

烟骨

秋重復

横笛煙骨歌符無、早有晨聲柳青唾臺
一掃首多る含酸郁、秋因雲影吐模糊
長欽鳥喙君休悲、真節夏心我亦俱、千月于
花お付去、天地秋扇龍須史

烟骨貨

川口芝素

南方嘉種惟公之珍、乃子精育示の懐莫抱真
莫羞厥甜、趣讓其醜、春而之夕、秋おお之是辰
未定千星、窮巷一身、鑽燧接爰、祛愁卷

神、金門公子、玉樓仙人、繡包徐放、元芳終屋
家貴、且及、美雅、具陳、血貴無賤、形影相親
外蘭、佩薰、纒、冥雷、雲均、丹心、難灰、爪流、長
新

白石、桐子、娘、い、あ、つ、ら、う、韓使、引、見、の、陰、桐子
を、あ、う、ま、け、若、か、錦、繡、の、勝、を、葦、で、扱、す、ま、え
忍、い、ま、い、と、の、扱、を、詩、を、何、と、氣、酸、と、吐、い、れ
ことかあさ

2-1 桐子、就ての回香

桐子、就ての若、ま、の、扱、め、て、あ、ま、い、勝
つ、と、何、れ、も、今、う、い、得、男、の、ま、さ、る、扱、ま、と
ま、う、と、あ、さ、る、家、危、の、書、の、左、の、如、く

心成ると著名のよりの得難しとある
か志うし類のよとのりま

葛録

二冊

大概蝦夷の漢文と書いたよむ
紅毛其他欧西の物字烟草の
よが叙してある

目とまり草

一冊

えんも蟹おか門人ニ書こもれよめ
前者の補遺と見えんて七よめ
和文と書き傍に挿入してある

烟草百首

一冊

今世花と本ら無いから著者と

刊年を記すことハ出来らぬのが
ある烟草の字業者が序らえ半
分に刊ししよめむる首のねん
ハその人の心がある。此者の特徴ハ
蝦夷歌に烟草の産地とるの優者
等の注と細記ししよめあうと流石
ニ字業あるらん人知るかたきとる
実

烟草録

一冊

支那の烟草に関する書後後と輯
めたるもの也

3

一日本の烟草、領回の日、一程固有の

考査を以てしる事

北の谷、南谷を以て將來しるべし。日本に植付らん、日本の土地と日本の氣候とより養成せしめて、為め一種の風味あるものを作り出せる事、これに於て特筆を要す。西洋の烟草又を以て多く熱地より輸入せらるる地は、烟草を早く味ひたる経験あり、移植しざるもの原産を凡そ味を同しとすべし。しか、日本の風土の相違より味も口異らる、致し四政策が為め厚外四産の輸入せらるる事

考査を以てしるべし。日本に植付らん、日本の土地と日本の氣候とより養成せしめて、為め一種の風味あるものを作り出せる事、これに於て特筆を要す。西洋の烟草又を以て多く熱地より輸入せらるる地は、烟草を早く味ひたる経験あり、移植しざるもの原産を凡そ味を同しとすべし。しか、日本の風土の相違より味も口異らる、致し四政策が為め厚外四産の輸入せらるる事

の煙を又も純粹に用ひ来んが
癖の煙草を史上珍らしき事例を
何れか日を幸ひ風土の關係上淡泊性
を帯びるが煙草も古くは淡泊な
巻を捲くものも葉巻の内は
ハ固有の味を有するものあり

淡泊の味を有するものあり婦人も或る
年輩は之れを喫するが上下者
煙の香りとさう味して之れを以て
を喫するものを見做すものあり
日本も煙草の火皿に煙草の巻を
九もパイプの皿に西洋の比するものあり

大に十合のものは是より勿論西洋人
に比しては煙草を火皿に附け
之れを喫するは西洋人も多からず
さうし、知るは紙巻煙草の行はれ
さう著しく其量を増し一躍西洋
と曰物とするなり、これ日本煙草
上特筆するべきものなり、
の紙煙草を用ふるのめり、西洋
の美しき紙巻をも亦用するもの
あり、此の函交ハ此れ世界
例あり、此れは研究を

要す

4 一 烟具の考及進：靴

烟草を喫する烟草葉に附屬品を靴と
 烟草が外四の影地帯を離れて一種の靴
 達を遂げたと同じ物に烟具は靴と名全
 く日本特異の考及進をいふ、徳川の
 初期此の考の演進と程差をいふ、時代
 に於て、烟草の或る社会の教養のあらうと
 客に靴と名馳進のいつとて、烟草の煙草
 と煙草を添へて客に給しう、其頃の靴
 は煙具を推の世帯するとい無りし、其頃
 の烟草は後世のこきり、其の四進字を禁
 置し、あんに、金尾の部分、美人のうら

毛物袋の形を多向の冬物一〇等ら
 一き形並あり、火皿の如きも後世とい多
 少の考あり、似たり、進々各自携
 帯する、こきり、こきり、物袋の長き
 を不便とす、こきり、腰と挿む必
 要上考を納む、筒と要する、こきり
 筒と煙包を結びつけ、こきり、結ぶ
 要する、こきり、受と種々の形式の烟
 具を工凡、こきり、大体煙草筒と煙包
 の結びつけん、形は香ら行り、こきり、こ
 り、こきり、日本固有のもの、こきり、二の折
 りの考を、扇形の、延金の煙草を

具すことを行はれども、これに當り西洋
の形式を以てし、但し柄や
柄包の形は、往々國外の大名に
寄り、伊達者、物用、珠、柄
髪を大きく作り、柄包も多し、
大きく、髪をさげ、例へば相撲の鬘
の持用の如き、使客の持用の如き、此
者流を拾ふ例優の使用するもの如
き、國外の如し、これに除く例も
ある、他は大小略に一定し、唯此柄
具各の意匠の極致を悉し、
此意匠に就ては、徳川期、美術の

粹、皆採用せり、煙草も金銀も
他の金属用い、これに種々の
彫刻を以て、柄包、茶器の代金を
こを以て、練練する、代物、其の
力を集注し、珠、其の製法、其の
さ、金、柄、目、其の作る、
手、骨、結、珠、其の作る、
珊瑚、珠、其の製法、其の作る、
其の用い、其の作る、
を、其の作る、其の作る、
の、其の作る、其の作る、
其の作る、其の作る、

今も巧者の家も起りたる煙回を心
を賣る家も出れ来り以て村田の煙管
州産の煙管入るをいふ如き(如き)煙管
者向と一ツ二ツの煙管を以て湯釜を
す或十とさきく数管のを漱くして人
に漬ることの古出て来り、嘗ては佩力
の美を多むるもの今も煙管の美
を誇るの觀を置するも也。後年
西洋煙管の流行して凡、西洋上流
の煙管は筒色も輸入せしやも價高
きものありしも、日本國産の煙管は
これよりかまうるはとさきく其の
十二行

煙管の特徴は煙管史上特筆す
べきものと云はる

而も其の附屬を要するは煙管の一形式は
ツインギリ形のあること、こゝろを必す根
竹が附屬する、煙管は種々の形式あり
こゝろ純日本式なること等也

5-1 煙管の考

煙管の考は人の類の本能であること思ふに
至らば此の風味を究むるを制し難い
よがあるもといふ人から起るる文的な
移つたものがあるが、今も世界を征服してゐる
或は此の考は人の動物の特権に属

する嗜の何をも云く得やう、下等動物の恫を
喜ぶがよるまゝ、酒の癪、日得ての恫を
ハ腐しそめぬると通例何人の心もこのことであ
る徳川時代の禁文を覺るは、このことである、そ
の際を官が絶に喫飲しつゝあるのを又是有
司ハ此禁令の行はぬ難いことを看取し、とい
ふ流もある、あるの通り実行せんやうに獄
中の如き監視を在るの意でも囚人の名を
すると兼て監視の目を偷んじ樂む納す
ることがある、彼等ハ兼末る林邊の上頭
に恫ををつめて吸ふか覺えするハ、減刑の
刑或いは或る可憐な、閉ぢこめらるゝ、ま

と知らず此態に支配する、彼等ハ恫を
をツサと呼び、彼をラツパと呼び、中
土中、隠しとおく、これを余か佐由、恫
ある時、目睹の事ある、(奥田家の
囊中、恫の伝くことハ、其人に取つて、
此塔吉がむき、岡山、佐由と書生時代、
岡山を望望するは、自今ハ、ハ、恫を
を解し、ラツパ、岡山ハ、石、張、マツ
ケをすん、山中の、恫、或十本のマツ
ケが、目火を、見し、心、遂に二本を、刺す、
あつ、時、梅、生、七、生、恫、命、と、云、能、夜
て、夫、と、悲、恫、を、あ、け、て、ス、ツ、タ、の、が、幸、に、

すしと在りて喜んだことかある。この
喫煙者人の夜不眠をせしめ入浴中にも
此煙者といはれしもの。某友人のつて
入るハグアチの巻煙をフカスカ倒して
る時禁煙か禁んぬまの不平は、陶家
あつて火をくくと煙を吐き出したこと
ある。煙者の味は陶器の向上する
である。高價な煙を喫すること
がある。ヤス煙者の口はし得ること
ある。まんと不仕通れといふは細川
次郎と其適者。煙者の上中を三等
位のものに輪次喫する習慣をつけるか

よいと云ふてみる。あると云ふは煙者を
喫して或るう後、高級の煙者。後、
快味を感じるから一寸よい法だが、
この煙者を思ふ喫することが事實
困難である。常用の煙者の好むは
いよである。自分が海を越し満洲支
那に赴いた時、一月元々、よき喫
し得ぬは煙者を喫し得ぬは、勿論
いよく西洋煙者のよきものあり。又、
常用の煙者の好むは、行旅に、
着るものスティーション、
又求めは常用の煙者で、

二本合より喫りたことかある。煙草の味は
：乾いた岩場もあるが人のせきすくひある日
本煙草は乾いたふのがヤニを底ふよ
もあんやニの多いのを欲するものもある。
煙草の刻む方々、乾いた薩摩煙草の
葉の扱ふ茶切りをまぶしよあんや
井草の如く絹糸の如く細くまき切つたの
をまぶしよある。葉の製法は乾いた
ろくあつて味も異なる。我々の或る
方面の煙草は大麻といふ産地の煙草を葉
を湯でフカスとかいふがまろくろく香氣
がいやういふ自らのせき煙草がこいひ

無ければ煙草の味はと異なるものもある
花柳の扱ふおの更しとやうなハコノ
煙草の味があぬ。うらうらとまろくろく
花柳界は昔から煙草を吹くといふ
くのお蔵がある。巧みは輪形に煙を吹
き出すものもお蔵の一種。その輪形を
お蔵に昔奴を待人来るの微とする。わ
ある。長草は花柳界に昔用をせしめ、お蔵
をいふ。お蔵の葉を陽で干す。あんの葉を
蒸きしつひる用は昔でせん。吸ひつけ
煙草を受けし得る。うらうら喫し。お蔵
吻の代用としてまぶしの癡薄もある。お

愛い今でも所家に行かん、家婦の獨占と
多うなる、勤七さん、武芸の代り、揮り
田いさん、いろくのローマンスがある、これと
及野々ナ、豆形の短かい延の愛が外人
のまゆ、おかしう、感せ、こころと、えんて
小泉ハ、雲を、と、特と、多、歌し、其の意
品、此程の、何、愛、ひ、いろ、教本、ある、と
元ハ、貝、只、の、書、り、て、世界、の、何、者、を、要、す
いろく、の、凡、俗、や、冬、圓、の、何、者、の、形、式
多、い、を、考、き、あ、つ、め、れ、撰、出、を、石、持、し、て、あ
れ、こ、と、が、あ、つ、た、い、え、ん、ハ、早、大、の、圓、を、飯
：何、と、あ、る、か、い、ん、こ、就、こ、思、ひ、起、す、こ

と、か、あ、る、東、京、や、の、各、校、が、東、村、漢、教、人、の
屯、所、と、見、做、さ、ん、政、府、が、兵、籍、に、整、戒、し、れ
吹、自、分、の、講、義、を、改、漢、漢、後、を、試、み、ん、と、し
比、が、教、え、部、ハ、臨、監、し、て、み、る、の、む、い、え、ん、の
出来、ず、に、と、ち、ろ、く、書、つ、て、漢、人、に、前、掲、の
あ、や、の、何、者、の、事、を、漢、語、に、も、教、え、る
を、何、と、捲、い、た、こ、と、が、あ、る、

七一雜事

マツチの、口、風、さん、ま、前、と、點、火、の、具、を、と、懸、在
と、打、合、が、いろ、く、な、る、さん、を、納、め、る、代、り、行
々の、形、式、が、あ、る、何、者、を、鑑、み、家、の、看、版、と
何、者、の、葉、や、葉、の、り、か、し、達、摩、の、教、を

支那の書物が多く行なはれ又羅字の
つけ替と一翻があることなるも変更
あり、これ等皆日本固有のものあり
柄巻に附帯して研究を要するもの
あり

八月廿三―四日記

○本日牛御井（本公）に御成浙巻の書物をゆつて左の圖書
と贈る、

一可庵武清編図 十冊

武清の物本より、すむと小菊本より天
保嘉弘弘化敷の註書、海軍各書
一希唐尾花の印あり、並し武清

十三行

の花の印あり、川崎千虎より出づ、
余が架中より北の編圖本若干
あり併せて花をよし

一七十二候印湯 字本 一冊

何雷憑の北印湯の版本あり、
珍とするもの、近年但北者渡村藏山
の影写する不刻甚の号あり、各
紙、橋氏詒書にの印を捺し、巻尾に二顆
の私印を捺す、印書のゆく加へて殊
とす

一能舞其至正寸 字 一冊

西丸詒書にの橋掛其他各部正寸を取

川崎の千虎の
自著の口書(一)

一 假面譚

言

一冊

喜多吉徳の著す本、文政四年狂言の
吉田猪三郎の自かゝ腰合し等よのき
こと川崎千虎の題後、その内也猪
三郎と山脇和久の門人也、高し、千
虎の書入あり

一 花あめ記

言

一冊

右観所定と関する花圖を、高橋彦
磨の輯め等を、字し等也、千虎の花
本

十二行

一 葉子略譚

二冊

寛政年間尾張の却蠻、高橋彦磨
高し、著す本、一萬十三種の圖を収む
此書坊間、稀有のものとなり、價高し
高し、(三十五回)

一 甲由曹着用回

言

一冊

嘉元年の刊行に係る初撮本より、川崎
の千虎の花本より甲由曹の各都より千
虎の其の名称を注ぎ、此圖ハ山口美
宗の作也

右七郡河原中守の孫とす、高橋彦磨

文政十四年八月廿四日識す

○百三十五年世の甚しく変化しれたことを数く見るとお
とろくは地へなるとかあるサワト書きつけてるの左の
如きおその一斑ひある

根政官樺大行政に 皇子英石遊云 赤露
と掃雪 著憲法草案 貴族院令改正
左改令により多額納税徴収は違率 無産改
革草案草案 秘書出身者入閣 訪政元行動
少元より合して 外四の嶽山登攀成功
ラテラ實現 婦人多く就職 方御者揚致
日女優花多改を華駕す 小兒の服装洋化
上流社会男女の不倫 不良少年横行 コロ
ハラス 飲料店激増 犯罪欧化 活動映画繁昌

全集出版流行 田園陸競技考加 同書罷之類々
クロスワードパズル流行 復興屋と道談甚悉

○石内時報：連載の余公隨筆「雅俗相生録」に登
載するべき法話を例の如く内山省に「筆の海」であ
り目左の如し

- 一 中將姫の古蹟支那：珠をまきも
- 一 竹内進造為林：花けり踊りの振りのつけ
- 一 糸脈：西遊記の記多しと由来すること
- 一 物名拾味二件
- 一 廣物家西村西文の事蹟
- 一 うそのつき合のこと

一 雁風名の的的執味

此の面白但余印記者に用ら行しを我ら面白
一篇を授く 同者漁りの執味を別巻しするもの
也 八月廿七日記

○復物考今と本月 配本したのハ左の二冊がある

一 貞徳狂歌集 大本三冊の由上一冊

一 ちりやのいろは 希正二年版 一冊

ちりや徳狂歌集は天和二年七月江戸に刊せしむに大本縁
本の上頭狂歌がある下巻に紙縁がある師
宣の筆いしに同じ抄りの中びえんかあるとい
と評判とてみよる貞徳の狂歌といふものもあ
以外に無いと云いんてある抄る在本であるの何か

ら北者が持たしむる大園者彼何れも花とあるは
ぬき家の第中りも無い、北者が家初浅名を浅
倉ら尾が賄つた時、千内以上の馬床位を出しに
流石に之れを賄ふ客が無つた、復れを令むる用
の使用料を拂つて傷り多うけたいと交渉した
か、日言を左名に持しを應しうたが、合資の
母助堅か賄ひ入んたを以てを傷り多うけて復れ
するこゝとあるは、引しやのいろは、細穉なる
田舎版で巻末に新館常木重玄とあるは、
北(後)版らし、いかんも野々柿敷のあひ今の
家北者を不持してあるもの、新館園音彼と地
二八あるの之は、北者の版木、家都の田と

田舎版、花とあるは、若者、函波領
彼附の司祭友、ラン、マホワとある、八月廿日
○地名人名の姓：昔しの田制の古名を
存するものから、本庄新庄庄内らといふ
ハ花園、湖原するもの、花司を姓とする
ものもある、花園を司るもの、言ふまでも
可し、保七花園、花司を姓とする、貞永式目
郡心庄保とあり、北の保を姓や地名とする者
あからす保内保田新保を姓とする、庄と保
と併せる姓あり、庄保とんらう、保七村中の小
地区する、之れを姓とし、地名とするもの、大保小保
保内とあり、昔し公田を廻り持し耕すを

輪田といふをさるるを名輪田といふは、三輪田といふ姓
もえに淵源をもち知れぬ、神田といふ所も其の
神のちの附屬田であつたに疑ひなく、條と云
も區分田の名である、本條中條下條といふの地
名のもえに由来するの論を待たさる。

○紙といふは文化と轉比例して進んで粗修り、流る
のもおろしる現象がある、其の消費量が増加した
のと、さるべきを爲め材料が粗とさるたのが大
原因、おろしるの昔は紙をよと重んじた代
りも紙、貴族もさる使用し得無つた、勿論上
等紙の紙のことがあつたが、さるはさるの主流紙
か知れぬ、さるは、使用の量もさるさるのつたが、さる

材料、古用の法、**木**、丁、寧、あつたさる
さるう、天、平、清、う、五、派、多、麻、紙、か、あ、う、奥、羽、の、僻
地、か、ら、檀、紙、も、出、た、多、の、子、の、朽、木、の、の、子、と、云
ふ、家、が、初、め、の、心、り、出、し、た、所、と、い、ふ、が、さ、う、い、ふ、さ、う
か、地、は、さ、る、今、も、紙、が、心、を、さ、る、さ、る、何、ん、と、い
ふ、京、都、が、知、る、精、巧、の、紙、を、出、し、た、加、工、の、精、巧、の、紙
の、勿、論、京、都、を、一、と、推、さ、る、さ、る、の、後、の、墨
流、し、の、巧、め、の、技、巧、も、世、界、に、冠、絶、す、る、もの、と、い、ふ、
ある時代の三十六人歌集の紙と其墨流しを
てもさるに、電紙の技術が、**美**、**福**、**井**、**や**
ら、さ、る、の、か、**地**、**方**、**に**、**在**、**る**、**美**、**清**、**や**、**福**、**井**、**や**
土、依、る、の、か、紙、の、産、地、と、い、ふ、有、る、が、**美**、**清**、**や**

此の物産に長しに岐平提督に於る天狗の
り類なる為紙は美濃を最上とすといふ
一葉才二寸うがさく才三葉才とすけん
三條件を具す所の紙は他家に出来ぬ
とある美濃の徳の山といふ所かき
さひりし中文字が扱ぬ紙を工風して大い
れたことかあるこのハの曆の江戸の大
みは其の所の紙は海や文書も
けんといふ後と困つたことか
たのてあるさういふ紙は江戸にも用ひ
る紙は美濃の工風と北道に
北、福井と奉書紙の製法も
十二

流るる今儀に行つてある土佐ハ半紙を深山出
か高業者のいふを要する土佐ハツルイ工風の
流るる今儀に不し他不もその悪化を多
あるといふてある、半紙は美濃ハ世界に
紙と自人のかまは唱くるあるか、
紙といふは精製紙のよりの今
のいふる今儀を使用する
ハ七寸幅の紙を今儀の細工
である、古の紙の製法が
へきである、セメテ其の製法を
八月二十九日記

○尾の巻の市之圖の紙を流谷の末巻より一
間と定めて七尺に、池部と頼山陽を流谷に
喜じむと一紙に、序に二のこを附記
して、それだけいふ、王侯の史の素性の事、あ
ハ別と云ふべきものあり、今存す、えとぬめ
他の史料を次す

八月二十日記

王侯の史の素性の事、あハ別と云ふべきものあり、今存す、えとぬめ
他の史料を次す

○尾の巻の市之圖の紙を流谷の末巻より一
間と定めて七尺に、池部と頼山陽を流谷に
喜じむと一紙に、序に二のこを附記
して、それだけいふ、王侯の史の素性の事、あ
ハ別と云ふべきものあり、今存す、えとぬめ
他の史料を次す

をその考にあらはせしむるに、初自てあるに、
見たりとも皆知らずといふことあり、殊に
卯子に、同巻と借らん、熱心に買つたと
云
先生新著の卯子の注、同巻及び日本一書存
の大横巻を以て、見たり、其の字の「ま」の字を
之に、つて、同巻の「つ」の字を、以て、
「ま」の字を、以て、
市山表、
山

○今日本郷下谷の玉地を幼少左の敷を、
かゝる、
六月三十日記

一 祝陽先生文集

写

四冊

亀井祝陽の文集刊本三冊、此集

第一巻に、外行才二巻、庚辰行、

三巻、辛巳、壬午、行、中四代、寅、好、其、

二、行、人、の、手、字、を、以、て、
祝陽

大儒、
二、幸、不、幸、
日也

大儒、
二、幸、不、幸、
日也

大儒、
二、幸、不、幸、
日也

大儒、
二、幸、不、幸、
日也

一 幾皮精鑑集

一冊

寶曆十年大坂の寺持北因持左衛門の揮毫するもの。浪花浅尾遠視の編輯より、装剣の材料に殺の皮を鑑別し、糸に細工仕立の事、等を奉く、殺皮粘裏の二冊、坊間往々あるもの。此書は極めを稀也、珠籠の部に入らざりし。

一 かくしの色目

二冊

此者二本あり、無題なりと有題本にんらう、自有跋本、文化十四年五月猪飼正毅の傳名の跋文あり、内容七二者同じからず、此下色彩を

主眼とす、初編なるあり、元々冬乃ニ増し、難し、坊間多くあるもの、皆アト摺りて色彩純きもの、花をとり、あすも送らざる也、此二本を此に椿山の四巻なりとす、珠籠半巻の巻記あり、有跋なり、木術狩聖氏之文産の記もあり、木術所狩聖氏の四巻なり、し、珠籠をとり可也。

一 飾馬考

二冊

従域的に美の編りあり、安政四年江戸に出版せらるる、装馬

の考証云詳外多、揮毫も彩色ある
潤を以てし、排印紙質甚に草
美也

○昨夜赤坂湯地山王初内の星ヶ岡茶寮に余令這
りて坂口五峯の詩友を會あり、到りては西分ち産
田を改衣を日下句所飯森袖海吉木中洲子
侍春石野村梅湖七五峯の姻族の故を以て
招いて五峯の遺児献支とせ、席を周旋せし
也、此の招いては本旅行不在の以て列を以てし
よの岩原宗川桂湖村松野洪洲休系六石
也此會ハ五峯遺児の編る事漸やく終らば

ことを概とし、詩友の其好を示し且の輓詩を徵
して巻尾に附くとす、余之を故に今日
に先此の十日前に往氏に丁寧折簡して當日の
臨會を七とめ且の即席輓詩の或は成らざるべ
きを思ひて特に輓之を南の京に未だやせむ
言ふ而も當日高々たるよの玉侍春名五律
二首碧巻七絶五首や洲七律一首とす、他ハ
皆此の心すべしを言へ酒間故人の性格と
論し其のを評し談論滑く中洲の輓詩の
内、横眼縦横の句あり、余曰く是れ五峯高
くも、横眼縦横ハ支子自多言ふ也と一笑す中
洲秋田の人藝七都去とて當り新らぬ處に在

彼人の校ぬの人より、古彦五峯を評して曰く彼人のハ
熱誠の人なりと余曰く其評尤もよく當ると、瑞
香の轍詩やりに至りて山を引きて五峯を云ひす、
碧香を自ら解して云く余は山を好む此句
ある所以と、古彦曰く君は好むも知らず五
峯君と其の好むを因ふすもや未だ知る
可なりと、碧香を曰く半山大隈彦と似たりと、
余曰く、半山は手腕ある政治家なり一概之
を排斥するは多く其の人を誤解するは因ふ
多し誤解を受けし非難の多き大隈彦、似
りと謂ふを得べし、然れども五峯は王半山を大
隈彦に比するを欲せたりしに似たりと、碧香又五

峯をいふ甚だしく、道をとめてしを遺憾とすと云
ふ、余曰く五峯の本意は余なりと之んにあらず
設令甚だしくいふも、其の意は余なりと所ありと
しるべし、碧香を曰く或は然らん、然れども詩人中
より一人大臣を出すも亦可なりと余曰く、詩人
の才は詩人たるに在りて、然れども五峯の後世に
傳へるは恐らく詩人として傳へるべし、大臣なりしが
故に傳へるは、毎るべしと、碧香を余の説に就て一
説を指出す、阪谷副官の記念会席上穂積陳
重が為し、其の説中、人の後世に傳へるは官位の高
下にあるは、其の一世に及ばず風化の如
きなり、大隈彦の如きも大臣として傳へらるべし

御即位の式と奉けたる一事、或ハ傳ハることあるも、所
座の碑文ハ三峰日中沙日又書カレ末文惜らざる
卑一とあるも、所座の所座なる不別と書く時
二碑の書き方を非難したるを、穂積の讀見を稱
す、同^事三峰ハ刻座官具を脱せる屬吏的需者
なり、彼ら心事一を以て所座座を議可偶に此の
座と異なりたる耳、余又同く大股座の墓誌ハ
牧野勲高の心ノ所、余差の葬儀を因司たり
又つ初稿を見、御即位ニ卷々與したる事、文の
脱漏を考見し、之を加へし、於、牧野松平座の謙
して古へると有るも、即位の大興ニ與らざるは、
う、皇宮閣白^くと、案を且つ之ハ、
十二行

大の位位一途新塚家説也

長次郎明神 長次郎

世の翹望を傳し、事一書室を終る、明次天皇
山の偕楽園、行幸の時、所座の所、衣室、蒙谷の
西陽を掲ぐ、聖上の御意をか多む、こハ何人の所、
と左衣に勅問あり、え判任の位地、ある其の
筆、いつの詞、こしの、え、微官より、惜しむ筆
と仰せらる、此書、皇位、と、蒙、名、都、雨、
高し、余、同、え、の、初、申、の、味、ある、是、説、
と

（乙丑）五言律詩
（乙丑）五言律詩
（乙丑）五言律詩

乙丑人日追酬
故改五言律詩并序

此日病寒間於數快得五
山半片士士寒人口招飲語
今同人于松風亭送春追
憶不禁因傷杜少陵五
故言男妙人日詩之聲
者其心而之曰人至千言都
松信妙無回日水耳

往年人日一醉因回以
二十四春風逐境把
芝草節節詩高人光初
美丈虹詩何海也五
經采詩詩詩詩詩詩
文雅堂書以亦詩西
與濟時經緯該苦衷
歲月何人別過際忘形
交舞人日立并江美
色何寐字五時時
雪卡玲瓏一為也
多現平世林德老社
砂字公詩壇亮下德
初不無思字亦公初

此水
句水
有
上

手信通



御即位の式と奉けたる一事或傳はることもある所
唐の碑文に三傳曰中河曰又書かぬ末文惜らる官
卑しとあるも、所唐の所唐なる不別と書すと略

女曰惟惟逆前城築築也

故公中河 築 築 築

り州人の所築



きり、言は布衣として出づるもの古来唯大隈である
又との事實を補ふ 穂積の言ふ不と吻合する大
隈侯の事蹟多からざるも、此の最古赫
々たる事、美墓誌と其の宛札を添へたる、此の
迄補ふると説く、現存書又微官の故を以つて一
世の翹望を傳へたる一事、實を以つて、此の天皇
山の偕楽園、行幸の時、御座の間に衣冠、象谷の
西陽を掲ぐ、聖上の御意をかゝる、此の何人の書か
と左に勅問あり、え判任の位地、ある某の
筆、いつを聞こし、のさ、微官の書、
と仰せらる、此事、空傳して、象谷の名、都り、
高し、余、
高し、余、
高し、余、

其の程源因をその迄にあへん。其友の畫の匠氣
あり余之れを好まず。其友の畫の匠の優ること其詩
と其友の大いなる笑ひ。余野村梅湖と五峯の北城詩
詠を論し、余曰く五峯の北城古今の詩人を月旦し終
に四五の人を推して才一流とす。而して其人の詩を
詞を以つて才一推する、人曰く、五峯の妙選は古
の表表に出づ、余詠を知らずと雖も或は公平を欠
くこと無きや、五峯の自かう其強の乏しきと知
り之れを自家の弱點とす。己んも其強の深き人
を崇仰するありし、寧ろ之れに偏するの傾向あり、五
峯の如くも純真の人まうか、他のその力に聲
をえん之れを敬する所ら其詠を自七尊崇す

の契るべきこと、梅湖の同感するといふ。余の北論平
素抱懐して疑なき能はざる所、此の列座の人と
てんとす。時間ありし、喪憾とす。其也
此の遺稿の排印、孰し多ありの梅湖をるるあり、其
木堂通へ抄写と示せん。人曰く、梅湖の詠を其
来の、其五峯ののこす。其見す、余その行を紀念す
と其友のひき受け、この之れを収めおく。八月三十
一日記

以下
3 丁
白紙

常於甘後苦人始如啜茗欲咬其苦
為君解醜酌
三過

